

うぢくさ
かき島

顛島

天草

暹羅ヨリ
ノ航路

べんて
いあん
あこせ

元和四年十月十二日

七四〇

夜トハ、一日一三ツホドノリテ、其後北コチヘノラハ、ウヂクサカキノ嶋
 ニ著ヘシ、但此嶋ヨリ北南ニ四五里程ニヨコタヘタル嶋ニアフベシ、此
 嶋ノヲシアナノ方ニハ、タテタキ石ノヤウナルモノ多キナリ、是ヲシル
 シトスヘシ、此嶋見付テ後、コシキノ嶋ノ外ヲユカント思ハ、北ノ方ヘ
 楫ヲトルヘシ、然ラハウチヲサカキトコシキノ嶋ヲ見ヘシ、コシキノ嶋
 トイフハ、マハリ十里ハカリノ長キ嶋也、ウチクサカキヨリコシキヘ通
 リタラハ、ハンミチカ其内カ、嶋ノアタリヲ北コチヘムケテノリ、天草ノ
 見ユル所ヘイタルヘシ、サキノヘ船ヲノリテ、天草ノ山四里程ニ乘リ
 テ、北ヘムケテ、北々コチニ楫ヲトラハ、イツモノイワウノ嶋ヲ見付ヘシ、
 ソレヨリ後、人々存知タル路ナリ、
 一シヤムラウヨリノ乗前
 シヤムノ湊ヲ出テ、西々アナゼヘユキテ、トリカチノ山見付テ、其山ニ付
 テマハヤヲキバヤヲノリ、ペンテマデノリ、バンコセイアノヲ少シヲキ
 ヘノルヘシ、其故ハ、ナンバン道一里半ホト沖ニ瀬アリ、バンコセイアハ
 十二ガランブ半トアリ、又高キ山アリ、是バンコセイアノシルシ也、其處

くい
どる
ぶる
こん

ぶある
ばある
じある
ぶある
るる
たうば
でんん

ぶらうび

ヘユク風(チカ)アクハ、アウ(マ)テ鹽ニテユクカ、又地ノ風ヲマツヘシ、ソレヨリク
 イマデ風ムカイテナラズハ、マヘカドペンテヘノルヘシ、乍去クイ迄ユ
 ケハヨシ、クイヨリプロコダウル迄ハ、ヲシアチバヤニテノルヘシ、カマ
 ヘテ、風ヨク庄、鹽ハコチ北コチヘツクホドニトリ、カチヘユカヌヤウニ
 用心セヨ、ヲシアナトヲシアナバヤノアイヲノリ、長キ嶋ヲ見付ヘシ、是
 ヲブル(Pulo Panjang)パンジャウン・バルソト云也、コレヨリナンバン道五里ユキテ
 又嶋アリ、コレハブル・パンジャウン(本ト云)バルタデイルト云フ、爰ハ九ガラン
 ブ十五ミスウトアリ、此二ツ嶋ノアイ、ナンバン道八里アリ、是ヨリヲシ
 アナバヤヲノレ、トリカチヘユクベカラス、其故ハ、ブルパンジャウン・バ
 アルソヲ見レハ、船シタカル、也、ソレニヨリ順道ノラレズ、此ヲナシ道
 ニプロウビト云嶋(Pulo Oub)後ニ見ルヘシ、夜ルニテ見ヘズハ、ブルコダウルト
 西東ニアリ、ツルヘヲウチテ見ヨ、十七ヒロ十五尋若ハ、廿尋アラハ、ブル
 コダウルノ嶋ノ外ニ出タリト知ヘシ、十五十七尋アラハヨシ、右三ノシ
 マノ道スガラ十五十七ヒロアリ、ブルコダウルノ嶋ヲ見ヌサキニチイ
 サキニ嶋アリ、ブルコダウルノ西東ニアリ、此チイサキ嶋ヨリ、ブルコダ

元和四年十月十二日

七四一

元和四年十月十二日

七四二

ウルマテ、ナンハン道八里アリ、此二嶋ノ内ナリ、外ナリ、時ノ仕合次第ニノルヘシ、外ハ廿ヒロ、内十七十八ヒロアリ、又二十五ヒロモアリ、又此二嶋ノソバニ地アリ、此二嶋ヨリ二里沖ニ、十七尋ソコニハチイサキスナトチイサキ貝ノカラマシリアリ、ブルコダウルヲ見テ、カラ地山ヲ見ント思ハ、ブルコタウルノ内ナラハ、北コチノ方ヘノルヘシ、外ヲノルナラハ、北北コチヲノルヘシ、十八廿尋ノ所ヲノルヘシ、廿ヒロノウヘアラハノルヘカラス、又十七尋ノ内アラハノルベガラズ、其故ハ、マチニ作ルテウスビリイト云石ソコニアリ、十四ヒロノ處ニアリ、此石ノ所ハカンホウジヤトチヤンバトノアイ也、此石ノムカイ地ニソウテチイサキ山アリ、是ヨリマンリ岩礁カ、マテナンバン道七八里アリ、マテ上○文チニウスビリイト云石ヨリマンリマテ、ナンバン道十五里アリ、又地ヲ見テカウカインソウテノルヘシ、山ナリニシタガイノリマハスヘシ、此地山ハ北キタコチニアリ、マンリマテ十二尋ノ所ヲノルヘシ、マンリトヲリハ、地山ワレテ見ユル、マンリハ嶋ノワキニ石アリ、此マンリチカクノレバ、城ノコトク、色ハ黄ニ見ユル所九尋十尋ノ處ヲノルヘシ、地ノ

かんぼう
じやんば
ちやんば
まんり

になう島

マンリマテハ、地山高ク見ユル、此地山ハハヅレノヤウニ見ユル、此地ノマンリヨリマンリマテ瀬アリ、其瀬ハ北ワイタトヲシアナニサシテアリ、ヲキノマンリニ山アリ、此嶋ハニナウト云也、此ヲキノマンリノナリハ、長クヒキク見ユル、此嶋ヲキハ廿尋廿五尋アリ、此ヲキノマンリト地ノアイ十二里アリ、此道ヲノレハ機遣ナシ、目ニ見エタルハカリ也、此ヲキノマンリノ沖ヲノレハ心安、瀬ハナヲ沖ニアリ、ソレカラチヤンバノ嶋ヲタツテユケ、此ヲキノマンリハ又地ニ山アリ、一里ノアイ也、乍去ヨキノリマヘハ、ヲキノマンリヲ見ヌヤウニノリタルハ猶ヨシ、其故ハ、此ヲキノマンリノ地ノマヘヌウカナルメウカナルトハ、マテハイカ本ノ道ト云フ、ンモアサシ、三ヒロ四尋下ニ大キナル石アリ、是ヲヨク覺ヘヨ、此地ノマンリヲノル時地ヲ近クノルヘシ、地ヲ二里ホトニ見テノレ、ソレヨリ内モ不苦、其道ハ十一十二尋九尋八ヒロアリ、此地ノマンリヲスグレハアカリナリ、此地ハ北北コチニアリ、此地山ガノリマヘヲシラスルナリ、地ヅウテチヤンバン迄ノレ、小山地ノキハニイクラモアリ、此地山ハ高シ、ワンドウイクウモアリ、水ヲトラバ爰ニテ取ヘシ、此チヤンバンノ山山アシ

元和四年十月十二日

七四三

元和四年十月十二日

乗船之條

- 一 舟子ヲ撰フニ、老中若相交テ好、一日ノ中ニ愚者千人ハ求安シ、千日ノ中ニ智者一人ハ難得、能學シタル行師乗タル船ハ、四方堅固ノ室ニ居ルカ如ク、不學ノ行師乗タル船ハ、湖上薄氷ニ坐スルカ如シ、
- 一 慾有則一里モ行カタシ、義有則千里モ行安シ、
- 一 千町ノ堤モ蟻穴ヨリ崩ル、十丈之船モ由斷ヨリ敗ス、
- 一 波浪不破船、揖取船ヲ損サス、
- 一 大風不損船、由斷損船、
- 一 山高カ故海深キニアラス、山低カ故海淺キニアラス、山ハ是山海^(ハカ)、是海、
- 一 湊ニテ能令思案、乗出^ソハ不可由斷、
- 一 車者前^{ウチ}ノ見テ有徳、船ハ四方ヲ見テ有利、
- 一 高山三里ノ内ニ高帆勿^レ持、陽風吹時入陰、高ク帆ヲ持^ナナカレ、
- 一 千里渡得^テ、一里ニ成^テ由斷スル^ナナカレ、
- 一 大波馳行湊ニ船ヲ入^テ、三日由斷スヘカラス、
- 一 大風ニ船繫^キ、綱碇^ヲタノム^ナナカレ、

- 一 潮ノ滿千^(千カ)ハ、九尺五寸ノ上不増、
- 一 潮ノ滿千、月輪順道、遠近ニ因^テ不同也、
- 一 針向北方萬國皆一同也、是則北辰主磁石故也、因之十方差北辰也、
- 一 乗船針ヲダメス^テ、考北斗ヲ三ツ引^ト三ツ入^ト云、時針ニ定^テ、北斗ニマツスクサゲスミ見^ルニ、針ノサキ右ヘフレハ、左ニ石ヲスリツケ、左ヘフレハ、右ノ方ニスリ付^テ、ヨクタメシテ、其針ヲヂヤウキニ^シ、針ニツモ三ツモ合持^ツ、可也、
- 一 針ト^(ハリノヲモテノハナカダ也)ラウサノツリアイハ、針ノ鐵ノヲモサニ二分ベリニ、ラウサノカミヲコシラユルナリ、
- 一 針ノソバニクロガ子ヲ不置、針箱ニクロカ子クキヲ不用、木クキカ赤カ子クキカヲ用、
- 一 針ノ近處ニニンニク、ヒトモシ、ニラノ類ノクサキ物ヲカズ、誤右具ヲケハ、針不定、
- 一 戰場ニテハ、捨命曝骸、發名譽、船中ニテハ、身助碎顯^身、
- 一 戰場ニテハ、剛ニ揚^テ其名、船中ニテハ、臆ニ得^テ方徳、臆病ニ分別慥^テヲ

元和四年十月十二日

元和四年十月十二日

働ラクヲ船中ニテノ剛トス、

一辰巳ノ間、戌亥ノ間ヲ禍ノ元トス、

一雲ハ風ヨリ生シ、雨ハ雲ヨリ生ス、

一風ハ陰ヨリ生シ、又陽ヨリ生、

一大風ハ必陰陽ヨリ生、

一天上ハ易計、海底ハ難測、

一雨天ニ遠山ヲ近ク見セ、晴天ニハ近山ヲ遠ク見スル、

一黒雲ハ禍ヲナス、赤雲ハ陰ノ月ニワザハイヲナス、

一サガリ雲早クキュレハ大風、不消シテ久クアレハ風輕シ、

一引雲ハ雨ヲ生ス、

一輪雲ヤカテキュレハ、大風ヲ生ス、不消久ケレハ風輕シ、

一大風フカントス前ノ日ヨリ水ヌルム、其故ハ寒熱ノタ、カイニヨツテ

風生、地中ヨリ陽上テ海水ヌルム也、

一雲キュレテハヤキトキハ大風生ス、

一兩日ノ氣ハ悟リ安シ、一日ノ氣ハ悟カタシ、

- 一天氣ハ入日ニ定、一禍ハ月ノ出入ニナス、
- 一若月ハ入ルニ禍ヲナス、老月ハ出ルニ禍ヲナス、
- 一晴天ニ雨ノフルヘキヲ悟安、雨天ニ日ヲ生スルヲ悟カタシ、
- 一草葉濕時ハ陰風生、草葉乾クトキハ陽風生、
- 一陰風ハ地ヨリ生シ、陽風ハ天ヨリ生、
- 一雪中ニハ風力ナシ、雪晴陰風生、
- 一星埋ル、トキハ陰風生、星晴トキハ陽風生、
- 一夕露ハ陰ヨリ生、朝露ハ陽ヨリ生、
- 一雲低トキハ陰風生、雲高トキハ陽風生、
- 一三日霜降テ後、必雨ヲ生、
- 一陽月ニ赤雲有之、三日雨天ナシ、コハ、三月ヨリ
- 一陰月ニ赤雲立、三日禍ヲナス、九月ヨリ陰月トス、二月
- 一陽月ニ紫雲立、三日禍ナシ、
- 一陰月ニ紫雲立、必禍ヲナス、
- 一陽月ニ雨降、風無力、陰月雨ノ後風必生、

元和四年十月十二日

- 一陽月風後雨生ス、一陰月ノ陽風ハ必雨ヲ生、
- 一陽月ノ陰風ハ久カラス、陰月ノ陽風ハ不久、
- 一陽月ハ、巳午ニ雲立テハ風生、
- 一陰月ハ、戌亥ニ雲立風生、
- 一陽月ノ晴天ハ朝ゴチ、夕雨ノ地嵐吹、
- 一陰月ノ晴天ハ夜地嵐生、
- 一南ニ向フ國ハ、戌亥ヨリ地嵐吹出タス、
- 一北ニ向フ國ハ、辰巳ヨリ地嵐吹出タス、
- 一山鮮アサカニソ陽風生、山カクレテ陰風生、
- 一雨足フトクノ陽風生、雨ノ足細ニソ陰風生、
- 一順ニメクル風ハ禍ナシ、逆ニメクル風ハ禍ヲナス、
- 一炎天ノ日出入ニ赤雲立テ禍ナシ、
- 一向雲ハ陰風ニアリ、陽風ニハ向雲ナシ、
- 一大風俄ニ吹止トキハ、必逆風生ス、大風次第ニ吹止トキハ、風ニモトシナシ、

- 一黃雲立テ、三日禍ナシ、
- 一月ノ輪雲ワカハ必雨ヲ生、
- 一日ノ光耀ワカトキハ陽風生、日ノ光薄キトキハ陰風生ス、
- 一霧立、風無力、晴テ陰風生ス、
- 一霞ハ陰ヨリ生、霧ハ陽ヨリ生ス、
- 一暖ナルトキハ陽風生、寒ナルトキハ陰風生ス、
- 一春霞ハ風ヲ包ミ、秋風ハ霧ヲヤフル、
- 一流星禍ナシ、翼ウツ日可吹風ニ向テ飛、
- 一三方ニ雲立テ搖トイヘ、北キタ方ニ黒雲少有テ動トキハ、必陰風生ス、
- 一霜月ヨリ一陽來復シ、五月ヨリ一陰入トイヘ、日ヨリハカルニハ、三月ヨリ八月マテヲ陽月トシ、九月ヨリ二月迄ヲ陰月トス、
- 一秋夜電光ハ禍ナシ、冬夜ノ電光ハ禍ヲナス、
- 一雨フリ出ル時ニ因テ長短ヲハカル、
- 申、子、辰ヲ霖雨トス、此時フリ出ル雨ハナカシ、
- 巳、酉、丑ヲ白骨トス、此時フリ出ハ、ヤカテ日テル、

○ 子、午、戌、ヲ、露照トス、此時フリ出ハ、フリフラス、
 ○ 亥、卯、未、ヲ、半裡トス、此時フリ出ハ、小フリ、ヒルヨ、
 口傳ニ、云、亥卯ノ時アメバラノトメ、ヤカテハレテ何ノケシキモナキ
 ハ、卯ノ時ナレハ、其夜、亥ノ時ナレハ、アケノ日大風大雨アリ、但亥卯ノ時
 フリ出ルニ、半時ホトモフレ、後ハハレテ別ノ子細ナシ、
 一知死期ヲシルコ、一、二、九、十、ハ、子、午、卯、酉、三、四、五、ハ、丑、未、辰、戌、六、七、八、ハ、子、申、
 巳、亥、
 一鹽ノタ、イノ時ヲシルコ、二、巳、三、午、一、未、四、申、兩卯、三、辰、
 一月ヲ見テ大風ヲ知ルコ、
 ○ 三日月ト廿八日ノ月クリ色ニ見ユハ、大風也、又同色ノ笠見ハ、大風也、
 ○ 四日ノ月ノ角ノサキフトク見ハ、其一月ハツヨキ風西ヨリ吹ヘシ、
 ○ 四日ノ月フトク見ユ、又ウゴクヤウニ見ハ、大風ニ雨モソヘシ、
 ○ 四日ノ月ニクリ色ノ輪一ツアラハ風也、何時モクリ色ニ見ハ、風ナリ、
 ○ 月出ル時又入時クリ色ニヒカラスハ、三日目ニ大風タルヘシ、
 ○ 月ニクロキ輪、アヲク又アマタ處中ギレニ見ハ、ツヨキ大風タルヘシ、

○ 月マルキ時輪有テ、其ワノ内ニ少雲アラハ、大風タルヘシ、
 ○ 廿七八日ト又三日ノ月ノツノ、サキアツク大キニトカラス、ウコク
 ヤウニ見ハ、大風ノシルシナリ、
 一日輪ヲ見テ大風ヲシルコ、
 ○ 日輪出マ前ニ雲アマタ日ノ出ル方ニアツマラハ、大風タルヘシ、
 ○ 日出ルトキ黄色ニ見ハ、又大キニ見ハ、日モ明カニアラハ、其日カミナリ、
 大風タルヘシ、
 ○ 日青色ニ出ハ、大風ニ雨ソウヘシ、
 ○ 日ノ中ウツケタルヤウニ見ハ、大風タルヘシ、
 ○ 日色ノ輪カフリタラハ、大風、大雨タルヘシ、
 ○ 日出ルトキ、中ノクホミタルヤウニ見ハ、温氣アル風吹ヘシ、
 ○ 朝日黄色ニ見ハ、村雲下ニタナヒカハ、北風吹ヘシ、
 ○ 日不出マヘカトニ、村雲南北ノ方ヘチラサハ、雨風タルヘシ、
 ○ 日出入ニ青ク見ハ、又村雲アツクアマタトリマハサハ、キヒシキ大風タルヘシ、

○日ノ出ル時常ヨリモ大キニ見ヘハ、三日目ニ大風吹ヘシ、
 日ノマハリニ輪アマタアラハ、大風ノシルシナリ、又色ノ輪一ツア
 リテモ、大風吹ヘシ、
 一星ヲ見テ大風ヲシルト、
 ○天ヲダヤカニメ、流星俄ニキエテ見ヘサルニ於テハ、大風ノシルシナリ、
 ○流星アナタコナタヘトヒユカハ、大風ノシルシナリ、
 ○星常ヨリモ大キニ光リ、又ウコクチラハ、次ノ日ツヨキ風吹ヘシ、
 ○星ツ子ヨリ大キニ見ヘハ、三日目ニ風吹ヘシ、
 ○星或ハデキ星世界ノ四方ヨリウコキ初、一方ヨリ一方ヘ飛ユカハ、キヒ
 シキ風吹ヘシ、星ウコクヤウニ見ヘテ、ヤカテカクレハ、大風吹ヘシ、
 ○星ニアカキ色ノ輪見ヘハ、風也、
 一物ヲ見テ風ヲシルト、
 ○海上ニアワアマタ處ニウカバ、大風ノシルシ也、
 ○天氣ハヲタヤカニメ、海大キニサハカシキニ於テハ、大風吹ヘシ、
 ○ケダモノ、皮ヲタ、キテ、ツ子ヨリモナラハ、大風吹ヘシ、

○蟻サハカシク居處ヲカヘハ、ヤカテ大風吹ヘシ、
 ○牛地ヲカキ、天ニ向テアマヲアケハ、大風吹ヘシ、
 ○鷺處ヲカヘス、シホノトノ海川ノ邊リニ居バ、大風吹ヘシ、
 ビサゴト云鳥海ヲシリソキ河邊ニユカハ、雨風タルヘシ、
 ○村雲、山ノ頂上ニヨラハ、大風ノシルシナリ、
 ○村雲、アマタ日輪ヲトリマハシ、日輪少ハツレテ見ヘハ、大風タルヘシ、
 ○イナツマ東西南北ニアラハ、大雨、大風タルヘシ、
 ○テヲイノ人常ヨリモイタミマサハ、大風ノシルシナリ、
 ○人首頰熱、灯火焰明ニ作聲、俱ニ主大風、
 一四季電歌、
 春天電相對、夏電左右椎、
 秋從電下來、冬電絃其吹、
 一四方電候歌、
 東電長江水、西電日頭紅、
 南電雨如雪、北電南方吹、

元和四年十月十二日

一定逐日惡風知法、此日又出船凶、

正月 一日、三日、八日、十一日、十三日、廿二日、廿五日、
 二月 三日、九日、十一日、十二日、廿四日、
 三月 三日、七日、九日、十七日、廿七日、
 四月 七日、八日、九日、十二日、十七日、十九日、廿三日、
 五月 五日、十一日、十九日、廿九日、
 六月 三日、九日、十二日、十八日、廿七日、
 七月 三日、七日、九日、十五日、廿五日、廿七日、
 八月 三日、八日、十七日、廿二日、廿七日、
 九月 八日、十一日、十五日、十七日、十九日、廿五日、
 十月 八日、十五日、十八日、十九日、廿二日、廿七日、
 十一月 一日、三日、十九日、廿二日、
 十二月 二日、五日、八日、十九日、廿二日、廿八日、
 大ノ月ハ、一日、七日、十一日、十七日、廿三日、晦日、是出船凶、
 少ノ月ハ、三日、七日、十二日、廿六日、是出船凶、

拍子
恭將基雙
六等ノ御
催

十五日、庚午、御日待、例ノ如シ、

〔時慶卿記〕

六十四

十月十四日、天晴、煖氣、禁中御日待ニ被召候御觸アリ、

十五日、天陰、午ヨリ雨、一禁中ニ參上、内々ハ不殘、外様ハ中御、飛鳥井、予父
 子マテ、後ニ久世ト堀川爲御拍子被召候、色々、曇花院殿、竹門、青門、妙門ノ新
 宮等、其外モ皆御連枝ナリ、陽明、桃花勿論、恭、將基、双六等立、柏梁對アリ、曉ハ
 予モ太鼓等依仰、雖辭仕ナリ、誠狂言奇語ノ事ナリ、赤面々々、種々有興、雨ハ
 夜半ヨリ晴、

十七日、天晴、一女御殿へ一昨日ノ珍重申入、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

十月十五日、庚午、雨雪降、忠利參禁中、御日待、

〔言緒卿記〕

十月十四日、己巳、天晴、

一禁中ヨリ言總ニ、明日御日待ニ伺公可申由御觸有之、
 十五日、庚午、雨、
 一言總、御日待ニ召アリ參、文カウ五ツ拜領也、

〔附錄〕

〔智仁親王御記〕

一

五月十五日、日待能アリ、

八條宮家
ノ御日待

元和四年十月十五日

元和四年十月十六日 十七日

十六日、御鬮取アリ、

〔時慶卿記〕

六十四

十月十六日、天晴、一禁中御鬮取、百色ノ物ヲ被出、各賜

唐卷物
縮細
唐糸
巡ノ舞

之、一逸ノ物トモマテ在之、登階水桶等ノ物アリ、少納言ハ桶ナリ、萬里ハ箒也、予ハウツボ三等、炭ハ平野ノ權ノ小副ナリ、又銀金ニ取當衆アリ、白川ハ函、伯ハ唐卷物五、阿野ハ小袖二ツ、同少將ハ銀子小板三十、繁首座ハチリメ、ン二端、四辻ハ登階子、唐糸、其外様々ナリ、不記也、日出以前ニ有御拍子、巡ノ舞等、跳等ノ興アリテ、各一同ニ退出シテ候、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

十月十六日、辛未、曇、忠利退出、御鬮取、沉香一斤拜領、

十七日、是ヨリ先、旗雲及ビ客星、彗星現ル、天文博士土御門久脩、勘文

ヲ上リテ、其凶兆ヲ奏ス、是日、久脩ヲシテ、紫宸殿ニ祈禳セシメ、尋デ、マ

タ皇大神宮、石清水八幡宮及ビ三寶院ヲシテ、之ヲ祈禳セシム、

旗雲現ル

〔孝亮宿禰日次記〕

五

正月十八日、己卯、晴、旗雲現、

二月八日、戊戌、晴、今日午刻、旗雲自西方出、東方出現、

十五日、乙巳、小雨、風吹、酉刻、旗雲東西方引立、

三月七日、丁卯、晴、入夜、旗雲立東西、

客星現ル

閏三月十日、己亥、晴、子刻以後、旗雲東西立、

五月廿二日、庚戌、晴、東方客星出現、其光驚目了、予始見之、

六月四日、辛酉、晴、深更、東方客星出現、

五日、壬戌、晴、東方客星出現、

六日、癸亥、晴、東方客星出現、

九日、丙寅、晴、東方客星有之、

十日、丁卯、亥刻、東方客星有之、

十一日、戊辰、晴、入夜、風吹、東方有客星、

十七日、甲戌、晴、東有客星、

十九日、丙子、晴、東有客星、

廿二日、己卯、晴、東有客星、

廿三日、庚辰、晴、子刻、自丑寅角到辰、巳角、旗雲立、東有客星、

廿五日、壬午、晴、有客星、

廿七日、甲申、晴、東有客星、

廿八日、乙酉、晴、東有客星、

元和四年十月十七日

七五九

七五八

元和四年十月十七日

七六〇

廿九日、丙戌、晴、東有客星、
 七月大一日、丁亥、晴、東有客星、
 二日、戊子、晴、東有客星、
 三日、己丑、晴、東西客星現、但西方今夜不見付之、
 四日、庚寅、晴、東西有客星、
 七日、癸巳、晴、東西有客星、
 八日、甲午、晴、東西有客星、
 九日、乙未、晴、此曉、丑寅角彗星出現、三尺、是忠利初所見付也、東西有客星、
 十一日、丁酉、晴、東西有客星、曉、丑寅方彗星有之、
 十二日、戊戌、晴、東西有客星、西方客星宵間計也、東、自戌刻出、
 十三日、己亥、晴、東西有客星、西方客星戌刻前後不見、每夜如斯、
 十四日、庚子、晴、東西有客星、
 十五日、辛丑、晴、東西有客星、
 十七日、癸卯、晴、東西有客星、
 十八日、甲辰、晴、東西有客星、

彗星現ル

十九日、乙巳、晴、東西有客星、
 廿日、丙午、晴、曉、丑寅方彗星并東西客星有之、
 廿一日、丁未、小雨、東西有客星、
 廿四日、庚戌、晴、東西有客星、丑寅方有彗星、八件彗星自六月廿七日比出現云々、
 廿五日、辛亥、晴、客星并曉彗星如每夜、
 廿八日、甲寅、雨降、客星、彗星出、
 八月二日、戊午、晴、東西有客星、
 三日、己未、晴、東西有客星如每夜、
 四日、庚申、晴、客星如昨夜、
 五日、辛酉、晴、東西旗雲立云々、客星如每夜、
 六日、壬戌、晴、客星、彗星如每夜、
 七日、癸亥、晴、客星如每夜、
 十一日、丁卯、曇、風雨、東西客星如每夜、
 十二日、戊辰、東西客星如每夜、
 十三日、己巳、晴、東西客星如每夜、

元和四年十月十七日

七六一

元和四年十月十七日

廿日、丙子、晴、東西有客星、
 廿一日、丁丑、晴、東西有客星、
 廿二日、戊寅、晝以後小雨、即晴、東西有客星、
 廿三日、己卯、晴、客星如每夜、
 廿四日、庚辰、晴、客星如每夜、
 廿五日、辛巳、晴、東西客星如每夜、
 廿六日、壬午、晴、晚景雨降、東西客星有之、
 九月小一日、丁亥、晴、東西客星出現、
 二日、戊子、晴、東西客星如每夜、
 四日、庚寅、雨降、東西客星如每夜、
 五日、辛卯、晴、客星如每夜、
 六日、壬辰、晴、客星如每夜、
 七日、癸巳、曇、客星如每夜、
 八日、甲午、晴、客星如每夜、
 九日、乙未、晴、客星如每夜、

七六二

十日、丙申、曇、客星如每夜、
 十一日、丁酉、小雨、客星如每夜、
 十二日、戊戌、晴、客星如每夜、
 十三日、己亥、小雨下、客星如每夜、
 十四日、庚子、晴、客星如每夜、
 十六日、壬寅、晴、客星如每夜、
 十八日、甲辰、晴、客星如每夜、
 十九日、乙巳、晴、客星如每夜、
 廿一日、丁未、雨降、客星現如每夜、
 廿二日、戊申、晴、客星如每夜、
 廿三日、己酉、晴、客星如每夜、
 廿五日、辛亥、晴、客星如每夜、
 廿六日、壬子、晴、客星如每夜、
 廿七日、癸丑、晴、客星如每夜、
 十月大一日、丙辰、晴、曉旗雲、東西自西消、東西客星、光如月、

元和四年十月十七日

七六三

元和四年十月十七日

七六四

二日、丁巳、晴、客星如每夜、
 四日、己未、晴、曉旗雲現、客星每夜現未止、
 五日、庚申、晴、曉東西旗雲現、入夜雨降、
 六日、辛酉、雨降、晝以後晴、旗雲、客星出現、
 七日、壬戌、晴、曉如旗雲者有之、自西方消、
 八日、癸亥、晴、客星現、
 九日、甲子、晴、客星現、
 十日、乙丑、晴、旗雲、客星現、
 十一日、丙寅、晴、客星如月光、
 十二日、丁卯、晴、曉彗星出、長五十間客星現、
 十三日、戊辰、曉如旗雲者出、辰方東方彗星出、
 十四日、己巳、旗雲、彗星、客星等出現、
 十五日、庚午、雨雪降、曉彗星現、
 十六日、辛未、曇、曉彗星現、
 十七日、壬申、彗星出、

彗星ノ長
サ五十間

十八日、癸酉、彗星、客星出現、晚雨降、
 十九日、甲戌、晴、彗星出現、客星同出、
 廿日、乙亥、晴、彗星、曉天曇不見、客星出、
 廿一日、丙子、晴、東西客星現、
 廿二日、丁丑、曉彗星現、雨降、晴、客星出現、
 廿三日、戊寅、晴、彗星、客星現、
 廿四日、己卯、客星光如月、
 廿五日、庚辰、曉彗星出、自東方聊如寄北方、
 廿六日、辛巳、曉彗星出、東西客星光如月、
 廿七日、壬午、晴、客星出現、
 廿八日、癸未、晴、夜半以後彗星自丑寅角出、東西客星出、
 廿九日、甲申、彗星出、

〔時慶卿記〕

六十四

十月一日、己辰、天晴、霜深、曉星ヲ見、長巽ノ山ヨリ上十
 丈計、如虹、恠意ノ義ナリ、家中者起而被見之、夜明テ後モ未光殘也、後ニ
 聞シハ早久在之ト、

元和四年十月十七日

七六五

元和四年十月十七日

七六六

十日、天晴、星光大、一客星彌光明長、
廿六日、天晴、一彗（尾短）猶光明ナリ、南ノ方ノハ、去年（元）十三日頃ヨリ不見、
〔言緒卿記〕十月二日、丁巳、朝雨天晴、
一略○中 亥刻ニ旗雲有之云々、
七日、壬戌、天晴、

一昨夜白虹如此中、ハ、一尺計、長數十丈（尺）ノ有之、前代未曾有ノ由、衆人驚申了、

〔梵舜日記〕

二十 十月八日、曇、去九月廿二（日）ヨリ至東辰白雲氣立也、夜中丑

刻終也、諸人見之各恠、恐怖申了、定天文博士可有勘文義也、

十二日、晴、彗星東方ニ出現、至寅刻現、光氣大也、諸人恠也、雲氣与客星同刻也、

〔續南行雜錄〕

祐範記抄 元和四年十月、此叱（比）卯刻東方彗星出現、星一段大也、彗星餘光二丈餘也、先段辰巳方ニ出現、光滅了、度々天變希有也、不思議共也、

〔慈性日記〕

二十九日、夜ノ七ツ過ニ、東ノ山の端三尺程（尺）をあれ候（節）そうき星出候也、ひうりノさき半天ニ及フ、

白虹

彗星奈良ニ現ル

彗星近江ニ現ル

彗星江戸ニ現ル

日本人彗星出現ノ意味ヲ問フ

〔リチャルド・コックス日記〕（歐文材料第十八號譯文）

一六八八年十一月七日、和（元）四年十月十七日ニシテ、予は彗星（即ち遊星）の出でしことを記せざるべからず、こは此五六日、日出數時間前に、少し南方より（東）の東方に現る、併し太陽に近き爲め、極めて長き尾の外何物も見えず、而して少しづつ、南よりの西方へ引けるなり、（下略、江戸ニ在リ、コ）

八日、（元）四年十月十八日ニシテ、当地の人々は、大戦亂の前兆なりとて、巷説紛々たり、多くの人々は、予に、英國にてもかゝる事起りしや、こは如何なる意味なりや、又何の前兆なりやを知らるかと思ねたり、予は之に答へて曰く、是れ世界到る所にて屢見る所にして、其意は神こそ知らぬ、予は知らずと、

九日、（元）四年十月十九日ニシテ、予は彗星、今朝は従前見ざる大いさに現れたり、十三日、（元）四年十月二十三日ニシテ、予は彗星は尾を南西に曳きて、本日迄續けり、

十九日、（元）四年十月十九日ニシテ、日出一時間前、眞東より又一彗星、即ち遊星、天蠍宮座の方に當りて上れるを見たり、是れ大彗星にて、予の考にては、

元和四年十月十七日

七六七

元和四年十月十七日

七六八

ポルトガル王セバスチヤンのバアバリにて殺害せられし際の彗星よりも大なり、○下

二十一日、四年新曆十月十五日ニシテ、元和本夜より第一彗星は見えざりき、十二月二十三日、元新曆十一月十九日ニシテ、此夜以後彗星は再見せず、チャレスワイン即ちウルサマイヨールの第三星の下にて終れり、

〔伊達山治家記録〕

七十 九月廿三日、己酉、今夜ヨリ東方ニ異雲アリ、俗呼テ旗雲ト稱ス、

旗雲彗星
奥州ニ現ル

真山氏記録ニ、九月廿六日夜半過ヨリ、異ノ方ニ、長刀形ノ如クニ雲氣出ル、十月中、自然ニ消ルト云々、廿三日ヲ誤テ廿六日トスル歟、

十月三日、戊午、今夜寅卯ノ方ニ彗星出ツ、

真山氏記録ニ、此夜ヨリ彗星東方山ノ端ヨリ出ル、霜月中ニ消ルト云云、

〔越藩史略〕

三 忠直公 (松平) 秋八月八日、彗星現、

彗星越前
ニ現ル

〔相良家年代記〕

元和四年戊午

此年、冬、中東天ニ客星モユル、東ヨリ西天迄如爲引白布也、

客星肥後
ニ現ル

〔義演准后日記〕

二十 十月四日、去夜旗雲始見之、去月ヨリ立云々、山上衆

旗雲ノ形
狀

恠異當事
ニアラズ

告之、寅刻ニ見之、辰巳角也、日野山ノ嶺ヨリ西へ立也、長三丈計也、嶺ヨリ東ハ不見、横ノハ、四五尺計歟、白色也、末ハ細キ也、北へ少ユカム也、或人云、毎夜如此、立初ハ赤色也云々、恠異非當事、京都風聞以外云々、

八日、彗星東ニ出現、光耀一丈計在之、晨鐘ヨリ聊已前ニ出現、仍光早没、十一月朔日、晴、

今月十二日、寅時、彗星出シ、方其色白、芒光一丈餘、天文錄云、劉向、彗星者天地之旗也、所生皆星之變、所以除舊布新象、又云、彗星見君臣失政、巫咸曰、彗星守房心間、天下有喪君亡不出三年、天文錄曰、彗星出之下、兵流血大疫死、巫咸曰、彗星貫東辟右星、八變五運、百姓不安、其國亡地、不出三年、漢書曰、彗星出東方、將帥誅人主有慎矣、

元和四年十月十四日 從四位上行天文本博士兼左衛門佐臣安部朝臣久脩

又云、白彗金精、臣爭權、主斬族臣、

〔土御門泰重卿記〕

二 十月二日、丁巳、晴、雲氣勘文調進申、從長橋御局上也、

十二日、丁卯、晴、今朝東方彗星始見申候也、家君昨日御番ヨリ御歸こて、予御知候也、

雲氣勘文

土御門久
脩ノ勘文

元和四年十月十七日

七六九

元和四年十月十七日

七七〇

十三日、戊辰、雨天、昨宵五更過こ彗星東方より出申候、日出之時光氣やうよ
廣大こて、長一丈半許、

十四日、己巳、晴、今日彗星之勘文調進申候、從長橋殿御局上申候、

十月十七日、壬申、晴、依天氣、從竹屋家君へ天變御祈禱之事被仰出候由、使來
候、

彗星ノ勘
天文ノ御
天變ノ久
祈禱ヲ命
脩ニ命ゼ
ラル

久脩禁中
ニ祈禱ス
下行米

十一月二日、丁亥、晴、未刻神供道具、諸道具持運也、白絹六疋よて、新敷帷幕出
來、紫宸殿よて疊屏風まで申出候而、今夜行始被申候也、御下行五十石也、予
ハ輕服之故、一切相うまハセ也、天曹地府祭也、

三日、戊子、晴、家君禁中御詰行事也、予吉田へ參越^{（前田忠興）}中守見廻、薄暮振舞過罷歸
候、

四日、己丑、晴、御祈禱同前也、御祈禱料五十石今日相渡、請取申候、

五日、庚寅、晴、御祈禱、主上御聽聞之由承及候、予何方へも不罷出候、

六日、辛卯、晴、今日御祈禱結願也、珍重、御番予參内可仕候由御使アリ、畏候由
御返事申上、晚炊過御番こ參候、召御前、種々御雜談申上候、御兩吟之聯句四
五句被成候、

祈禱御聽
聞アラセ
ラル

結願

謹上 天曹地府十二冥官等 都狀

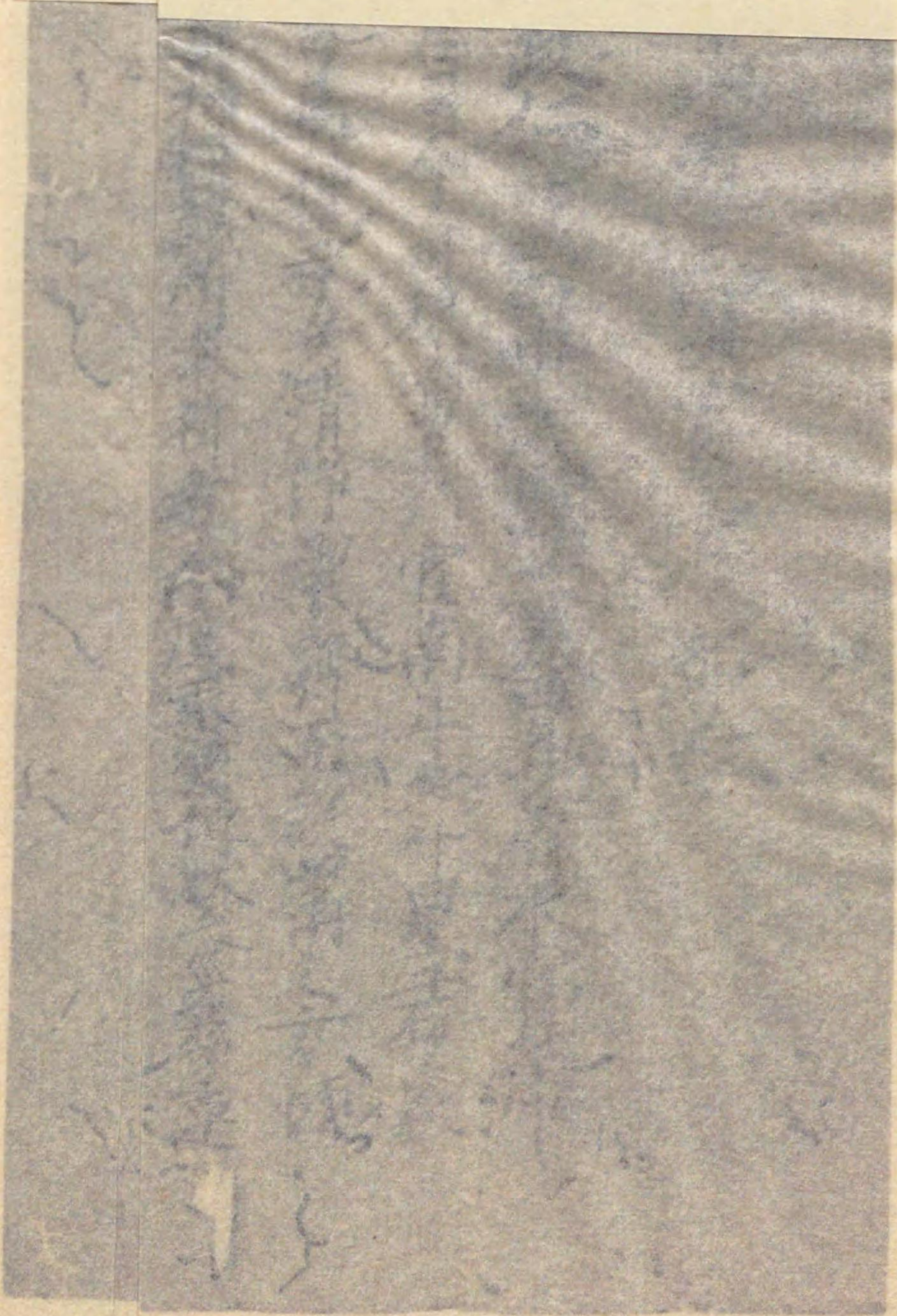
南浮列日本主大王政仁廿三丙申歲謹啟天曹地府水官恭奉
 大玉道大神奉出府君司命司祿曹判官南斗北斗星君家
 親丈人并天祀地祇百萬神等其清淨潔齊而設四角之方壇
 備工座之清供致礼真抽精誠所奉祈者念度乘變地妖之災夢連
 月積日之出現是偏惡人倫者修擊字地動病飢救高之天運地理意
 氣頭平天道其慎此亦輕曰茲願命社稷天道所祈者然天雖有禍難
 避其禍難若又惟有兵難鎮其兵革若又惟有火難道其火災若
 又雖有病難除其疾病轉凶成吉朝廷弥寧國家益無事而
 海扇得風八益則止世而竟天壽日磨光孔堂子血降輝德則使
 古國家飽蒙恩澤其地亦得正度宗廟相貴其敬奉則三之道整
 調而妖孽自消散不可起也於是日本之主政仁於玉體諸神加守護
 夜并昼所於造次顛沛不可有不要變通力之神德之所具特
 祥長傳惡魔降伏物怪不成崇無病息其敷與無疆保龜鶴其椿
 之春秋以籌瀆沙百呼萬歲十其道歲愈朝家敏不昌玉體無恙
 猶以心中諸願悉成就因海而如神明其鏡所奉祈謹啟

元和四年正月

謹上 天曹地府十二真官等 都狀

南浮列日本主大王政仁 廿三丙申歲謹啟美由是府水宮恭奉
 大玉道大神奉出野君司命司稜曹判官南斗北斗星君家
 親丈人并天祀地祇百鳥神等 美清淨潔齋而設四角之方壇
 備工座之清供致礼真抽精誠所奉祈者念度乘變地狀之災夢連
 月積日之出現是偏惡人倫奢侈擊宇地動病飢教高之天運地理
 氣頭平天道其復凶極日茲贖命社天道所祈者雖然大維有禍難
 避其禍難者又維有兵難鎮其兵革者又維有火難遁其火災者
 又維有病難除其疾疫轉凶成吉朝廷弥寧國家益無事而
 海扇淳風公法則止世而光天帝日磨光孔室子血降輝德則復
 古國家飽蒙恩澤天地亦得正度宗廟相貴敬奉則三之道整
 調而妖孽自消散不可起之於是日本之主政仁於玉體諸神加守護
 夜并昼所於造次顛沛不可容不垂變通力之神德之新息特
 祥長傳惡魔降伏怖恠不成崇無病息 敷於無疆保龜鶴美椿
 之春秋以籌瀆沙百呼為歲十 道歲愈朝家敏示昌玉體魚恙
 猶以心中諸願悉成就 海而如神明 鏡所奉祈謹啟

元和四年正月



〔時慶卿記〕

六十四

十一月六日、天晴、

一禁中御祈、久脩被仰出、神壇ヲ取置

テ相濟由候、

〔土御門文書〕

〇一 都城狀

謹上 天曹地府十二冥官等 都狀

宸翰天曹
地府祭都
狀

南浮州日本主大王政仁廿三丙申歲謹啓天曹地府水官北帝、大王、五道大神、泰山府君、司命司祿六曹判官、南斗北斗星君、家親丈人、并天神地祇、八百萬神等、（下同）清淨潔齋而設四角之方壇、備十二座之清供、致禮奠、抽精誠、所奉祈者、今度天變地妖之災孽、（下同）連月積日之出現、是偏惡人倫奢侈、致禮奠、抽精誠、所奉祈者、今度天變地妖之災孽、顯于天道、其愼太不輕、因茲贖人罪於天道、所祈者、縱然大雖有禍難、避其禍難、若又雖有兵難、鎮其兵革、若又雖有火難、遁其火災、若又雖有病難、除其疾病、轉凶成吉、朝廷彌安寧、國家益無事、而四海扇淳風、八紘則上世、而堯天舜日磨光、孔堂孟隣輝德、然則復古國家、飽蒙恩澤、天地亦得正度、宗廟相貴致敬拜、則三之道整調、而妖孽自消散不可起也、於是、日本之主政仁於玉體、諸神加守護、夜守晝守、於造次顛沛、不可有不垂變通力、（下同）神之祈恩、特仁波寶祚長傳、惡魔降伏、物怪不成祟、無病息、（下同）叡齡無疆、保龜鶴靈椿之春秋、如

元和四年十月十七日

元和四年十月十七日

七七四

〔弘誓院〕

十月卅日乙酉、就近日彗星出現、頭左中辨業光朝臣下神宮

御祈御教書

彗星出現、御慎不輕、一七箇日、別而可抽丹誠旨、可令下知神宮給之由、天氣所候也、早可被下知之狀如件、

十月卅日十一月五日

頭左中辨業光

四位史殿注進狀控ハ廳宣并

〔廳宣并注進狀控〕

豐受皇太師宮神主

依官狀 注進致御祈子細之事

右就彗星出現、御慎御祈之事、

今日五日宣下、同日祭主下知、宮司告知、八日、因茲撰吉日良辰、一箇日奉抽懇誠祈謝之旨、注進言上如件、以奏、

元和四年十一月十五日

大内人正六位上度會久吉上

禰宜從四位上度會神主辰彦

正五位下 故彦

新彗星ノ石清水宮御
水ヲ八幡宮
ルニ命ゼラ

- 輔彦
- 常晨
- 貞誠
- 朝雄
- 幸彦
- 廣彦
- 貞久
- 禰宜

〔神廷紀年〕

陸元年 四年戊午十一月五日、丙寅、勅二宮、祈彗星七日、八月、彗星引

付司家日記

〔續史愚抄〕

後水尾院上 十月廿一日、丙子、自今日七箇日、於石清水宮、他諸社

寺同 有彗星御祈、兼勝卿符

○萩原兼從ヲシテ、彗星ヲ紫宸殿ニ祈禳セシメ給フコト、十一月九日ノ條ニ見ユ、客星、彗星、旗雲ノ出現、延イテ翌年ニ及ブコト、便宜左ニ合

〔孝亮宿禰日次記〕

五 十一月大一日、丙戌、晴、彗星、客星現、

元和四年十月十七日

七七五

元和四年十月十七日

二日、丁亥、晴、客星出、曉彗星出、自東方寄北方、
 三日、戊子、晴、客星、彗星出如昨夜、
 五日、庚寅、晴、彗星、客星出現、
 六日、辛卯、晴、客星、彗星等出、
 七日、壬辰、晴、客星、彗星出、
 九日、甲午、晴、客星、彗星出現、
 十日、乙未、晴、客星、彗星出現、
 十一日、丙申、晴、客星、彗星出現、
 十二日、丁酉、晴、客星、彗星出現、
 十三日、戊戌、晚雨下、客星、彗星出現、
 十六日、辛丑、晴、客星出現、
 十七日、壬寅、晴、客星出現、
 十八日、癸卯、晴、客星出、
 十九日、甲辰、晴、客星出、

七七六

廿日、乙巳、晴、客星出現、
 廿一日、丙午、晴、入夜雨降、客星出、
 廿三日、戊申、晴、客星出、
 廿四日、己酉、晴、客星出、
 廿五日、庚戌、晴、客星出、
 廿六日、辛亥、晴、客星出、
 廿七日、壬子、晴、客星出、
 卅日、乙卯、晴、客星出、
 十二月大一日、丙辰、晴、客星出、
 二日、丁巳、晴、客星出、
 三日、戊午、晴、客星出、
 四日、己未、晴、客星出、
 七日、壬戌、晴、客星出、
 八日、癸亥、晴、客星出、

元和四年十月十七日

七七七

元和四年十月十七日

九日、甲子、晴、客星出、
十日、乙丑、雪降、客星出、
十一日、丙寅、晴、客星出、
十四日、己巳、晴、客星出、
十五日、庚午、晚時雨、客星出現、
十六日、辛未、晴、客星出、
十八日、癸酉、晴、客星出、
廿一日、丙子、晴、客星出、
廿二日、丁丑、晴、客星出、
廿四日、己卯、晴、客星出、
廿六日、辛巳、晴、客星出、
廿七日、壬午、晴、客星出、
廿九日、甲申、雪降、客星出、

元和五年正月五日、庚寅、晴、夜雨降、其後又晴、子刻旗雲東西出現、自東消、

十日、乙未、晴、入夜旗雲立東西、
十八日、癸卯、晴、東客星出、
廿日、乙巳、晴、東客星出、
廿二日、丁未、晴、東客星出、
廿三日、戊申、東客星出、
廿八日、癸丑、晴、東客星出、
廿九日、甲寅、晴、客星東出、
二月大一日、乙卯、晴、旗雲戌亥立、東客星出、
三日、丁巳、雨降、東客星出、
四日、戊午、晴、東客星出、
六日、庚申、晴、東客星出、
七日、辛酉、晴、東客星出、
八日、壬戌、晴、東客星出、
十日、甲子、雨降、晚景晴、東客星出、

元和四年十月十七日

光物飛行

十一日、乙丑、晴、東客星出、
 十五日、己巳、晴、夜旗雲立東西、客星東方每夜出現、
 十八日、壬申、晴、客星每夜出、
 廿六日、庚辰、晴、東客星每夜出、
 三月十五日、己亥、晴、晚雨下、東客星每夜出現、戌亥角有客星、
 四月四日、丁巳、晴、戌刻旗雲東西二筋有之、東有客星、
 五月小三日、乙酉、晴、曇、東客星每夜出現、
 八月、庚寅、晴、入夜東有客星、并光物飛行、
 七月小一日、壬午、晴、丑寅角旗雲立、東客星每夜出現、
 六日、丁亥、晴、申刻旗雲東西立、客星每夜現、
 七日、戊子、艮方彗星出現云々、
 十一月廿七日、雨、午晴、曉西方客星有之、

〔梵舜日記〕

二十 元和五年正月十日、陰、○中次旗雲夜中ニ數多立之由也

〔東武實錄〕

六 是年夏ヨリ冬ニ至テ、東南ノ雲間ニ、夜毎ニ白氣アリ、牛角

白氣及ビ彗星水戸ニ現ル

旗雲會津ニ現ル長刀雲

彗星會津ニ現ル

ノ如ニシテ數十丈、又彗星火炎ノ如ク、東北ニ有リ、

〔水城實錄〕

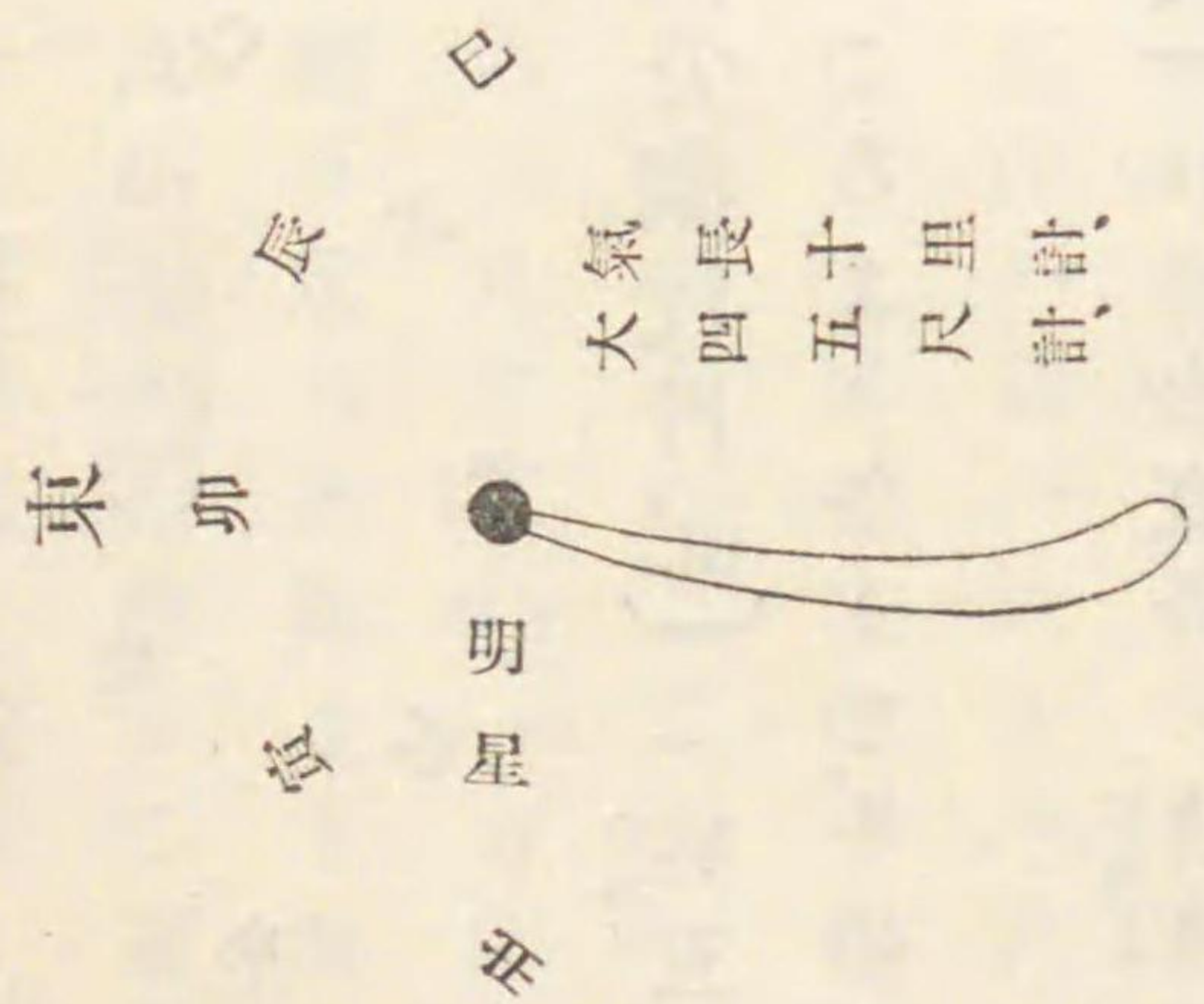
〔元和五年〕是歲、自夏至冬、有白氣於東南之雲間、其形如牛角、長數十丈、又出彗星於東北之間、其芒如火炎、供奉之人皆見之、

〔會津舊事雜考〕

九 〔元和〕五年己未

自九月迄十月十旬、東北有白氣、世長刀雲或旗雲云、

圖



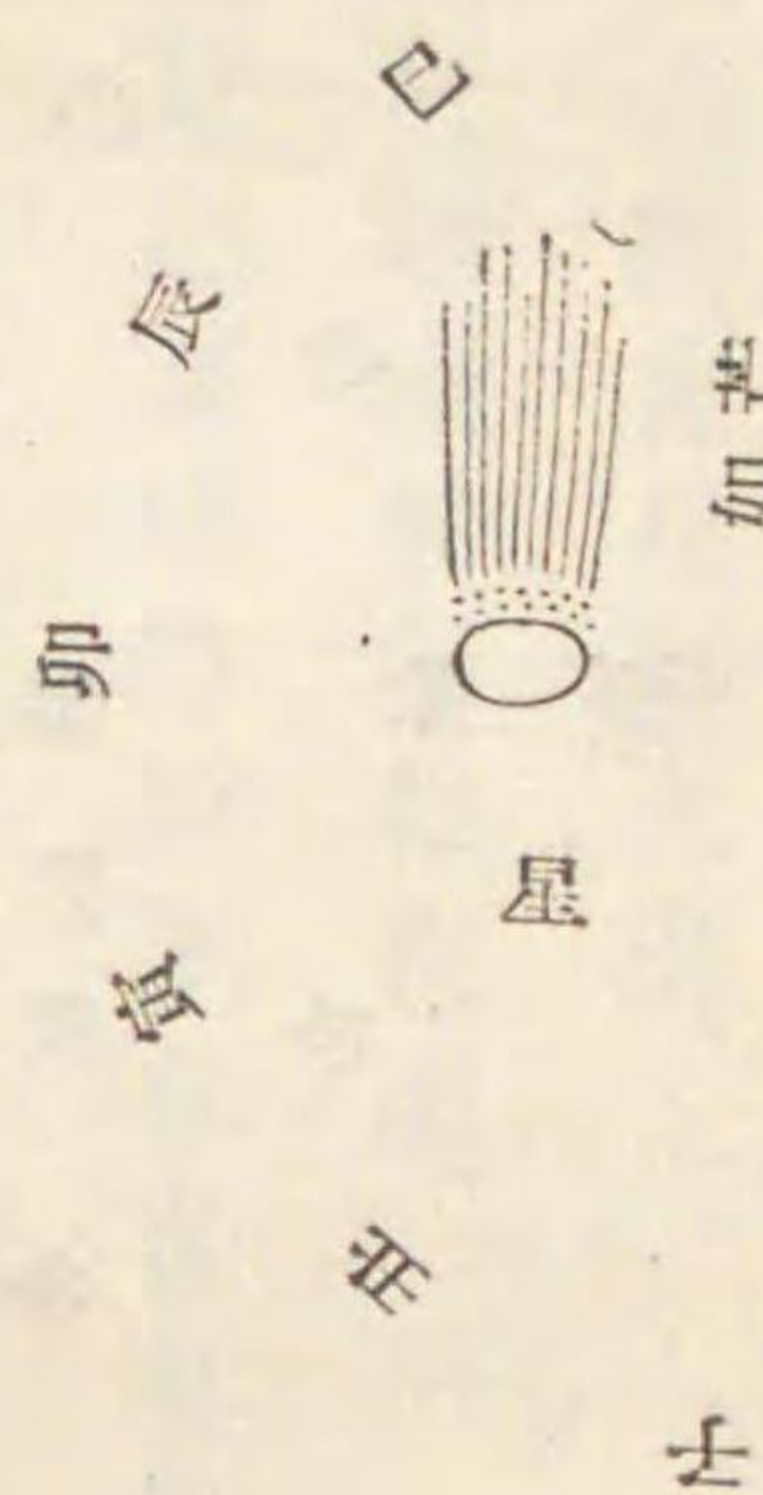
此氣、丑下刻明星出等現、迄巳頃薄見、及午消、

十月自廿三日迄廿七八日彗星出、

圖

此星自長刀雲亦出北云

計長五六尺
如花火云



〔津輕信枚公御代日記〕（元和）己未年

今年夏のころより冬まで、牛の角のことなる白氣東ふ出る、長サ十丈をりなり、

〔越藩史略〕（元和五年）三 忠直公 自夏至冬、毎夜東南白氣、其狀如牛角、長數十丈、亦

有彗星東北在、其色如火炎、

〔加賀藩歴譜〕（元和五年）三 微妙公（常諱） 是歲從夏至冬、巽方夜毎白氣ア

リ、牛角如、長數十丈、又彗星長ノ方ニ出ル、色火ノ如クナリ、

〔宇和嶋伊達家舊記〕（元和）一同五年、秋々冬迄白氣立、形如牛角、

〔假名年代記〕元和己未五年、うんき不し出、長刀不しと云、又とうき不し出

白氣津輕ニ現ル

同越前ニ現ル

同加賀ニ現ル

同伊豫ニ現ル

うんき星長刀星

神龍院梵
舜容星ヲ
祈禱ス
石山寺ニ
テ彗星ヲ
祈禱ス

くまゑんのとし、

〔參考〕

〔梵舜日記〕（二十）十月廿九日、晴、於當家客星之祈禱一七日也、

〔石山寺年代記録〕（中）近江 四年八月、彗星出現、御祈於本堂修法一七日在之、

〔日本耶蘇會年報〕（歐文材料第十九號譯文）

一六一五年、一六一六年、一六一七年、一六一八年、一六一九年の日本、支那、ゴア及びエチオピアの年報、

日本に起りし二三の著しき事件の報告、

當一六一八年、（元和四年）日本に於て起り、同地方よりマニラ市に送り來りし種々なる書翰より集めたる二三の事件の報告、

今年、天地及び四大相舉りて事變を企て、極東の方面に於て、數百年來未曾有の怖るべき不思議と徴候とを現したり、されば、是れ或は大變革の起るべき前兆に非ずやと疑はれしも無理ならざる次第なり、抑も此大變革は、一六二〇年に起ること既に豫言せられし所なり、今爰に聊か東方の二彗

彗星まに
らニ現ル

星のことに就きて述べ、次で我等の言はんと欲する所に及ばん、十一月に二彗星相次ぎて同月中に顯れたり、此は當時最も珍らしく、且つ容易ならざる事と思はれたり、乃ち一六一八年十一月十一日○元和四年九月の十日、此マニラ市の東方に當り一彗星顯れしが、彗星は銀色の尾を曳きて、灰色味を帯び、奇異なる恰好を爲し、ものゝ中に懸れり、何となれば、其は初は角形に見え、稍暫くして大刀又は日本のナ(無カ)ンギナタの形に見え、刃を南に、尖端を北に向けたればなり、又時には掌狀に成り、其長さは子午線より二十度に互り、幅は初め天秤宮を蔽ひて、之と共に一の十字形を作りたり、八日目の終即ち同月十九日○元和四年十月三日には、遙か南方に馳せ、二十四度三十分に至り、乙女宮の尖端中に在る星より上端三十一度、下端十八度に隔りたり、同月二十六日○元和四年十月十日には、上端は四十六度、下端は二十九度に擴がりたり、是れ此彗星の規則正しき運行を示さんが爲めに斯く述べしなり、此彗星の本源を爲す星又は發光體は、發見する能はず、併し小星一個を認めたりと云ふ者もありき、

マニラは、北緯十四度四十分に位し、トロメオの肇めしフォルツナータ島

彗星長崎
ニ現ル

より百(四カ)十九度、メキシコ市より百三度距離り、斯くてマニラの位置の大體を推知し得べく、尙ほ正確にして十分なることは、之を他に就きて求むべし、然るに同月二十四日○元和四年十月八日の土曜日に、又一彗星顯れたり、此は前の星よりも美麗にして光輝ある尾を曳き、其尾端に眞紅なる一星を有し、東方より南方八度に延びて見えたり、此二彗星は約三ヶ月續き、日本に於ても同形に見えし事は、日本滞在の我バードレより報じ來る所なり、此二彗星中の第一星は、十一月八日○元和四年九月二十一日に之を認めたりと云ふ者もありき、之に關しては、モロッカ諸島よりも其通知ありき○中略、右と同様なることを長崎より報せしポルトガル人も多し、就中ルイス・マルチネス・デ・フイゲレド船長は、今度顯れし彗星に關し、左の如く書したり、彼は信用ある人物にして、既に十年來、日本より此島の長官に宛て、オランダ人の事に關する重要な報告を最も忠實に送り來れり、彼の報告は、未だ曾て誤りたることなし、

陰曆(九月カ)二十八日の朝、彗星は十日前のよりも大きく鮮明に顯れたり、燦然たる四星あり、周圍は美しく彩られ、十字形をなせり、四五日を経て、長崎を距

元和四年十月十七日

七八八

最後に、皇帝が、メアコに向け發足せんとせし時、江戸の彼の城の上方に當り、柄附きの刀の如き彗星の、頗る美麗なる十字架を其頂に附けて現れたり、之が爲め、彼は恐怖仰天して、全く其旅行を思ひ止りたり、
フイリッピン諸島、

一六一八年十一月十二日、○元和四年九月十一日、當ル、午前三時、當マニラ市より、一彗星見えたり、そは尾を曳き、銀色にして、幾分淡き灰色を帯び、特異なる形をなしたり、最初は喇叭の如く、次で日本に特有なる武器にして、彎刀に酷似せる「カタン」の如く端を南西に向けしが、最後に棕櫚形となりたり、南西端の傾斜は南に二十度にして、最初其長さは同時に顯れし天秤宮と相等しかりき、八日後、南西端の傾斜は二十四度半にして、此時上端は南三十一度、下端即ち尾の端はスピカ・ビルジニスと稱する星より八度の點に在り、世人中に極く小なるものを認めたりと云ふ者ありしも、星の蒸騰は全く見ざりき、○古代ノ天文學ニ據レバ、十一月二十四日、○元和四年十月八日ニ當ル、他に尾を曳きたる彗星現はれしが、最初のものより美麗にして光輝あり、其頭上に強熱の星ありき、東方に現れ、傾斜八度にして、マララの記號なる南西天蠟

宮の方を指したり、此兩彗星は、三箇月間續きたり、日本、マラカ及び印度等の諸地に於ても見えたる通知ありたり、

〔本光國師日記〕

二十

元和五年正月廿二日、本多上野殿母儀之日也、齋こ

參候、書物見せらる、左に寫有、

題東方瑞氣

春積祝云

瑞氣東、タマノイキ 天上者、ソラニホリシ 天下喜之告、アハメカシタルヨロコビノツケ 心得云、ニ 瑞ハ白色ニシテ、タマ 明ナル故ニ、ツク 白ク綿ノ如ク起上タルヲ、タチノボツ 瑞氣綿々ト古人云リ、スイキ 是レ嘉吉ノ告也、ツグ

題東天星光輝長、スル 瑞光流不滅ト云ハ是レ也、ナカレテスメツセ 此ノ星光ハ、シイテ 東照權現及家康

公之垂跡也、祝語云、

東照御星權現家康代之守護ソナル、ヒガシテルミ 同云、キミ 公ガ代久カナルベキタメ

萬歳々々、至祝々々、

天子ヲ、君ト云イ、大臣ヲ公ト云ナリ、君公トモニキミトヨム、
久敷絶音之條、定而可有御失念歟、餘々御無沙汰之様ニ罷過候間、以使僧令啓達候、何様正月者急度奉參入可得貴意候、然者東方之瑞氣并瑞星出來、(之カ) 儀拙子令卜筮處、大吉之著ニ御座候、依于其拙、(老カ) 祝歌有之書進候、

元和四年十月十七日

七八九

元和四年十月十九日

七九〇

御^(殿)見候者、可爲大慶候、此旨近侍舉達所希也、恐々謹言、

霜月十一日

春積判

本田^(多)上野守^(分)殿近習中

聖興寺

右之書物と文と見せられ候、おうしき事こ而ハあきうと、互こ大目ら
い仕候、これをあまや^(マ)て、文を書、詩を作遣度と御申候而御頼候間、則
相調遣候也、

十九日、^甲新上東門院、御疾アリ、

〔時慶卿記〕

^六四^十

十月十九日、天晴、陰、時雨候、一女院御所、夜中ヨリ御祕

御祕法ノ
御煩
壽徳庵御
藥ヲ上ル

法ノ御煩ニテ苦患候、先以使者申入、又自身參上候、壽徳庵御藥上、御痛少成
ヌト、八條殿御乳人末衆、其外白川、万入道、瑞庵御座候、酒久在候、

廿日、天晴、陰、一女院御所見舞候、

廿一日、天晴、一女院御所御煩、後御快氣ト、

廿二日、天陰、時雨、午晴、一女院御所御見舞、以使者申入、御同篇ト、

廿三日、天晴、一女院御所御見舞、以使者申入、

廿四日、天晴、寒風、女院御所^(ハ)見廻候、

廿七日、天晴、雪散、一女院御所御見舞ナリ、少驗ノ由承、万入被申入、

卅日、天晴、一女院御所見舞候、

十一月大一日、丙戌、天晴、女院御所御禮、又御見舞旁申入、

十二日、天晴、一女院御所御見廻ニ、新中納言被參候、予モ入夜參上候、帥殿
迄申候、御懇ニ被仰出候、

二十二日、^丁猿樂御覽アリ、

〔義演准后日記〕

^二十

十月十二日、來廿日比、於禁中御能、國母ヨリ申御沙

汰、仍兒可有參内由、内々申來畢、依之、光臺院廿一日御成先可延引由仰遣了、

十八日、晚雨、兒御所御出京、近日於禁中女御御能申御沙汰、内々依仰出京、

廿二日、辰刻參内、御能十三番、脇能氷室、紫宸殿主上御座、^{帖、敷、文、二}其西ノ南行

殿下、^{二條}左大臣、^{近衛}大閤、^{鷹司}大納言、^{一條}中納言、^{九條}中納言、^{鷹司左}已上

南行、攝家一烈ニ座給、右座八條宮、^{親王、一品}伏見親王、八宮親王、^兒妙法院新宮、照

高院親王、竹内親王、梶井二品親王、予、青蓮院大僧正、隨心院大僧正、大乘院

一、勸修寺權僧正、西園寺内大臣、已上北方、臂折著座、初獻無出御、二獻度出御、

天盃ヲ天酌ニテ殿下賜之、次左大臣、次八條宮、已下次第也、攝家、大納言、照高

御生母近
衛氏ノ御
沙汰

元和四年十月二十二日

七九一

元和四年十月二十二日

院ノ前ニ賜之、
廿三日、陰、後朝御能如例、各參内、但二條殿下依不例御故障、御方、中納言殿參内、著座次第凡如昨日、

御盃次第事

初日初獻、二條殿下被始之、次左大臣、次八條宮、以下互辭退參了、二獻度天酌ニテ天盃ヲ殿下、左大臣、八條宮、其禮ニ及了、廣橋大納言被出、只殿下參可然由被申、殿下天盃賜之了、左大臣ト八條宮ト其禮再往也、左大臣賜之、次八條宮也、

准三宮与親王座烈次第事

予准后宣已後凡卅餘歳ニ及、照高院親王并梶井親王、竹内親王、此三人ノ上ニ著畢、然處此四五ヶ年以前ヨリ、如此内、親王ノ衆、親王宣下已後ニ准后宣下其例繁多也、然ハ准后ハ親王ノ上タル事無紛者也、其上舊記ニ明鏡ニ在之、關白宣已後准后宣、攝家輩連綿也、既關白サヘ此分也、三公不及沙汰者也、予附弟兒初日令斟酌無參内、國母御不審、依之翌日參内、座列次第、事攝家衆ノ次著畢、盃次第ハ青蓮院大僧正ノ前ニ被參畢、

〔時慶卿記〕

四十

十月廿一日

天晴

一御能ノ用意候

白綾小袖ノ、

、

廿二日、天陰、時雨、午晴、禁中御能、御別殿、女御殿ヨリ御申沙汰ナリ、外様内々不殘、但所勞ノ衆少々在候、參上候處、殿下内、中納言殿、陽明、伏見殿、八條殿、鷹太閣、同中納言殿、門跡達大略御參、親王、准后ノ衆ナリ、西園内府マテ御相伴ナリ、其外堂上（ハカ）ニ無御相伴、今度ハ其、奉行ヲ被付、予ハ御振舞方ノ肝煎ナリ、万里入、正親町三、予、中院宰相、五辻、廣頭辨、高倉少將、已上、又獻ノ衆ハ別、菓子奉行等銘々ニ在候、南殿ノ義ナリ、天杓也、下ハ四品ノ衆迄ナリ、振舞ハ於清涼殿ナリ、侍臣ハ虎ノ間如例、大夫ハ澁谷紀伊守仕、ヲイヌ子モ仕ナリ、十二番、篝ノ後三番アリ、

廿三日、天晴、禁中御能、後朝各參仕、二條殿ヘ御理被申候、照門同、大略各ハ又參上ナリ、如昨御相伴衆ナリ、獻被下、御振舞同前、各肝煎、御能ノ後、如例謠各申候、御トヨリ、御杓ハ陽明殿、御トヨリ過テ入御、
廿四日、天晴、寒風、紫宸殿御トリ置ニ被召、予一人參候、又御拍子アリ、御能ノ役者トモ、太夫同無人ニシテ、内々衆ヲ被加、其外非藏人、鳥飼等ニテ俄ニ掃除候、入夜九番アリ、過テ入御、各一同ニ退ナリ、内々衆又外様當番衆

元和四年十月二十二日

元和四年十月二十二日

モ候ナリ、

〔言緒卿記〕十月廿日、乙亥、陰雨、

一從禁中來廿二日別殿御申沙汰女御ノ御方ニ御座候而、各伺候可申候由御觸有之、予依所勞故障、言總此中毎日他行候間、予代筆ニ加奉了、

廿二日、丁丑、雨、

一禁中別殿女御御方ヨリ御申沙汰ノ御能アリ、予故障、言總參了、

廿三日、戊寅、天晴、

一禁中御能アリ、言總參了、

〔孝亮宿禰日次記〕

五 十月廿二日、丁丑、雨降晴、今日於禁中御能有之、女御

御方御申沙汰也、忠利參内、

廿三日、戊寅、晴、禁中御能、後朝也、

〔土御門泰重卿記〕

二 十月廿一日、丙子、御能之觸到來申候也、

廿二日、丁丑、晴、外様、内々衆不殘御參候、御能始候、

廿三日、戊子、晴、如昨日早天御能始候、各朝參候也、藤松丸長絹、二日共見廻申候、一時許雨降也、見物サワク也、

〔梵舜日記〕

二十 十月廿三日、晴、禁中之御能見物、安立原、木賊、二番見物申、

罷歸也、

二十七日、壬午、故權大納言勸修寺光豐ニ内大臣ヲ贈ル、

〔柳原家記録〕

三十九 兼勝卿符案并御教書

上卿新大納言

元 十月廿七日

故權大納言藤原朝臣

宜任贈内大臣、

〔諸家傳〕

七上 勸修寺光豐 晴豐公男、母有脩卿女、 元和四年十月廿七日、贈内大臣、

幕府、東京渡航ノ朱印ヲ出ス、

〔リチャルド・コックス日記〕

〔歐文材料第二十一號譯文〕

一六一八年十一月十日、○新曆二十日ニシテ、元予は今朝チヤウナ・ジョー
シロー殿を訪ひ、我等の御朱印を得んことを彼に依頼せり、彼は悦んで之

元和四年十月二十七日

茶屋四郎
次郎訪す
こつくす
ヲヒ朱印ヲ
得ンコ

元和四年十月二十七日

七九六

を諾し、予が珊瑚を所持するならば、數個購はんことを望みたり、依て予は所持せる所を送りしが、彼は其中目方九匁四分だけ取りて、代金を予に送らんとせしも、予は之を彼に寄贈せり、

〔ロンドン市インド事務省文書〕

東印度商會通信集 第六卷七四七號

尙々申上候、(東京)とんきんへの御しゆいんにて御座候間、よの國へは御無用にて御座候、(ルナンド)ませんよの國へ御わたり候へは、さきにて、へるなふとのあらためなされ候はつにて御座候、よくく御心え可被成候、又々(ウイリヤム・アダムス)安仁内儀子共たち傳言被申候、吉左衛門殿五六日ゑろへつゝ候てせいに入、御まゆいんとり申候、

一書申上候、仍其元無何事なく御上り被成候や、無御心元存候、然者廿七日に御まゆいん出申候間、へるなふ殿にあつらい越申候間、よくく御うけ取可被成候、此御まゆいんはとんきんへの御まゆいんにて御座候間、よの所は御無用に而御座候、此方よて御まゆいん、事外むつかしく御座候て、ちや屋の庄二郎殿、みなく御としより御きも入候て出申候ま、貴さぬのてまへのふねにてなく候者、よのふねなと御まいたし候事は、必々御無用に

東京渡航
朱印状
ラフ下付
茶屋庄二
郎ノ斡旋

て御座候、万々重而可申上候、恐々謹言、

(元和四年)拾月廿七日

善左衛門(花押)

免かれす

(リチャード・ニコラス)かひたん様人々御中

○本文書、餘白ニ、1618 From Zanzibar Capt. Adams man from Edo with my gohon.

Rec. in Firando le 31th January (一六一八年、(善左衛門)センターゼ發、キャプテン・ア

ダムスの從者、余の御朱印と共に江戸より齎す、平戸にて、一月三十一日受取る)トアリ、

〔ロンドン市インド事務省文書〕

東印度商會通信集 第六卷七四八號

尙々、だいにの御朱印にて御座候間、われらわさと大坂へもち下申候、たしかに御請取可被成候、さためて何事なく御下つき候へく候、御こゝろもとなくそんし申候、こゝもと御用可被仰付候、すいふんく御ちそう可申上候、以上、

態一筆令啓上候、御朱印態我等大坂迄もち候て下候へとも、安仁様はや御下にて候間、あまのや九郎兵衛様へたしかに相渡し申候、たしかに御請取

元和四年十月二十七日

七九七

伊丹屋助
五郎朱印
狀ヲ携へ
テ大坂迄
の赴きま

元和四年十月二十七日

七九八

可被成候、孫右衛門も内儀も、以別紙可申上候へとも、同筆にて御座候、今度は御逗留之内、何たる御馳走をも不申上、無音御殘多事存候、於爰元何成共御用可被仰付候、何もさうはは同じ事にて御座候、何もうりたかり申候、其御心得可被成候、いそき候まゝ、あとなくましくさうは書下可申候、目出度候、恐惶謹言、

十二月三日

ゑけれす

(リチャルド・コックス)
るいちやるかくす

かひたん様 参

大坂々

助五郎

いたみや

助五郎(花押)

いたみや

○本文書、餘白ニ、*IGIS From Skengoro dono of Mino. Rec. in Firado 31th. of January with my seohon* (一六一八年、都の助五郎殿發、平戸にて、余の御朱印と共に、一月三十一日受取る)トアリ、

〔参考〕

〔リチャルド・コックス日記〕(歐文材料第二十二號譯文)

東航朱印
狀下付ノ
翰旋

長崎ノ日
本支那ノ
支那ノ日
朱印ノ下
付請フ

松浦隆信
ノ家臣
朱印ノ其
使傭スル
却長ニ賣

一六一八年十一月三日、○新曆十月十三日ニシテ、元和四年九月二十日ニ當ル、予は急便にて、書狀三通受取れり、即ち十月二日附平戸發、エドモンド・セーヤー及びジョン・オステルウィックの書狀一通、長崎發、支那頭人ホウより一通、平戸の通譯ジョンより一通、共に出來れば、支那人に二通の御朱印を得て貰ひたしとの事に、一は東京、一は高砂宛なり、○中略、キヤぶてん、あだむす、登城ノコトニカクす、和蘭人の不法ヲ幕府ニ告訴スル、九月是月、英吉利甲比丹リチャルど、この條ニ收ム、この時江戸ニ在リ、交趾支那行御朱印を得んと、獻上品を持參せし長崎の日本人三人ありしが、○是日、あだむす、登城ス、又他日出頭すべしとの外何の返答も得ずして、彼等と共に獻上品は返されたり、即ち船長バルナルド・クタロ又はゴタロー、マヌエル・ゴンサルベスの使傭人等なり、十二月、○新曆十月十二日ニ當ル、元予は、予の御朱印賣却の件につき、(茶屋四郎次郎)カウノ・ジョー・ジロー殿を訪ひしが、彼曰く、主馬殿のジャンク船の船長江戸に來り、主馬殿が、彼に予の御朱印を三貫目にて賣れることを報せり、されば此事件にして皇帝に訴へられんか、數人の生命に關すべし、されど彼としても萬事便宜の處置を取るに全力を盡すべければ、予は尙二三日當地に滯

元和四年十月二十七日

七九九

在して、總ての終結を見るを可とす、然らずんば何事もなされざるべしと、
二十八日、癸未、神宮奏事始、

〔孝亮宿禰日次記〕五

十月廿四日、己卯、自頭左中辨業光朝臣、來廿八日可

有神宮奏事始由有示、仍告知祭主種忠、神宮傳奏日野大納言資勝卿也

廿七日、壬午、晴、自祭主種忠、奏事始目錄并款狀到來、就祭主書狀進上之字無

之、仍伴狀返遣了、於目錄款狀者留之、即令付頭辨祭主狀依無進上之字、返遣

由令語頭辨、自祭主付官書狀、往古有進上字、

廿八日、癸未、晴、奏事始、祭主一通書改來、進上字加之

荒木田守宣申、敍爵事款狀一通、此旨可被申上之狀如件、

十月廿七日

神祇權少副判

進上四位史殿

〔官公事抄〕十三

十月廿八日、癸未、晴、

神宮奏事始、

傳奏中御門大納言資胤卿

奉行職事頭左中辨業光朝臣

二十九日、甲申、秀忠、武藏越谷、上總土氣、東金等二放鷹ス、

〔本光國師日記〕二十

一、同廿八日、癸未、駿河へ平四郎并中間五人遣ス、安藤帶直次

刀殿、水野出雲殿へ狀遣ス、案左有、中

態以使札申入候、中、當地相替儀無御座候、公方様、明廿九日遠鷹野之

被成出御候、土氣、東金迄も御成之由之御座候、中

十月廿八日

安藤帶刀様人々御中

右之文言よて、水野出雲殿へも狀遣ス、

一、同廿八日、細川越忠興中殿へ狀遣ス、中、案左有、但廿九日之日付之而遣ス、

内記殿へも之遣ス、

上、公方様、今廿九日遠鷹野之被成出御候、十三四日之比可被成御歸

城由之御座候、中

十月廿九日

金

細川越中守様人々御中

一、同五日、癸未、中、中納言様、安藤帶刀殿へ中泉へ鷹野之御越之由之而、進上之

元和四年十月二十九日

八〇二

蜜柑并帶刀殿へ之狀ハ、慶安ニ渡置由也、
 一同六日、御鷹場へ松首座遣ス、上様へ蜜柑一折三百進上、井上主計殿、水野
(忠元) 監物殿、永井信濃殿狀遣ス、道三、永喜へも狀遣ス、何へもみつらん貳百つ
 遣ス、
 一同八日、松首座御鷹場を歸、上様へ蜜柑仕合能上ケ候、其上主計殿、監物殿、
(同部正次) 備中殿、青山大藏殿へも、みつらん上ケ候由也、
 一同十三日、井上主計殿霜月七日返書、永井信濃殿七日之返書、青山大藏殿
 七日之狀、蜜柑之禮狀也、右之通御鷹場を之返書也、公方様こハ十二日還
 御、此狀ハ今日永喜を被届候也、
 一同廿一日、水野監物殿、霜月七日東金を之返書もとせ來ル、
 一態以飛脚申入候、中 公方様御機嫌能御鷹野を被成還御、廿一日を御數
 寄被爲出候、中

霜月廿三日

金地院

細川越中守様人々御中

〔元和年錄〕

坤 一十月廿九日、公方様越谷の御鷹野、そを東金の御成、數

日御逗留、中 下

一十一月十一日、江戸に還御、中 本書十一日ト

〔東金記錄〕

一御成、中

台徳院様、元和四戊午年十一月被爲成、

〔東武實錄〕

四 十一月、公越谷、葛西、千葉、東金、船橋所々ニ御放鷹アリ、

(十二月) 是月、公所々ノ御鷹狩終テ、江戸ニ還御アリ、中 本書秀忠ノ放鷹ヲ十一月ト
 ン、ナラ

○九月、十一月、秀忠狩ニ赴クコト、便宜左ニ合致ス、

〔リチャルド・コックス日記〕

(歐文材料第二十三號譯文)

一六一八年十月十八日、和四年新曆九月十八日ニ當ル、元キヤブテン・アダムスは
 宮廷に至り、午後中同處にありしが、皇帝狩に赴ける爲め、我等の指令書に
 付きては、何事も爲す能はざりき、中 江戸ニ在リ、
 二十九日、四年新曆十一月八日ニ當ル、中略、元和 皇帝は本日狩獵に赴き、手づから
 雁野生白鳥五羽を獲たり、これを歸廷又は歸城の後、兄弟又は友人に贈る
 爲め持參せられたり、中 下

元和四年十月二十九日

八〇三

十一月二日、○新曆二十五日ニシテ、元和略キャブテン・アダムスは、我等の指
令書の爲め、宮廷に赴きしが、皇帝は放鷹に出で、顧問會は祭日の爲め、何事
もなすを得ざりき、○こつて訴ふる幕府ニ、和蘭人ノ不法行爲アル

〔元和年録〕坤 十一月廿六日、板橋之原へ御鹿狩出御、鹿三十一頭留御

機嫌能還御

〔元和小説〕十一月六日、

一板橋の御鹿狩、卅一頭御留、

〔薩藩舊記増補〕四薩摩家久公御譜中ニ在リ

爲鷹野見廻、小袖五被相贈之、欣然此事候、委曲本多上野介可述候、謹言、

鳥津家久
鷹野見廻
トシテ小
袖ヲ秀忠
ニ獻ズ

元和四年
十一月廿日

秀忠判

薩摩

宰相殿

〔寛政重修諸家譜〕七百六伊達忠宗美作守、○政四年乃冬、台徳院殿よ

秀忠伊達
忠宗ニ鶴
ヲ賜フ

御鷹の鶴を恩賜せらる、上略

〔毛利氏考證論斷〕四代實録二十六十一月六日、大樹御自舉（拳力下同）ノ鶴ヲ兩公ニ賜フ、老公

秀忠毛利
輝元秀就

父子ニ鶴
ヲ賜フ

ハ國ニ在ルヲ以テ、執政副翰シテ萩ニ送ラル、

考證 益田頼母家什書

御奉書之御請如此申候條、其許よて一見候て、可然候ハ、上包候て

尤候、

今月廿六日之書狀、昨廿二日著候、公方様より御鷹之鶴、宿々津々浦々送

よて被作拜領候、誠忝之次第、冥加之至、申も疎候、可有推量候、長門へも御

鷹之鶴拜領之由、父子へ如此之次第有間敷事候、其許上下悦之程察候、

中略之、

十一月廿三日

宗瑞公
御判

益 玄

完主殿

兒玉主計家什書

公方様ヨリ御鷹之鶴之拜領、杳々忝儀此事候、長門へも被遣之由候、面目

之至候、御奉書可披見候、恐々

兒豊前
署名附及ビ

元和四年十月二十九日

八〇五

元和四年十月二十九日

八〇六

論斷

按ニ、兩御書年紀無之ト雖、御家譜年表ニ今年トシ、益田元祥、完道元兼
兩人へ當ラル、モ今年ニ叶ヒ、且先哲ノ考モ今年トス、依テ本文ヲ立ツ、
又江戸ニテ御頂戴ノ日慥ナラサレ、萩へ注進狀今日ト見ユ、當時萬夏
簡易ニテ延引セス、決テ即日ノ注進ナルヘシ、依テ今日ノ條ニ記シヲク、
二十二日、大樹御拳ノ鶴、執政ノ副翰ニテ宿驛ヲ贈リ、今日萩ニ達ス、老公御
頂戴有之、

考證 益田頼母家什書日附、毛利輝元書狀ト同ジ、

〔鍋島勝茂譜考補〕

付ラレシニ付、公ヨリ生三へ下サル、御書ニ云、姉川家 差田、

九月廿日之兩通、具令披見候、中略、

一此比從公方様、御鷹野場より、御鷹野之鶴被作拜領、外聞忝儀可有推察
候、右之御禮、水野監物殿、井上主計殿迄、以使者申上可然之由、本上州、土
井大炊助殿御差圖ニ付而、去四日、山崎與次兵衛申付候、中略、

霜月十九日

信濃守勝茂 御判

秀忠鍋島
ヲ賜茂ニ鶴

生三進候

元和四年十月二十九日

八〇七

三日、戌是ヨリ先、伊勢津城主藤堂高虎、京都ニ之ク、是日、近衛信尋ヲ訪フ、

〔時慶卿記〕

四十

十月二日、天晴陰、夕ニ時雨、一藤堂和泉守、來九日ニ可

爲上洛由、久左衛門物語候、

十八日、天陰、時々時雨、一藤堂和泉守、從勢州城使者長尾右衛門、諸白大樽一、狀被送候、陽明へ御言傳在候、又平松へモ被申越候、夕ニ自身行テ一禮申伸、革單皮三足遣候、則門へ出テ逢候、予其内ニハ不呼、出テ對顔候、普請半故ナリ、

十一月三日、天晴、晚雨、一藤堂和泉、陽明へ參上ト聞、以使者申候、則同心シテ、伏見へ、陽明御越ト、仍跡ヨリ、入夜越候、法性寺殿ヨリ張燈ヲ用、和泉へハヌリ盃トモ遣候、有食、終夜酒、又風呂アリ、長多主馬馳走候、雞鳴ニモ酒アリ、和泉機嫌ナリ、供者已下へモ飯被申付候、烏丸、德勝院、奇齋等御供ナリ、一月ハ不見、一後ニ聞、陽明へ金子十枚進上ト、進藤へ銀子十枚ト、主膳へ五枚ト、

藤堂高虎
近衛信尋
ヲ訪フ
信尋伏見
藤堂第ニ
赴キテ逗
留ス

四日、天晴、和泉守亭ニテ振舞ノ後、舟遊、唐網打、鯉多打ナリ、船中酒茶アリ、謠、誹、偕等ナリ、晚ニ數奇屋會、茶ハ遅櫻ニ、又花鶉籠ニ入、陽明御作水仙與山躑躅ナリ、釜ハ木寺持タルト、水指、土ノ物、薄茶アリ、其後被立座敷、四疊半也、相伴ハ陽明、一條殿、十宮御方、烏丸大納言、予以上五人ナリ、一條殿へ金子一、十宮へ同一進上也、御供シテ飯京也、其外岩倉木工頭へ小判三切、小袖被出候、又侍衆へモ小袖被出候、烏モ前へ被飯候、陽明ハ御逗留也、一女御殿へ參、云々ノ旨申入テ退出候、

五日、天晴、一陽明へ以使者申候、又烏丸大へモ申候、

六日、天晴、一藤堂和泉守ヨリ諸白大樽、古酒白鳥一被贈候、狀返札候、長多主馬使ナリ、陽明へ參リ、會候、又其後以書狀申候、沓五足遣候、一小川小三郎密柑密柑二百入持參候、對面候、

十八日、天晴、嚴寒、一藤堂和泉預狀、密柑五百入桶一給、御參宮ノ事内々被申候、則陽明へ申入テ返申候、棒庵棒庵へモ申遣候、

十二月廿五日、天晴、一藤堂和泉守、伊勢ヨリ諸白大樽一、鯛十被送、禮狀遣候、十右衛門へ申付遣候、

元和四年十一月七日

八一〇

○高虎ノ上京ハ、秀忠ノ女和子入内ノコト、關係アルニ似タリ、京都所司代板倉勝重、傳奏廣橋兼勝ヲ訪ヒ、入内ヲ議スルコト、六月二十一日ノ條ニ、高虎、奈良ニ潛居スルコト、十二月十六日、皇弟庶愛親王御得度ノ條ニ、賀茂宮降誕ノコト、是歲ノ條ニ、宮ノ薨去ノコト、八年十月二日ノ條ニ、和子入内ノコト、六年六月十八日ノ條ニ見ユ、

七日、辰壬從四位上神祇伯左近衛權中將顯成王卒ス、

〔時慶卿記〕

四十

十一月六日、天晴、

一夜半ニ伯絕入、呼聲（イ）事ニ候、仍見舞候、暫蘇生シテ終ニ事切候、言語道斷ノ次第ナリ、中御モ同前ニ見舞ナリ、一時計在之テ飯也、

九日、天晴、一伯葬禮ニ侍一人、下人一遣候、少納言ヨリモ同前、

〔言緒卿記〕

十一月七日、壬辰、天晴、冬至、

一伯中將、昨夜々半時分ニ心痛、頓死也、

〔土御門泰重卿記〕

十一月七日、壬辰、晴、曉伯中將頓死、言語道斷之事、自他驚入候事也、今朝御番退出之時、人相寄申候、則於路次、中御門大納言行逢、具ニ相尋、彌驚魂不斜候、少銀子あつけ申候へとも、予損也、

頓死

土御門泰重
金ヲ白
川顯成
貸ス

〔梵舜日記〕

二十

十一月六日、晴、○中次白川殿息男中將頓死也、

〔白川家譜〕

雅朝王

顯成神祇伯、

女子

雅陳王神祇伯、從二、

女子

顯成王參議正二位

天正十二年六月五日誕生、慶長七年正月六日敍爵、同

八年十一月廿八日元服、同日侍從、同十年正月六日從五位上、同年十一月十七日神祇伯、同十四年正月六日從五位下、同十七年正月五日從四位下、同十八年正月十二日左少將、同廿年正月六日從四位上、同正月十一日左中將、元

和四年十一月七日卒、○諸家傳、

九日、午甲萩原兼從ヲシテ、彗星ヲ紫宸殿ニ祈禳セシメ給フ、

〔梵舜日記〕

二十

十一月五日、晴、午刻過令歸院、次於禁中、客星出現之御祈禱之義、萩原兼從被仰出、來九日可執行之日取也、

日時勘文

十一月九日、甲午、時巳刻、

元和四年十一月

陰陽頭賀茂朝臣友景

元和四年十一月九日

八一

右如此之日取也、(天カ)地文博士之書出也、
七日、晴、廣橋大納言殿、(取カ)萩原兼從、今度彗星御祈禱之爲禮罷、諸白樽、(三)予檳柑
一臺令持參、及面會、御酒被下也、

祈禱料五十石
宗源行事
祭場ニ出御アラセラル
結願
八方拜

九日、晴、於禁中御祈禱、萩原兼從執行、今度彗星之御祈禱也、同料米五十石也、
於紫宸殿執行也、宗源行事壇、八本幣、五色幣、眞神、ビヤウ八ツ、御供八膳、机ニスハル、次御撫物一ツ、絹包、又小包之御撫物四ツ、護摩壇、金銀ノカ子ノ幣二本立、神供一膳、三樹盛、後菜十六、進四、精行者兼從、東采女、西葉盛、役者右近、壇木、役藤四郎、以上神人九人、初日主上御出座也、宗源行事廿一座、護摩七座、一七ケ日内行法也、每日行事三座、護摩一座、七ケ日天度祓千座也、次六十四神之幣、同神號、次御供六十四机備也、柏葉

彗星消ユ

了、奇特皆々被申了、神慮忝々、予令退出了、

〔時慶卿記〕

四十

十一月九日、天晴、一禁中御祈禱、萩原參勤於紫宸殿ノ

義ナリ、

十日、天晴、一萩原へ以使者申候、夕ニ禁中御祈禱ノ護摩ニ參候、神龍院ニモ會候、先刻此亭へ來儀候、暫語候、

十四日、天晴、一禁中へ萩原行法見舞參候、一座ノ間見候、(三)共以前ハ神通ノ物語トモナリ、三輪流、伊勢流トテ在之、大略弘法ヨリノ義ト聞ユ、

十五日、天晴、一萩原へ今朝以使者申候、結願ノ由候、珍重ナリ、一七日ナリ、十七日、天晴、一件星頃光失、

〔土御門泰重卿記〕

二

十一月八日、癸巳、大風、從昨宵也、雨氣、初夜之比、雷電霹靂、大雨須臾許也、吉田ノ萩原、於紫宸殿、神道護摩行始候也、

十四日、己亥、雨降、今夜神道護摩御聽聞ニ紫宸殿出御也、予御取合申上候、十五日、庚子、晴、萩原神道護摩、又宗源行事ふとらさり相構行之、今朝結願之

神道護摩御聽聞

三輪流伊勢流ノ神

彗星光ヲ失フ

元和四年十一月十一日

八一四

由承及候、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

十一月六日、辛卯晴、參關白殿之處、廣橋大納言祇候

被申、彗星御祈吉田家被仰出、然共吉田等元服之間、萩原爲代官、於紫宸殿奉

仕之云々、

九日、甲午晴、於紫宸殿、宗源神通一七ケ日御所有之、吉田家依未元服、爲吉田代官、萩原奉仕之。

利參御撫物役、

廿日、乙巳晴、彗星御祈請文副一通、令付頭辨業光朝臣、

田樂アリ、

〔言緒卿記〕

十一月九日、甲午、天晴、

一言總、從禁中、從女院御所、田樂參候間、可參由有仰、參了、

十一日、丙申、春日祭延引、尋テ、追行ス、

〔弘誓院〕

孝亮宿禰日次記

一

十二月十七日、壬申、雪、春日祭、上卿廣橋中納言、總光、去月延引、不知子細、

〔春日祭歷名部類〕

元和四年

○孝亮宿禰日次記

異事ナシ、

同年十二月十七日、壬申、

祭、式月延引、

上卿權中納言總光

辨不參、

〔公卿補任〕

五十

權中納言正三位同總光

十二月十七日春日祭上卿

〔土御門泰重卿記〕

二

十二月十七日、壬申、雹雪降、春日之御祭之由承及候、

略○中極日之故、予一人先上洛申候、泰重、コノ時キス河、勅使上卿廣橋

中納言行逢申候、長柄輿先ヘカ、セ、烏帽子直垂、張輿乘御下向也、向予

御辭義有之也、

〔春日社記錄〕

○五

春日祭上卿御參向之記

同年十二月十七日

御戸開正預祐、範、奉納權預延豐、

廣橋中納言殿

〔時慶卿記〕

四十

十二月十七日、天晴、備後ハ祭ニ午ヨリ出、作介ハ相煩也、

友甫ヨリ張灯ヲ被持候、

十八日、天晴、春日祭、上卿廣中ナリ、丑刻ニ行水シテ出、未初ニ著參候、果頂

衣ナリ、後ニ衣ヲ忌、聞テ撤、中臣祓心靜讀、上卿漸參向、内府被付候、珍重

候、直會納禮殿ニシテ京ヘ文、一條ヘ言傳候、祭之儀式、神祕等、殊勝ノ義ナリ、

御棚三ツアリ、第一ヲ上卿被昇候、神ノ前ヲ持也、其次皆神主兩人シテ持參

元和四年十一月十一日

八一五

元和四年十一月十四日

八一六

候、作合ニ一脚置候ハ若宮殿ト、神璽以下モ、五脚參リテ奉幣アリ、其後ニ神馬ヲ被牽、三度神前ヲ引廻テ、其後三聲強盜トト呼ナリ、神祕ノ義也、其後上卿神前ノ座ヲ起テ郎ニ被著饗アリ、三々九度土器三ツ參候、大ナル水ヒ抄ノ如、エ永ニテ酒ヲ進、加モ同ヒシヤク也、廊ノ末三間程ノ地下ニ加ハ立テ居、シヤクモ、加、シヤク時ハ、如常銚子ニ仕候、其過テ、前ノ物ヲ撒テ、上卿被起、珍重申テ飯候、予御初尾ハ備後ニ申付候處忘候由、後平三郎ニ申置候、○本書十八日ト爲スハ誤ナラント

〔參考〕

〔續史愚抄〕

五十三

後水尾院上

十一月五日、庚寅、春日祭延引、公卿補任追、○本書五日トナスハ誤ナ

シラ

十二月十七日、壬申、此日被行春日祭、上卿權中納言總光、參向、辨不參、公卿補任抄

十四日、己亥、西園寺實益ノ内大臣ヲ罷メ、權大納言廣橋兼勝ヲ内大臣ニ任ズ、兼勝、武家傳奏元ノ如シ、

〔公卿補任〕

二五

内大臣從一位（藤下尚シ）實益、五十九十一月十四日辭退、

權大納言正二位同兼勝（西園寺）十一月十四日任内大臣、武家傳奏、

〔時慶卿記〕

六十四

十一月十九日、天曇、雪散、一後ニ聞、廣橋内府勅許ト、

廿六日、天晴、雪霰、一廣中ニ禁中ニテ會、内府珍重申入候、

十二月二日、雨天、一廣橋へ出、内府成ノ禮ニ行、諸白一、口細五連遣候、沉醉トテ無對面候、

内府成

拜賀

舞蹈

十一日、天晴、一巳刻ニ廣橋内府拜賀催、ミナ行、所衆、時直、日相公、烏辨等ナリ、先振舞、相伴十八人、亭主、同中納言、辨、中御大、日大、同相公、烏丸大、同辨、予、同時直、清閑寺相公、藤右衛門佐、堀川中將、樋口、竹屋、鷺尾、日野西、松木、山科、極蔭モ三方ナリ、振舞過テ、坊城、中山、冷泉三獻ノ外、又重盃アリテ二反アリ、門ハ初夜ヨリ早當家ヨリ侍三人出、此内一ハ端ヨリ出候、白張ハ申付候處、不入トテ被返候、日野、烏各衣冠ニテ傍路ヲ行、舞蹈見候、天盃間、番所ニ候、飯亭ノ辻ニテ雖被呼、理申テ不入、一樽ハ先日遣候也、

〔言緒卿記〕

十一月十四日、己亥、陰、

元和四年十一月十四日

八一七

一廣橋大納言、今日被任内大臣了、
 十二月大一日、丙辰、天晴、
 一内府へ任大臣珍重之由申、諸白兩樽遣了、
 十一日、丙寅、天晴、

一廣橋内府拜賀有之、言總罷向了、

〔土御門泰重卿記〕

二 十一月十六日、辛丑、晴、昨日廣橋兼勝卿、内大臣ニ轉任之由承及候、

〔孝亮宿禰日次記〕

五 十一月十四日、己亥、廣橋大納言、兼勝、六才、今日内大臣勅許云々、

十六日、辛丑、晴、廣橋内大臣之事令參賀、

十二月十一日、丙寅、晴、今日廣橋内府拜賀有之、樽進上、

〔西園寺家譜〕

乾 實益 (實長) 同十九年正月十四日任内大臣、同日大將還宣旨、

(元和) 同四年十一月十四日辭退、傳同 諸家

〔廣橋家譜〕

坤 兼勝公 (元和) 同四年十一月十四日、六十、任内大臣、

十五日、庚子、前東福寺住持玄長之寂久、

〔五山傳〕

歷代住持籍位次

第二百廿六世、養之名玄長、元和四年戊午十一月十五日滅、莊嚴藏院、

〔五岳前住籍〕

歷代住持位次

(南禪) 二百廿六、養之、諱玄長、莊嚴 派、元和四十一年十五滅、住勢州龍光寺、

〔南禪住持籍〕

城〇山

不住 養之和尙 諱玄長 聖一派 慶長十五年庚戌二月晦日賜帖、元和四年戊午十一月十五日示寂、〇五山碩學并朝鮮所修文職次目五山群編考所見

〔慧日山宗派圖〕

坤

莊嚴門派

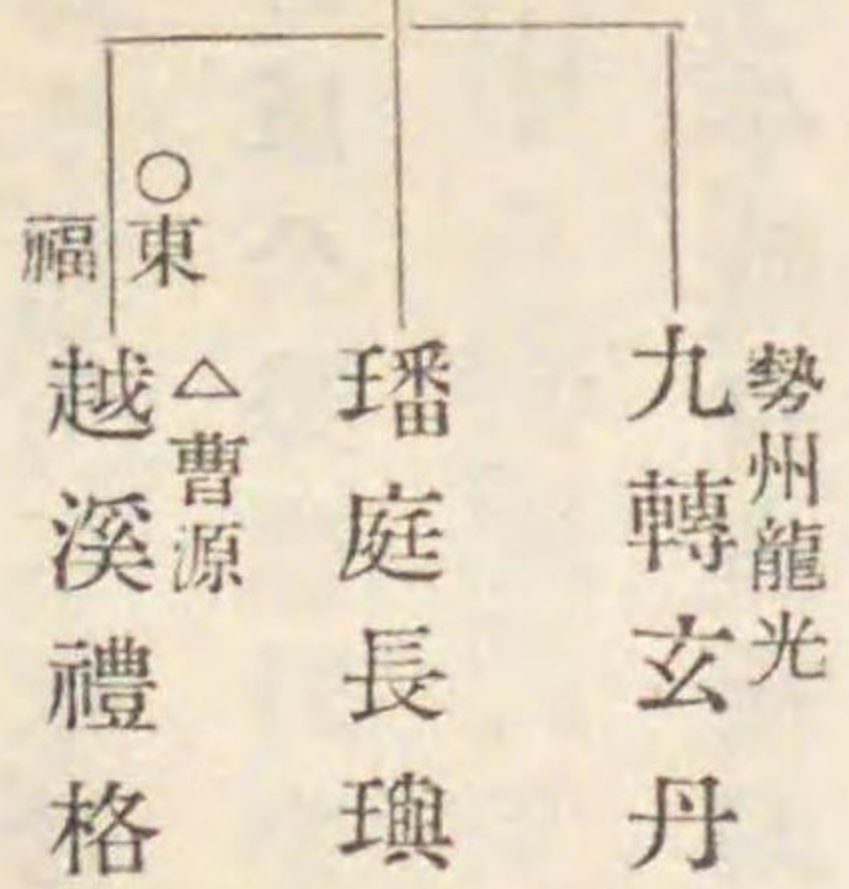
乾峰派下

〇譜中ノ〇符ハ南禪寺ニ移轉セシコト

寺ヲ示シ、△符ハ東福寺塔頭ノ符號ナリ、

賜勢州龍光 紫江菴玄澄

〇東勢州龍光 養之玄長



〇玄長、南禪寺住持トナルコト、慶長十五年二月二十九日ノ條、第十二編 補遺、一所收ニ見ユ、

支那ニ遊

守藤ノ送

〔參考〕

〔集雲和尚遺稿〕

上

養之禪伯從遣唐使企南遊、予分半席者有年于茲、或叱

如兄如弟、或叱爲師爲伴、而今臨別、不耐情、卒賦村體巨代柳枝云、

南遊萬里別交朋、老淚潸然情不恒、平日感公勞應對、半窓風雨十年灯、

十八日、卯、癸內侍所御神樂、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

十一月九日、甲午、晴、自廣橋頭右大辨兼賢朝臣一通

到來、

來十八日可被行內侍所御神樂、任何可被催沙汰之狀如件、

十一月九日

頭右大辨判

四位史殿

〔時慶卿記〕

四十

十一月十八日、天晴、嚴寒、一御神樂無事也、時直御脂

燭ニ參勤候、御劔雅胤朝臣、奉行兼賢朝臣、御簾、御裾、御草鞋鳥、光賢ナリ、脂燭

七人、時直、康滿朝臣、如例內侍所御祝ノ御酒各給也、

其後又御所ノ御祝入麵有之、予ハ當番也、則可候處、時直強テ勤也、一中

御御番申談候、於此亭竹中モ一所ヨリ出仕候、一御城ノヲ鳥來儀、內儀同

心シテ拜ニ參入也、一陽明、桃花御參、相隨ナリ、兩傳參勤候、

〔言緒卿記〕

十一月十八日、癸卯、天晴、

一禁中御神樂、言總爲指燭罷出了、

一御神樂出御、奉行兼賢朝臣、御裾同、御草鞋業光朝臣、脂燭時直朝臣、康胤朝

臣、孝治爲適、信孝、遂長、基音也、言總等也、御劔雅胤朝臣ト云々、

〔土御門泰重卿記〕

二

十一月十八日、癸卯、晴、禁中御神事御神樂、今晚御行

被成候、奉行廣橋頭辨兼賢、御劔ニハ飛鳥井中將雅胤、歌方ニハ五辻父子三

人、琴ニハ高倉中將嗣良、御脂燭衆言緒、時直、康胤、公福、孝治爲適、遂長、秀雄、歌

方ニハ持明院少將、樂之早參衆、内々不殘伺公也、外様衆ニモ、大方ハ朝參候

之由、承及候、通大體書付畢、今夜相寒候也、

二十三日、寅、戊青蓮院門跡尊純ヲシテ、禁中ニ佛眼法ヲ修シ、彗星ヲ祈禳セ

シメ給フ、

〔時慶卿記〕

四十

十一月廿三日、天晴、一禁中脱御修法、佛眼ノ法ト、尊圓親王

ノ被行ト、後ニ、也ト、御脂燭時直勤候、又當番、勤候、禁中ニテ鏡鉞不突

ト云説アリ、如何、此度被用、珍敷作法トモ也、

子こ而可有御座と珍重こ奉存候、九月十二日、内記様方之便宜こ書狀進上申候、十月二日、一左方使者進上被申候刻も書狀進上申候、何も相達申候哉、御下著次第こ、面上を以、萬々可得御意申候、恐惶謹言、

十月廿九日

金

細川越中守様人々御中

當地相替儀無御座候、有樂老も昨廿八日御目見候て御逗留候、拙老儀小屋をまいなうら、心安先有付申候、御心安可被思召候、萬々御著之時分可得御意候、以上、

一十一月朔日、細川内記殿方狀來、朔日早々罷立之由、暇乞之狀也、

一同二日、細川内記殿へ返書遣ス、田半左まで遣ス、

一態以飛脚申入候、御下向珍重こ存候、路次迄御迎こ可罷出候へ共、却而御妨こ成可申と令遠慮、無其儀候、更々非疎意候、公方様御機嫌能御鷹野方被成還御、トニカ略、秀忠、茶ヲ諸大名ニ賜フコ、能時分御下著、御仕合殘所御座有間敷候、カ、ル、略、崇傳、江戸城ニ新第ヲ賜ハリタル條ニ收ム、萬

織田有樂
秀忠ニ謁
ス

忠利歸國
ノコトヲ
崇傳ニ告
グ

々面上を以可得御意候、恐惶謹言、

霜月廿三日

金地院

細川越中守様人々御中

尙々御下向珍重こ存候、内記様へ路次よて可被成御對面と存知候、萬々面上こ可得御意候、已上、

一同廿四日、細越中殿留崎方返書來、彌二郎歸ル、

〔細川家記〕

十五
九

一十月初、小倉御出船、十日比方吉田こ御逗留、御目之

御療治被成候而、江戸へ、十一月廿四日御著座、廿七日御目見被成候、○

忠、忠興ノ眼病ヲ問フコト、
閏三月九日ノ條ニ見ユ、

一十一月晦日、御茶被進、公方様柴の御茶入之御ひろめ被成候、此時忠利君

之御書、

我々此地へ著候ての仕合可被聞候由こ而、壹人殘おろさ候をの下候間申候、去月廿四日、此地こ著候而、同廿七日御目見仕、晦日こ御茶被下候、今度御入り出し候柴の御茶入之御ひらきこ相申、仕合無殘所候間、可心安候、恐々謹言、

元和四年十一月二十四日

八二五

秀忠ニ謁
ス

柴ノ茶入

秀忠茶ヲ
忠興ニ賜
フ

十二月三日

越

内記殿進候

考こ一本、此御書元和二年之所こ出、乍然元和二年十二月九日、民部伊賀守、周防、又右衛門、壽齋、式部少等こ被下候御書こ、昨八日江戸こ令著と可き、此御書ハ元和二年こ可らさる事明白也、

又御眼病被差發候得共、ぬんせいと申眼醫の藥御相應被成候、後々迄此御藥御用ひ之由也、夢想散、又玉命丹とも申候と也、

〔細川家記〕

忠利一

一

一

十月、御暇被仰出、御懇之上意之處、御様子有之、暫御立之儀御見合被成候、此比忠興君ハ、江戸こ御下向之砌ある故、同晦日、右之趣被仰上候、草津之驛こ而相達、其御返書十一月十一日、

已上

去月晦日之書狀、今日十一日於草津被見候、其方御暇被下、色々拜領、御懇之御諒之由、珍重候、早々可被上候處、様子こて少延引之由被申越候、如何様之様子こ而も候へ、我ら其地へ著迄、其地こ逗留可然候、先書こ如申候、其地我ら質物無之候間、此度ハ是非共今少之事候間、可有逗

夢想散
玉命丹

忠利出發
ヲ延期ス
忠興江戸
ニ著スル
マデ忠利
ノ出發シ
ム豫セシ

留候、但其許之様子不存候間、分別次第可然候、我らとまりを申候へ之由被申越候、目之養生之よめ成次第參候間、申遣候共逢申間敷候、我ら其地へ參著おき以前こ、其地被立候ハ、行相次第様子可被申候、別こ手間の入事こ而も有之間敷候、肴兩種給祝著候、恐々謹言、

十一月十一日

越御判

内記殿御返事

右之御返書著不仕以前、忠利君ハ江戸御發駕被成、忠興君江戸こ御著座之上御様子、可被成御聞爲、壹人被殘置候、十二月十五日、中津こ御著城被成候、○忠利、コノ時、中津城ニ居ル、

考こ、關東路いつれの宿おてを、御父子様御對面被成候あるへし、

〔土御門泰重卿記〕

二

二

二

十月十四日、己巳、晴、豊前國守護越中守上洛、則烏丸殿上著、則家君、予見廻申候、

十五日、庚午、雨天、昨日約束よて、吉田へ越中守殿參候、振舞過、越中茶をよてられ候、

廿日、乙亥、晴、金神免札二ツ相調、越中守へ持參申、事之外満足ウリよて候、數

元和四年十一月二十四日

八二七

忠興京都
ニ入ル

金神免札

忠興ノ從
兵三千人
忠利京都
ニ入ル

忠興ノ從
兵三千人
忠利京都
ニ入ル

刻々あし申罷歸候、

廿六日、辛巳、晴、越中守見廻こ吉田へ參候、

廿八日、癸未、晴、從越中守殿使者參候、家君へハ小袖壹重、大樽壹荷、糟漬之あ

まひ、鴨各一桶、予へハ銀子拾枚賜之、外聞實義不過之候、返事仕、使者返申候、

入夜禮父子共參、申おき罷歸候、

十一月三日、戊子、晴、予吉田へ參、越中守見廻、薄暮振舞過罷歸候、

九日、甲午、雨天、午時晴、吉田越中守見廻參候、留守、空罷歸候、

十一日、丙申、晴、細川越中守江戶下向也、朝寢之故見送不申候、残念之事候也、

終日平臥、自病出之故也、

〔梵舜日記〕二十 十月十四日、晴、細川越中忠興自豐前上洛、及面會也、

廿二日、晴、忠興へ檜柑一折令持參也、

十一月十一日、晴、越中忠興江戶下向也、三千計之人數、雜兵カケテ早朝也、

廿一日、晴、中次豐前國細川内記、江戶ヨリ下國也、

十二月 丙辰 盡

三日、戊午梅宮社造營成ル、是日、正遷宮、

〔梵舜日記〕二十 十二月三日、晴、中次今日梅宮四所大明神遷宮也、九條

殿被仰出、當家執行也、名代權少副兼之勤也、次遷宮祝戸、予書遣也、

元和四年十二月三日、戊午掛毛畏幾奉勸請梅宮四所大明神、乃太御神、乃

廣前、仁、恐、美、恐、美、毛、申、佐、久、新、仁、神、殿、於、造、立、シ、天、神、寶、御、裝、束、於、饒、調、豆、殊

仁、波、是、吉、日、良、辰、於、擇、定、天、遷、鎮、女、稱、辭、竟、奉、掛、毛、畏、幾、太、御、神、此、狀、於、平、介

久、安、介、久、聞、(召取)天、祠、官、氏、子、心、中、乃、所、願、一、々、成、就、シ、天、常、盤、堅、盤、仁、夜、乃、守、利

日、乃、護、仁、護、幸、賜、陪、止、恐、美、恐、美、毛、申、壽、辭、別、仁、申、佐、久、吉、時、仁、參、集、留、輩、乃

中、仁、不、慮、外、仁、穢、氣、不、淨、在、武、毛、太、御、神、達、乃、御、心、乃、廣、幾、御、助、介、厚、幾、御、惠

於、施、給、豆、咎、毛、无、久、護、幸、陪、賜、陪、止、恐、毛、恐、美、毛、申、壽、

右此分遣書也、次棟札之書樣、同案書遣也、

座主、祠官、上卿、祝、祠官、

奉造立神殿大檀越、遷宮左兵衛督、守護名代、

本願、

右以上三合ニ如此也、兼右御自筆如此也、

四日、晴、梅宮大明神正遷宮相濟也、權少副兼之、鈴鹿采女佑差越之分也、次祇園之内壽等來、例年之花平餅一重、牛房、錫、雙持來也、次萩原内義、御料人へ御錫、花平餅一重、并檳柑一臺相添進之也、

八日、癸亥禁中米倉火アリ、

〔時慶卿記〕

四十

十二月八日、天晴、大寒ニ入、不曉ニ禁中乾ノ穀藏燒失、

起合、時直同心シテ、内々ノ廊男末ノ邊迄參候、驚申候、又直ニ臺所ヨリ女御殿參上候、五ノ宮ノ御座候良ノ方ノ御殿ナリ、女中衆へ力付申テ火本へ走出、兩傳奏へ逢、火邊ノ可消様子愚存申伸候、半時モ在之テ大形靜時分、又女御殿へ參候、懸御目、云々旨申入、又火本へ出候、夜明テ退散、陽明モ御參ナリ、飯後又參シテ見舞申候、一時計在候、兩傳、其外ハ板伊賀ヲトナ衆、各又女御殿へ參シテ飯ナリ、一女院御所へ參、云々旨申入、方々有使者、木下(利原)宮内、高臺院殿等ナリ、則女御殿へ其上申入、

〔土御門泰重卿記〕

二

十二月七日、壬戌、寒氣甚、又雪降、八日曉七ツ時分ニ

近衛信尋
參内

煙草ノ火
ヨリ發ス
トヨリ發ス
板倉勝重
ノ代官切
腹ノ上東
メ院新ス
給之ヲ止

近衛信尋
夫人奈良
ニ下向ス

禁中御米倉 登ッ燒畢、予白衣よて致伺公候、水酌ヤテ登候也、先後相違有之

トイヘトモ、一人不殘御見廻之躰相見申候、予明離日出候時分私宅ニ罷歸候、不慮之事出來也、殊更米倉火事之珍敷也、但たこ此火よて候ハんと申沙汰有之也、米八百石計燒畢、板倉代官腹切之由承及候、然共女院御所様、國母様、關白殿、板倉へ被仰御留被成、則關白殿御預被成候、
十八日、癸酉、晴、今宵内裏火事あるへしと、上下騒動之由承及候、

〔言緒卿記〕

十二月八日、癸亥、天晴、

一禁中御倉廻同祿云々、

〔梵舜日記〕

十二月八日、晴、大寒入、禁中之米御倉早朝燒失也、御倉一

也、千五石計燒也、

〔孝亮宿禰日次記〕

五

十二月七日、壬戌、晴、寅尅禁裏乾方米穀御倉燒亡、

十六日、辛未、皇弟庶愛親王、宮一乘院ニ於テ、御得度アリ、尊覺ト御改名アラセラル、

〔時慶卿記〕

四十

十二月十二日、天晴、一政所殿へ參候處、今朝南都御下

向候、

信尋西洞
院時慶奈
良ニ下向
ス

藤堂高虎
奈良ニ潜
居ス

庶愛親王
春日社ニ
御參詣ラ
セララル

元和四年十二月十六日

八三二

十三日、天晴、一南都へ陽明御下向候、大聖寺殿同、予モ下向用意志シ、
十四日、天晴、暖氣、南都下向、日用五人、一日七分ツ、ナリ、侍ハ作介、備後ハ
跡ヨリ下、久八ハ已上、下人ハ角内、與一、已上、カ、ル、本年後橋造替ノコトニ
一今朝暇乞ハ勘局、少納言、内儀等來儀、日入ニ南都へ著、先宿取間數刻
町ニ興ヲ立置、先年ノ宿ト又別ナリ、先政所殿へ尋候處、西御所ニ十宮御
方ニ御座候、則參候、御對面、御盃給候、阿野、藪已上六人ナリ、其後ハ陽明へ
參候、入道實朝志一乘院殿へ御出候、則參候處、藤堂和泉守モ、忍テ被居候トテ對顔候、有
酒、少受立也、好仕合ナリ、一宿へ飯處、宿兒一歳、痘瘡十四ニシテ内へ入候
トテ、予藥ヲ乞候、雖斟酌、一包遣候處、得驗候、
十五日、天晴、晚少曇、十宮御方、政所殿、陽明見舞申テ宿へ飯、十宮御方春
日御社參、車乘添中御門宰相、東北院僧正三人同車ナリ、上簾、諸人見物、貴賤
連踏、堂上ハ裏頭ニテ、社頭マテ車ノ前、相隨テ參候、無異儀、儀式歷々珍
重ノ義ナリ、荷輿ノ衆、大聖寺殿、政所殿、、、、、、、在之、裏頭ノ衆ハ内府
万入、正親三中、四辻、阿野、土御門中務、、、阿野少將ハ御簾杏ノ役ナリ、高倉
納言簾ノ役ニト申候義候處、遲參ノ故、阿野少將、重役々、御下向ノ砌、又内府

御得度

御受戒

御戒師

金春孫大
夫ノ能

元和四年十二月十六日

八三三

モ直垂ニ被改テ、御寺へ被參候、予モ急參候而珍重申入テ飯、陽明へ參候、
十六日、天陰、夜霽、又雪、酒、一丑刻ニ一乘院殿へ參候、御得度催、兼日ニハ夜
半トノ義ニ付テナリ、宮御方寅ノ下刻ニ御院へ御渡ナリ、良久シテ事初
ナリ、先著座烏丸大納言、正親三、四辻宰相、戒壇淨心院法印、御簾高倉、脂燭
阿野、高倉兩人ナリ、先童裝束ニテ御著座、戒ヲ被請テ簾中へ被入、次法服ヲ
召、髮ヲ、結分テ被出、戒師ハ大乘院門跡法印、後髮剃ハ法印、信尋少將先著
座ノ後ニ、僧正東北院中ノ座、淨心院ノホヲソナリ、其外寺僧衆ハ後座也、東
ノ方ナリ、十五人ト、可尋候、髮剃ノ、兩人取脂燭候、悉事濟テ、客殿へ門跡
入給、各珍重申入、其後戒師ト一同ニ被著座候、禁裏ノ初テ御禮在候、銀子
三十枚、勅使竹屋辨、女院御所ヨリ御小袖一、樽折、万入、女御殿銀二十枚、大聖
寺殿ヨリ御樽、政所殿、各次第々々ナリ、大乘院殿ヨリ馬太刀、又有繪箱、又
折五合、樽五、荷歷々ナリ、各ハ一束一本ノ御禮ナリ、又馬太刀、又卷物ヲ一束
乘モ在候、一次兩門跡御相伴、内府ヲ始、烏大、万里入、正親三中、予、四辻宰、中
御宰、阿宰、富新三位、高倉、阿少、竹屋、法中ニハ東北院、東北、一次能七番アリ、
金春孫太夫、高砂、田村、松風、花月、船辨慶、天鼓、吳羽、簾中ニテ見候、二番篝ヲ燒

時慶歸京

テ果、一二條殿ヨリ諸白二ツ、小鳥トモ一折給候、十九日、天陰、雪酒、午晴、了左内儀ヨリ法論味噌桶二、平三郎ヨリ同ク金剛五足、金柑六十果被贈候、振舞、了左念入候、長池ニテ晝食候、南都ノ人足五人日用ナリ、日ノ中ニ上著候、以使者女御殿、廣中、竹屋へ申候、召仕者草臥候、一留守ノ間ニ、似運ヨリ漆朱繪ノ折敷二十人前被贈候、狀アリ、留守中ハ長清トモ、徳岡十左衛門等相詰候由候、與兵衛切々見廻候、一竹屋預使者候ト、一二條殿忝旨以使者申入、

〔土御門泰重卿記〕

二

十二月十四日、己巳、晴、

中略、聯句ヲ記シテ、御前ニ上ルコトニカ、ル、年末雜載、

學藝遊戯ノ條ニ收ム、其次明日南都へ罷下候、御暇之申入候、則御心得也、國母さぬへも、御用候ハす候やとうろい申候、單皮十三足、杉原三東用意申候、十五日、庚午、晴、曉罷出候、伏見よて東方えらと申候、晝やそと、長池よて中食仕候、午前也、馬上也、下者七人召連申候、未刻奈良へ下著申候、御社參之時刻、則見物申候、けいこ袴、肩衣、一先へ參候、其次ちやう、烏帽子、上下、但ありし、まゆと長ろとあさし、其次房官騎馬よて、次童子まやうそくして騎馬よて、次寺門衆、其次侍、烏帽子、御車先後數多守護スル也、御車之先へ絹きせとる

土御門泰重奈良ニ下向ス

泰重歸京

引馬行也、車式^{ウチ}上之也、車乘副よハ中御門宰相宣衡卿也、車ヤトリカラハ、タゴシよて、神前まで、タゴシ脇中御門宰相、又阿野少將供也、簾沓之役者ハ阿野少將也、

十六日、辛未、雨天、曉ヨリ絹直垂、烏帽子、一乘院殿參候、三番^{ウチ}ヲイ出時分、得度

之作法始申候、日出時分過と義^{ウチ}式終、珍重、御休息、其後各御禮申入候也、公衆

こハ、廣橋内府、烏丸大納言、正親町三條中納言、四辻宰相、此三人著座也、高倉

中將、阿野少將、脂燭役者也、竹屋辨勅使也、西洞院宰相、阿野宰相、万里少路入

道、富小路三位、中御門宰相、予以上十三人、御禮終御相伴也、大乘院殿座上御

成候、兩門跡互ニ盃取カハシ、内府へ取カハシナシ、公家衆なと也、指ツ、キ

内府之次鳥大學あをり候、其以後御能始候、今春大夫也、門跡、公家同間同座

也、御振舞三膳まで也、ハヤシ役者天下名人也、御能七番有之也、入夜從一乘

院殿、爲兵糧一石半、樽壹荷被下候、兩傳來候、

十七日、壬申、雹雪降、早々昨宵御禮と致伺公、忝之由申、予ハ上洛申候、今日能

有之由被申候、留被申候へとも、極日之故、予一人先上洛申候、中略、春日祭

トニカ、ル、十一月十一日ノ條ニ收ム、奈良四時罷出、私宅へ初夜時分著、事外寒風、長路迷惑申

實光律師記

〔附書〕此寫爲差出候へ共、急候故、跡こ而熟覽候處、如何不宜様こ存候、其元こ而御心附無御座候や、如何、

來十六日、就御得度之儀、任先規、爲御戒師役可致參候由、奉得其意候、此旨洩可預御披露候、恐惶謹言、

十二月十二日

實光

出世奉行御房

〔京都帝國大學所藏文書〕

書一乘院文

尊覺法親王

元和四年十二月三日

戒師金勝院

實光權律師

〔元一乘院〕水谷川家譜

二品法親王尊覺後陽成皇子、二品、

元和四年十二月十六日得度、

〔華頂要略〕

興福寺百四十四一乘院諸門跡傳五

入道尊覺親王後陽成院第十皇子、母中和門院前子、入道前

關白前久公女、興福寺別當、元和四年十二月十六日入寺得度、

〔南市引付〕

元和四年十二月五日、於勸學院邊集會評定曰、

一、今度十宮御所御社參始御得度之儀付、可有御地走旨、從御坊中折紙到來

候間、任其旨、各々可被地走旨一決畢、御所力、下

○皇子十宮、一乘院ニ入室アラセラル、コト、慶長十五年十一月二十

五日ノ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔時慶卿記〕

四十一 十二月十七日、天晴、朝ハ藤堂和泉守數奇ニ被呼、遅櫻

茶入出候、内府、烏丸、万里、予、已上、有跡見、阿野、德勝院、玄仲、友甫等ナリ、又

能七番アリ、竹生島、清經、井筒、道成寺、夜雨月又花月也、道成寺、一番ノ間簾上候、大略和

泉ニ陽明一座一所見物候、及夜檜後院ニ烏丸大被居ヲ尋候、有酒、夜更玄仲、

友甫等相客ナリ、平三郎隨身シテ被居、中樽屋二郎兵衛小兒、以外ノ由

候ニ付テ宿替、平三郎宿ヘ行、了左馳走候、

十八日、天晴、一藤堂和泉ヘ昨禮申處、被呼入食相伴候、人靜ニ被語候、昨日

能出來候通申伸候、又拍子衆モ見舞ト、予ハ先ヘ起、一東北院ヘ陽明被申

藤堂高虎
茶會及ビ
能ヲ催ス

信尋東北
院ヲ訪フ

元和四年十二月十八日 二十日

八四〇

入、和泉參入、御相伴内府、予、徳松○上文、勝院、玄仲、友甫等ナリ、有風呂陽明計
被入、各ハ不入、酒出來、初夜ノ過ニ座敷退散、誹誹佗モアリ、酒、謠、順舞等ナ
リ、及沉醉テ起也、

十八日酉、癸、新上東門院御髮上、

〔孝亮宿禰日次記〕五 十二月十八日、癸酉、晴、女院御髮上、忠利參之、

二十日亥、乙、御煤拂、

〔時慶卿記〕六、四十 十二月廿日、天晴、禁中御煤拂ト、時直參候、各辛勞トテ、

於内侍所食ヲ被下ト、御禮ノ外ナリ、御祝ハ虎間ニテ有之候、予ハ依所勞不
參、

〔土御門泰重卿記〕二 十二月十九日、甲戌、雨天、御煤拂之御觸有之也、

廿日、乙亥、晴、飯後朝參仕候、清涼殿之奉行柳原、竹内、竹屋、樋口、予、以上五人也、
殘ハ所勞トて御理也、藏人二人相加、七人トて御煤拂仕候、外様衆數人常御
所へ被參候、紫宸殿奉行も常御所へ被參候、恒例御祝おとも男すへトて無
之、非藏人共取運、内々御番所又虎間有之也、日暮相シマイ、各退出申候也、

〔孝亮宿禰日次記〕五 十二月廿日、乙亥、晴、禁中御煤拂、忠利參之、

○女院御所及ビ御學問所御煤拂ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔時慶卿記〕六、四十 十二月廿日、天晴、一女院御所へ參候、帥殿へ申置候、御
煤拂ト、

〔孝亮宿禰日次記〕五 十二月十九日、甲戌、女院御所御煤拂、忠利參之、

〔土御門泰重卿記〕二 十二月廿五日、庚辰、晴、各朝參候、御學問所御すハ
き御掃除也、外様番衆アリアヒ相加申候、終日各草臥申候、

廿六日、辛巳、晴、雪洒也、御段子御掃除、目六共出來候也、予御番相兼、仕合也、

〔附録〕

〔時慶卿記〕六、四十 十二月十九日、天陰、雪洒、午晴、一此亭煤拂候、

〔言緒卿記〕二十 十二月十九日、甲戌、朝霧、從巳刻晴、

一煤拂仕了、

〔土御門泰重卿記〕二 十二月廿九日、庚申、煤始拂也、事外いろくしき也、

〔梵舜日記〕二十 十二月廿日、晴、正月煤拂、

二十一日丙、子、御髮上、

〔孝亮宿禰日次記〕五 十二月廿一日、丙子、晴、禁裏御髮上、忠利參之、

元和四年十二月二十一日

八四一

元和四年十二月二十三日

勘文

御髮上之日時

今月十五日 庚午 時申

同 十六日 辛未 時辰

同 廿一日 丙子

御吉方寅与卯之間

元和四年十二月吉曜日

陰陽 賀茂朝臣友景

伊勢長嶋城主菅沼定芳、江戸ニ參勤ス、

〔菅沼家譜〕左近定芳傳

一元和四戊午年十二月十三日發長嶋、同廿一日著江戸、寛政重修諸家譜所見ナシ、

二十三日、寅秀忠、書ヲ薩摩鹿兒島城主島津家久ニ與ヘテ、歲暮ノ賀儀ヲ獻ジタルヲ謝ス、

〔薩藩舊記増補〕四薩摩

爲歲暮之佳祝、小袖十被相送之、驩然候、猶酒井雅樂頭可述候也、

十二月廿三日

秀忠 黑印

秀忠ノ内書

家久蜜柑ヲ獻ズ

薩摩

宰相殿

〔附録〕

〔薩藩舊記増補〕四薩摩 御文庫三番箱中

爲音信密柑十籠被相贈、珍重候、委曲本多上野介可申候、謹言、

十二月廿九日

秀忠判

薩摩

宰相殿

二十七日、壬午除目、

〔公卿補任〕二十

權中納言正三位同總光 十二月廿七日任權大納言、

同爲滿 十二月廿七日任權大納言、

〔柳原家記録〕三十九 兼三十九賢公符案并御教書

元和 四年十二月 廿七日 宣旨

權中納言藤原朝臣 爲

元和四年十二月二十七日

宜任權大納言

藏 (八頭右大辨藤原兼賢) (卷)

〔諸家傳〕

九下

冷泉爲滿本爲房爲長卿男母 元和四年十二月廿七日權大納言十六

〔廣橋家譜〕

坤

總光卿 元和四年十二月廿七日廿九任權大納言

〔時慶卿記〕

六十四

十二月卅日天晴 一廣橋大納言へ諸白一、大納言珍重

モ申伸候、

〔言緒卿記〕

十二月廿七日、壬午天晴、

一冷泉亞相今日勅許被成了、

○廣橋總光奏慶、著陣ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔資勝卿記〕

一 元和五年正月二日、丁亥天晴、明日三日ニ廣橋大納言奏慶

可有之由書狀到來、

三日、戊子天晴、今朝竹屋殿より持太刀借用來、遣申候也、廣橋内府公へ御樽進上候、午刻ニ宰相亭へ向藤向御ふく、此時三條侍從殿兩人も同心申也、先引ハシ、次二獻有之、次廣橋大納言殿へ見廻し直ニ參候也、宰相亭を罷出

衣紋

る處へ、廣亞相より書狀到來、晚衣紋ノ義也、則參て打重ヲ仕候也、盃一獻有之、

夜ニ入、向廣亞相亭、拙子衣文ヲ仕候也、前衣文ハ中御門黃門也、

次見廻之衆、中御門大納言、予、烏丸大納言、中御門中納言、宰相光慶、烏丸辨、東

坊城冷泉少將尙親、鷺尾頭辨、竹屋辨、日野西辨、則獻之、相伴也、

先亭主前引ワタシ如例、次三獻有初獻、次第二獻、三獻、大懸ナリ、獻了テ内府公席へ御

出候也、就夫又五度ノ盃出申也、先内府盃を亭主亞相へ參候也、亞相之盃を

内府へ參候也、其後盃次第ニ通申候也、又同盃ニテ一返トヲリ申候也、内府

公へ陪膳ニ諸太夫無之ニ付テ、亞相息千丸勤之、

參内之次第、松明十二、如木一人、布衣二人、侍傘持壹人、後從頭辨、松明六丁、布

衣一人、侍笠持壹人、

竹屋辨同四丁、同、同、

日野西辨同前、

申次日野西殿、申次了テ後從ニ加テ立、西ノツイチノカタ、殿上ノ南向ノ唐ノトヲリカト覺申候、南上東面ニ立、舞ノ通程也、舞踏ノ間ツクハイ候者也、

元和四年十二月二十七日

八四五

參内ノ次第

奏慶

次舞踏了、無名門ニ進て、此門へハ不入、高遣戸ヨリ昇殿、今日御對面無之、則退出、予則退出申候也、

四日、己丑、巳刻ヨリ雨降、入夜晴、今日竹屋殿より太刀返り申候也、

七日、壬辰、曉ヨリ雨降、及晩少晴、又雪霰ニナリ、ツモル程の事ハ無之、廣橋大

納言、愚宅ニテ東帶有之、予劔ヲ借用、今夜著陣有之、參仕辨竹屋、四辻中納言

今夜奏慶有之、則著陣有之、參仕辨同前、端座、餘リニ南ヘヨリ、柱ノ程ナリ、如

何、又沓ヲモ被仰官人了、

〔孝亮宿禰日次記〕五 元和五年正月四日、己丑、雨降、廣橋總光 昨日大納言

拜賀有之、二ヶ兩種進之、

〔言緒卿記〕 元和五年正月四日、己丑、雨、

一廣橋中納言、舊冬十二月廿七日ニ任大納言之間、今日桶樽、昆布貳束、鴨番

遣了、使大澤左衛門大夫、

六日、辛卯、天晴、

一廣橋大納言ヨリ昆布貳束、鱈五ツ、桶樽給了、

新上東門院、土御門泰重ヲシテ、皇弟好仁親王ノ侍讀タラシメ給フ、

著陣
四辻季繼
奏慶著陣

御生母延
衛氏泰重
ヲ召シテ
女院ノ思
ヲ召ルヘ

〔土御門泰重卿記〕二 十二月廿七日、壬午、晴、從國母様召候、則致伺公、一乘

院殿御禮申入候、國母様被仰候也、(好仁親王)三宮御讀書師範御頼被成候、ん由、從女

院御所被仰候間、其心得仕候て、無異儀御返事可申入候て可然之由仰候條、

畏之由申上候、夕供御御相伴よて被下候て、退出申候、

是月、尾張名古屋城主德川義利、直義駿河府中城主德川頼將、宣頼江戸ニ參勤

ス、

〔本光國師日記〕五 二十(十二月十七日) 一同日、尾張、駿河兩中納言様御下向之由付、路次迄

平四郎を遣ス、帶刀殿、出雲殿、竹慶安へ狀遣ス、成瀬隼人殿、竹腰山城殿へ

も狀遣ス、崇傳、コノ時江戸ニ在リ、

一同日、平四郎藤澤分助六戻、捻越、(同十八日)

一同日、平四郎歸ル、(同十九日)

〔編年大略〕乾 元和四年戊午、

一冬、公又江戸御下向、

〔別敬公實錄〕二 是年、公如江戸、(元和四年)

〔尾君御系譜〕 義直公 一同冬、又江戸御下向、(元和四年)

〔和歌山伊〕
 德川家譜
 年頼宣
 元和四年戊午
 公十七歲

元和四年十二月是月

八四八

第九十二之編第二十第

頁	行	正	誤
見次 一一 二九七	一 見出シ	直茂卒ス、ノ下ニ(鍋島直茂畫像 同書狀)ヲ加フ、	直定
二八七	二	肥後熊本	豊前小倉
三六一	一〇	三五	二〇五
五五四	一五註	四郡右	四郡
五七九	一	三・五	五〇四
七〇八	一〇	十九日	二〇五
八四五	二一四	縣召除目次第ヲ削ル	二十日
一八〇	見出シ	小堀正一	議、 一〇日 十五 ト議シ、 書寫ス
一八八	六	穴山信友	公家衆
二〇二	六	空沙日	小堀政一 穴山信君
五〇八	一〇	(白河顯成)	空涉日 (白川顯成)
五四二	見出シ	真田信之	保科正光 (曾我尙祐)
五六四	八	(曾根尙祐カ)	

昭和四年十二月二十六日印刷
 昭和四年十二月二十八日發行

(大日本史料第十二編之二十九頁付)

豫約價金七圓

著作
 所有

12-29

編纂兼
 發行者
 東京帝國大學

印刷者
 黎明堂岩井龜次郎

東京市神田區小川町一番地

發行所
 東京帝國大學
 學文學部
 史料編纂所

(電話小石川(85)七〇二番)

元和四年十二月是月
 〔和歌山伊〕
 德川家譜 年頼宣
 元和四年戊午 公十七歲

八四八

正		誤		正	
頁	行	頁	行	頁	行
三二一	二	三十八年	一五	九	十一日
三二四	一三	五家次	三	一〇	ト議、
二九	五	(藤堂商虎)	見出シ	九四	寫ス書
四一	一四	聖蘇會	一三	一三一	公卿衆
二八七	二	肥後熊本	見出シ	一八〇	小堀正一
三六一	一〇	三五	六	一八八	穴山信友
五五四	一五	註 四右	六	二〇二	空沙日
五七九	一	三 五 十	一〇	五〇八	(白河顯成)
七〇八	一〇	十九日	見出シ	五四二	真田信之
八四五	二一	縣召除目次第ヲ削ル	八	五六四	(曾根尙祐カ)
					(會我尙祐)
					保科正光
					(白川顯成)
					穴山信君
					空沙日
					(白川顯成)
					保科正光
					(會我尙祐)
					小堀政一
					公家衆
					書寫ス
					ト議シ、
					十五日
					寫ス書
					公卿衆
					小堀正一
					穴山信友
					空沙日
					(白川顯成)
					保科正光
					(會我尙祐)

昭和四年十二月二十六日印刷
 昭和四年十二月二十八日發行

(大日本史料第十二編之二十九與付)

豫約價金七圓

著作
 所權有

12-29

編纂兼
 發行所
 東京帝國大學

印刷者
 黎明堂岩井龜次郎

東京市神田區小川町一番地

發行所
 東京帝國大學
 學文學部
 史料編纂所

(電話小石川(85)七〇二番)

元和四年十二月是月

〔紀伊山德川家譜〕

年頼宣譜

元和四年戊午

公十七歲

冬、東觀

八四八

大日本史料 第十二編之二十九終

昭和四年十二月二十六日印刷
昭和四年十二月二十八日發行

(大日本史料第十二編之二十九與付)

豫約價金七圓

著作
所有

12-29

編纂兼
發行者

東京帝國大學

印刷者

黎明堂岩井龜次郎

東京市神田區小川町一番地

發行所

東京帝國大學
文學部

史料編纂所

(電話小石川(85)七〇二三番)

大日本史料
大日本古文書
既刊目錄 (昭和四年十二月現在)

大日本史料

第一編 (平安時代)	第一卷至第六卷	宇多天皇仁和三 年八月ヨリ 朱雀天皇承平五 年十二月ニ至ル	六冊
第二編 (平安時代)	第一卷	一條天皇寬和二年六月ヨリ 正曆四年六月ニ至ル	一冊
第三編 (平安時代)	第一卷至第三卷	堀河天皇應德三年十一月ヨリ 嘉保二年十一月ニ至ル	三冊
第四編 (鎌倉時代)	第一卷至第十六卷	後鳥羽天皇文治元年十一月ヨリ 仲恭天皇承久三年七月ニ至ル	十六冊 (完)
	補遺 (別冊一)	建久四年正月ヨリ 建仁三年十二月ニ至ル	一冊
第五編 (鎌倉時代)	第一卷至第六卷	後堀河天皇承久三年七月ヨリ 後醍醐天皇元弘三年五月ヨリ	六冊
第六編 (建武中興及南北朝時代)	第一卷至第廿四卷	後醍醐天皇正統二年二月ニ至ル 後村上皇貞治二年二月ニ至ル 後光嚴天皇貞治二年二月ニ至ル	廿四冊
第七編 (室町時代)	第一卷至第二卷	後小松天皇明德三年閏十月ヨリ 永祿四年十二月ニ至ル	二冊
第八編 (室町時代)	第一卷至第十四卷	後土御門天皇應仁元年正月ヨリ 後明和十四年十二月ニ至ル	十四冊
第九編 (室町時代)	第一卷	後柏原天皇永正五年六月ヨリ 同六年九月ニ至ル	一冊
第十編 (安土時代)	第一卷	正親町天皇永祿十一年八月ヨリ 同十二年二月ニ至ル	一冊
第十一編 (桃山時代)	第一卷至第二卷	正親町天皇天正十年六月ヨリ 十一月ニ至ル	二冊
第十二編 (江戸時代)	第一卷至第廿九卷	後陽成天皇慶長八年二月ヨリ 後水尾天皇元和四年十二月ニ至ル	廿九冊

東京帝國大學
史林齋
昭和四年十二月現在

大日本古文書

編年文書

第一卷至第六卷 大寶二年十一月ヨリ 寶龜十一年ニ至ル

第七卷(追加一)至第十八卷(追加十二) 和銅二年六月ニ至ル

家わけ文書

- 第一 高野山文書
- 第二 淺野家文書
- 第三 伊達家文書
- 第四 石清水文書
- 第五 相良家文書
- 第六 觀心寺文書
- 第七 金剛寺文書
- 第八 毛利家文書
- 第九 吉川家文書
- 第十 東寺文書
- 第十一 小早川家文書

幕末外國關係文書

第一卷至第十九卷 嘉永六年六月ヨリ 安政五年四月上旬ニ至ル

四十九冊	二冊	二冊	二冊	四冊	一冊	一冊	二冊	六冊	十一冊	八冊	一冊	六冊	十二冊	六冊

XXI.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 94.

November 10. [1618]—I went to Chawna Shogero Dono this morning to desire hym to get out our *goshon*, which he promised me he would, and desired to buy som corall of me, yf I had any. Soe I sent hym that which I had, out of which he took 9 *mas* 4 *condrin* wight, and would have sent me money for it; but I gave it hym. * * * * *

XXII.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 92, 95.

November 3. [1618]—I received three letters per expres, viz. :—
1 from Ed. Sayer and Jno. Osterwick, dated in Firando, 2th October;
1 from Capt. Whaw, China Capt., at Langasaque; 1 from Jno. *Jurebasso* at Firando—all to sett out 2 *goshons* for Chinas, yf I can, one for Tonkin, and other for Taccasanga. * * * * *

There was 3 Japons of Langasaque with presentes to get out *goshons* for Cochinchina; but they and their presentes were sent away without any answer, but that they might com an other tyme, viz. Capt. Barnardo, Cutarro or Gotarro, Manuel Gonzalves man.

November 12.—I went to Cawno Shogero Dono about the report given out of selling my *goshon*, and he tould me that the capt. of Semi Donos junck is com up and witnesseth that Semi Dono sould hym my *goshon* for 300 *taies*; so that, yf the matter should com in question before the Emperour, it would cost som men their lives. Yet, for his parte, he would doe the best he could to amend all, and said it was better I stayd here 2 or 3 daies to se all ended, for, yf I went away, nothing would be donne.

XXIII.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 85, 91, 92.

October 18. [1618]—Capt. Adams went to Cort remayning there all thafter nowne; but themperour went a fowling, soe nothing was donne for our dispach. * * * * *

October 29.— * * * * *

The Emperour went this day a fowling, and with his owne handes kild 5 elkes (or wild swans), which coming out to send them abroad to his brothers and frendes (after his retorne to his pallace or castell), * * * * *

November 2.— * * * * *

Capt. Adames went to Cort to get our dispache, but themperour was gon out a hawking and the Councell a feasting; soe nothing was donne.

Nella Città di Yendo, che è Corte dell'Imperatore apparue vna Cometa in figura di Nanghinata, che e vna sorte di scimitarra Giaponese, nel cui piede si formaua vna Croce perfetta; della quale restò l'Imperatore sì impaurito, che essendo di partenza alla volta del Meaco, differì per all'ora il viaggio. E si dice che per questa sola cagione chiamò il Piloto Inglese, che già molti anni quiui dimora; e gli domandò che cosa dinotassero questi prodigij, Rispose colui la maggior parte esser segni di guerra: ma che ella sarebbe in Europa. Hebbe l'Heretico buonissima occasione per intimargli che erano segni minacciosi del Cielo gastigo a lui preparato da Dio per essere egli della fede di Cristo persecutore; ma egli non ne face altro, per essere inimico capitale Cattolici.

Affermano per cosa certa che si sono veduti in Macao trè Soli in vno stesso giorno. Quello che hò veduto io stesso, sono le stelle a mezzo di, lucendo il Sole chiarissimo.

Tutto il detto è copia della lettera del Capitan Lodouico soprannominato. Nel Meaco ancora sono state vedute cose simili a queste; & in particolare si scriue, che nel Palazzo del Dairi legitimo padrone del Giappone, (perche i Signori della Tenza altro veramente non sono che Capitani generali di esso.) Ma già sono molti anni, che è seguita questa mutatione; restando a questo Dairi solamente il carico di compartire le dignità, ancora a gli stessi Rè del Giappone.

XX.

E. H. BLAIR AND J. A. ROBERTSON, THE PHILIPPINE ISLANDS. 1493-1898. CLEVELANDS. VOLUME XVIII.

RELATION OF THE EVENTS IN THE PHILIPPINAS ISLANDS AND IN NEIGHBORING PROVINCES AND REALMS, FROM JULY, 1618, TO THE PRESENT DATE IN 1919.

Pp. 216, 224-227.

OF JAPON

[Extract]

Finally, when the emperor was about to go to Meaco, a comet like a handled catana [*i.e.*, sword], with a very beautiful cross in

its head, appeared above his fortress of Yendo. This caused him so much fear and consternation that he gave up his journey entirely.

* * * * *
* * * * *

OF THE PHILIPPINAS ISLANDS

[Extract]

On the eleventh of November, 1618, at three o'clock in the morning, a comet was seen from this city of Manila. It had a tail, was silver-colored, with a slightly ashen tinge, and had an extraordinary form. At first it was like a trumpet, and then like a catan (which is a weapon peculiar to Japon, resembling the cutlass), with the edge toward the southwest; and at the end it appeared palm-shaped. The declination of the southwestern end was twenty degrees south. At first its length was equal to the whole of the sign of Libra, with which it rose. Eight days afterward, the declination of the southwestern end was twenty-four degrees and thirty minutes south. At this time the head was thirty-one degrees south, and the lower point, or end of the tail, eight degrees from the star called Spica Virginis. No star exhalation (1) was seen, although some say that they saw a very small one. On the twenty-fourth of November another tailed comet appeared, even more beautiful and resplendent than the first. At its head [*al pie*] was a burning star. It appeared in the east. It had a declination of eight degrees, and it pointed southwestward to the sign of the Scorpion, which is the sign of Manila. These two comets lasted some three months. They write from Japon, Maluco, and India that they were seen in those places. * * * * *

* * * * *

(1) Referring to the ancient astronomical notion that a comet was an exhalation.—Harry T. Benedict (professor of astronomy, University of Texas.)

XIX.

LETTERE ANNVE DEL GIAPONE, CHINA, GOA, ET ETHIOPIA
DEGLI ANNI 1615, 1616, 1617, 1618, 1619. In Milano,
1621. Pp. 332-339.

RELATIONE D'ALCVNE ALTRE COSE NOTABILI
OCCORSE NEL GIAPONE.

[Extract]

Relatione d'alcune cose, che sono accadute questo anno 1618.
nel Giappone raccolte da varie lettere inutate da quelle
parei alla Città di Maniglia.

Questo anno pare, che si siano congiurati il Cielo, la Terra, e tutti gli Elementi, mostrando in queste parti più Orientali horrendi prodigij, e segni, quali già molti secoli non si sono veduti. Onde con molta ragione si può temere, che siano presagij di grādissime riuolutioni, si come è stato da molti anni a dietro pronosticato douere accadere l'anno del 1620. E per dir qualche cosa delle due comere Orientali, che per tutto Nouembre l'vna dopo l'altra sono apparite nello stesso mese, come cose le più nuoue, e graui, che in questi tempi si siano vedute, per poter poi passare a quello, che più fa a nostro proposito. Si deue sapere, che à gli 11. di Nouembre dell'anno 1618. sù le 10. hore fu veduta in questà Città di Maniglia vna Cometa verso Oriente *codata di colore argentino pēdente nel cenerognolo di straordinaria figura; perche al principio sembraua vn cornetto; poco dopo vna scimitarra, o nanghinata Giaponese, che volgeua il filo à mezzo giorno, e la punta à Tramontana. Alcune volte figuraua vna palma, la cui lunghezza correua venti gradi dalla linea meridionale. La larghezza al principio copriua il segno della Libra, con cui formaua vna Croce. In termine di otto di, li 9. del mese scorreua in lungo verso mezzo giorno gradi 24. e 30. minuti, e s'allontanaua dalla stella, che stà nella spiga della Vergine in punta di sopra gradi 31. in quella di sotto 18. A 26. del mese si trouò larga la parte soprana gradi 46. e la sottana 29. Ilche habbiamo voluto dire, acciò si ritragga il moto regolato di detta Cometa. Non si è veduta stella ò esalatione, d'onde ella fusse originata; benche diceuano alcuni di vedere vna stella piccoletta.

Maniglia è a Tramontana in 14. gradi, e 40. minuti. Dalle Fortunate, onde cominciò Tolomeo si di lunga 19. gradi. Dalla Città del Mexico 103. E tanto basti per vna digrossatura di cognitione; la qual si douerà hauere altroue più esatta, e piena. Sabato a 24. dello stesso mese comparue vn'altra Cometa codata più bella, e risplendente, che la prima con la pendice d'vna stella fiammeggiante; Fù veduta, che da Oriente strisciaua verso mezzo di in 8. gradi. Durorno queste due Comete circa trè mesi e si sono vedute ancor nel Giappone con l'istesse figure, si come n'hanno scritto i nostri Padri, che iui stanno. Alcuni affermano essere stata veduta la prima li 8. di Nouembre; il che ci viene scritto ancora dalle Moluche.

* * * * *

Da Nangasachi scriuono molti Portughesi questà stessa state, & in porticolare il Capitano Lodouico Martinez di Figuerendo persona di tanta credenza, che già dieci anni scriue dal Giappone fedelissimamente a questi Governatori dell'Isole importantissimi auuisi intorno a gl'Olandesi, ne mai si troua esser fallito in cosa che egli habbia riferito. Trà l'altre scriue intorno alle Comete vedute così.

Il di 28. della Luna ella apparue la mattina maggiore di quello che era dieci giorni prima apparita molto chiara, e bella con quattro stelle risplendenti, e colorite intorno, in forma di Croce. Quattro, o cinque giorni dopo sopra la montagna Mongu vna lega distante da Nangasachi, fù veduto vn glolbo di fuoco, che salendo in altezza, come parue, di sei picche s'apri, e si diuise in varie parti, e mandando fuori gran fiamme si consumò.

A 15. di Febraio, nel qual giorno cascò la notte dell'anno nuouo de Giaponesi; molti Portughesi, e tutti noi altri in Nangasachi vedemmo vn gran fuoco nel Cielo verso l'Oriente in tanta immensità che pareua si fusse attaccato fuoco a gli stessi Monti, come suole accadere. E dopo vn'hora e mezza, che durò mancando restò vna certa luce della pallidezza dell'alba, da cui vsciua vna molto bella colonna. La medesima notte dalla parte stessa comparuero vndeci fuochi, de quali altri ascendeuano, & altri scendeuano, Altri trè sene viddero verso Tramontana.

questo anno nominatamente negoziato per essi la limosina di cui si sostentano; onde facendo tanto i Padri per lui; ben pareua douere ch'egli per se stesso operasse qualche cosa. Vdito ciò l'infermo, e punto intimamente, proroppe in vn pianto larghissimo, e singhiozzi; e sbrigandosi tosto dall'occasione prossima, s'apparechiò a consessarsi, & à morire cristianamente, come fece, con tal conuersione, che gli vennero a nausea tutte le altre cose, e solo gustò dell'eterne. E stando egli all'ultimo punto fu dimandato, se sentiuua cosa, che lo molestasse: rispose che nò; soggiungendo, che hora mai era tempo, e con nomi serenissimi di Giesù e Maria in bocca spirò.

Vn'altro seruitore del Rè teneua due mogli, secondo si costuma nella terra; La principale per le izze donnesche hauute con l'altra se ne fuggi; egli se ne restaua con la seconda, poco curando i saluteuoli auuisi, che di ciò gli eran dati. Al fine cominciò ad ammettere gli auuertimenti, e volendo metter le cose di sua coscienza in sicuro, chiamò la donna, e le disse che gli doleua del passato; se ella si volesse far Cristiana, la sposarebbe, negando la mala femina, la cacciò di casa dandole della robba quanto parue conuenirsi, il resto tutto ripattì ne pueri. Ilche vedendo la famiglia de seruitori, e serue tutti diloggiorno, lasciando lo solo, e senza chi gli apparecchiasse non che altro la tauola. E gli consolandosi con la solitudine si cominciò à dare all'oratione, lettione di libri spirituali, digiuni, e discipline, ne quali exercitij face tanto profitto, che gli occorse più volte stare vna, e due hore stemperando si in lagrime, considerando la dolcezza della misericordia di Dio seco vsata.

A questo passo proportionatamente caminauane gli altri Giaponesi, in modo che con gran marauiglia diceuano, che quella terra, che prima fu selua inculta, e tana di horribili fiere, era mutata in vn colto giardino, & in vn ritratto della stanza de beati; e nò potè nò arriuare l'odore al medesimo Rè, Principe, e Gouernatore con lor grande stupore; ondè hebbero per bene, che i Padri fussero, ancorche contro l'ordine loro, restati iui nascosti con si bel frutto colto da quei Giaponesi. E perciò cominciorno i Padri a palesarsi, far Chiese, e casa, e fu sì grande il feruore de Giaponesi nell'edifitio della

Chiesa, che tralasciando le sue case, cui stauano attualmente rifacendo, o edificandole nuoue, veniuan tutti a gara d'ogni conditione à tra-uagliarui con le proprie mani.

XVIII.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 93-105.

November 7. [1618]—I forgot to note downe that there was a comett (or blasing star) which hath appeard this 5 or 6 daies som hower before day, easterly, a littell to the southwards; but it is so neare the sunne that we could see nothing but the teale, yt being of a hudg leangth, and doth, by littell and littell, draw to the westward, sotherly. * * * * *

* * * * *
November 8.— * * * * *

The people in this place did talke much about this comett seene, that it did prognosticate som greate matter of warr, and many did ask me whether such matters did happen in our cuntrey, and whether I knew what it did meane or would ensue thereof; unto which I answerd that such many tymes have byn seene in our partes of the world, but the meanyng thereof God did know and not I.

November 9.— * * * * *

The comet apered this mornynge greater then any tyme before.

November 13.—The comet doth contynew still till this day, drawing towards W. southerly. * * * * *

November 19.—An hower before day we saw an other comet (or blasing starr) rising just east, in the constellation of Scorpio. It is a mighty comet, and, in my opinion, bigger then that which was seene when Sebastian, King of Portingall, was slayne in Barberry.

November 21.— * * * * *

The first comet was not seene after this night.

December 23.— * * * * *

After this night, the comett, or blasing starr, was seene noe more, and ended under the 3d starr in Chorls wayne or Ursa maior.

instando gagliardamente il Governatore di Pulocambi, non si potè far di meno, che di consenso delle parti non vi si trasferisse vn Padre con vn Fratello; si che in Faifò restasse n'altro Padre con vn'altro Fratello, affinche se piouesse bene, e succedesse buon raccolto di risi (come in fatti segui quell'anno) non potessero quei di Coccincina attribuirlo alla partita de Padri de quali, come è detto, essendone restati due furon da Giaponesi proueduti, e di casa, e d'alimenti sino à tanto che Dio N.S. rimediò alle cose.

Questi due nostri dopo la partita del Superiore per Pulocambi si mossero attorno di aiutare i Giaponesi loro hospiti, ch n'haueuano non poco bisogno; perche i più di loro da molti anni non si confessauano, ne conuersauano con Padri. Il rimedio applicato loro fu, ch'essi vdissero il Catechismo, che si esercitaua con concorfo de Cristiani, e Gentili, che proponeuano i suoi dubij, e riceueuano le risposte con suo tanto gusto, che non veniua loro a noia, ben che scorressero tal'hora due o tre hore.

Dettero caldo a questo catechismo vn Giaponese nostro fratello esimio predicatore in suo Idioma, e poscia il Padre Pietro Marches perito nella lingua Giaponese per esserui stato; e però confessaua, e trattaua con essi, come de loro. Si battezzorno otto gentili, oltre a i fanciulli, vno de quali fra non molti giorni passò a vita migliore, & i Cristiani si sentirno di questo esertitio tanto aiutati, che diceuano di parergli all'hora cominciare ad esser veramente Cristiani. Accrebbe in essi il santo timore di Dio la morte del lor capitano detto Mangossa huomo coperto d'ogni iniquità. Questi trouandosi in vn grande infortunio di mare votò di mutar vita, e di sposare vna femina, con cui staua impaniato per molti anni, se però ella si faceua Cristiana. Vscito dal pericolo tornò à Coccincina in vn nauigatio Cinese. Risaputolo il Rè, e credendo, che ritornasse da ladronar la costa della Cina (cosa falsa; però che essendo egli approdato in quella spiaggia fu sopraggiunto da Cinesi, che abbruciatogli il legno, lo messero in necessità di valersi del loro) determinò di pigliarlo, e farne giustitia; il qual'animo alcuni di tenne celato. Tra tanto Iddia benedetto; lo sforzaua con le inspirationi incessante-

mente a sodisfare al voto con la confessione; sicche come violentato si condusse quasi sino alla Porta della Chiesa, d'onde però con pochissimo attacco si stornò. Non passorno molte giornate che egli fu raccolto, & inceppato. Ilche saputosi dal nostro Padre, e come egli haueua hauuto sentenza di morte, lo mandò à visitare, e confortare, che pensasse à se stasso, & ad hauer compassione dell'anima sua. E con tutto ciò egli la menaua in lungo, onde permesse Dio, che quantunque egli già auuisato di douer morire, procurasse licenza di potersi col Padre abboccare, gli fusse da quei giustitieri negata; ma solamente gli permisero vno scampoletto di tempo per raccomandarsi a Dio quando stauano già per giustitiarlo; ilche però fu sì breue, che benche il Padre v'andasse ansando, non però giunse à tempo. Mostrò morendo qualche segno di contritione, e di morire come Cristiano; che pero il Padre gli diè sepoltura, e predicò de gli occulti giuditij di Dio, e dello star in ordine per riceuer la morte quando viene; obedendo alle inspirationi diuine per non lasciare altrui in dubbio della sua salute, si come era auuenuto à quel defoto. Ilche fu vn tal pūgolo à quei Giaponesi per srequentare i Sacramenti, e la messa, che come alcuno di lore vi mancaua, lo chiamauano tutti, il non vā à messa, o quell'altro, il non si confessa; i quali nomi per non adossarsegli erano tutti sollecciti à venire alla messa, & alla confessione.

A persuasione del Padre sei di quegli huomini si cauorno di casa le male compagnie; & il Capitano si legò in matrimonio con la sua, che fù di molta edificatione à gli altri.

Vn gentll'huomo già molti anni staua in pessimo stato dell'anima sua, essendosi leuato dinanzi sei mogli successiuamente, secondo gli veniuano à fastidio. Lo confisse Dio benedetto in letto con vna gran malattia. Gli amici l'auuisorno, che si confessasse, egli nol voleua sentire. Riseppe il Padre nostro, che fu dato da medici per disperato; gli fece suggerire dall'assistente del suo male le molte orationi, messe, digiuni, e discipline, che in casa nostra si faceuano per la salute dell'anima sua, & il tutto come douutogli per molto, ch'egli sempre trauagliò in aiuto de Padri nelle loro occorrenze, hauendo

order from their superior, did not leave until they had almost completely Christianized a Japanese settlement which is there; and they so subdued these Japanese that, although formerly they had been very rebellious and had given much trouble to the king, they now became peaceable. The King was so pleased with this that he recalled the fathers with the same benevolence that he had formerly shown, and he gave them license to erect a church and residence at his court. Heaven assisted at the same time in behalf of the mission by sending abundant rain, thus leaving the superstition of the heathens confounded and mendacious, and the king despicable for this persecution. Two fathers of the mission and a lay brother went to a port of the same kingdom, Cochinchina, called Pullocambi, about fifty leagues from the court, at the request of the heathen governor there.

XVI.

LETTER FROM J. P. COEN TO THE DIRECTORS OF THE UNITED EAST INDIA COMPANY.

Bantam. December 18, 1617.

[*Extract*]

Quinam is een plaetse in Cochin China, welck een seer bequame baye off reede heeft; de Chinesen handelen daer jaerlicx met de Japponders seer steroq. Over twee jaren was de zyde aldaer goet-coop, dan alsoo dit jonckste jaer een groote partije op Manilha gescheept is geweest ende derwarts temin ginck, is de zyde daerover seer diere geweest, synde de Jappanders met 5 joncken ende meer dan 200000 tajlen silver aldaer geweest; den Connick van Cochin China heeft tot twee verschejde reysen na Ligor ende ook Patana aen d'onsen geschreven, seer instantelyck versoeckende, dat aldaer souden comen handelen, aenbieden de goede verseeckening ende vryheden te geven. Na ick versta enz.

(*'s Rijiks Archief, 's Gravenhage.*)

XVII.

LETTERE ANNVE DEL GIAPONE, CHINA, GOA, ET ETHIOPIA DEGLI ANNI 1615, 1616, 1617, 1618, 1619.

In Milano, 1621. Pp. 358-362.

Letter from Father Francesco Eugenio to Mutio Vitelleschi,
the Father General of the Company of Jesus.

Macao. January 21, 1619.

[*Extract*]

Missione di Coccincina.

Riseggono sei della Compagnia in Coccincina quattro Padri, e due fratelli. Questi scrissero al Padre visitatore, che stauano per trasferirsi a Pulocambi sulle promesse del Governatore di quell' Isola di lasciargli liberamente predicare, battezzare, e far Chiese nelle sue terre, e d'aiutargli in tutto cio, e quāto fusse lor necessario. La onde parue al Padre Visitatore d'inuiar là nuouo soccorso di operarij per essere paese largo, & in particolare per sostituire al Padre Francesco Buzomo Superiore ammalato di molto tempo chi lo solleuasse col fargli mutare aria. Perciò vi destinò due Padri, l'vno per superiore, e l' altro per operario. Non consentirno i Giaponesi habitanti in Coccincina, che i padri partissero per Pulocambi, e però presero sopra di se il trattenergli. Si come fece il capitano de Cinesi habitanti, pur iui, promettendo d' informare il Rè, & il Governatore del luogo, che huomini fussero i Padri che erano di lunga mano da lor conosciuti in Maniglia, & altroue; e disgannargli dell'errore, in cui stauano, perche per ciò non piouesse nel paese, perche vi erano i Padri; essendo ciò cosa dipendente da gli influssi del Cielo, e non dal fermarsi iui i Padri; come il volgo diceua, che per ciò col suo pazzo impeto sforzò il Rè à licentiargli da quel Regno. Questo motiuo, che fu fatto da Giaponesi fu senza dubbio prouidenza diuina; però che risaputosi vniuersalmente l'imbarco instante de Padri per Pulocambi, sino al Governatore della Città s interpose, cosi nel dar sodisfattione à Giaponesi, come nell'operare col figliuolo del Governatore di Pulocambi, che gli doueua tragettare, che non gli pighasse. Ma

XIII.

LETTER FROM THE GOV.-GENERAL OF THE DUTCH
EAST INDIES TO THE DIRECTORS OF
THE UNITED EAST INDIA
COMPANY.

Japara. January 14, 1619.

[Extract]

Alsnu heeft d'Oude Sonne een rÿck retour van Japan gebracht, beloopende *f* 571227:2: daeronder in Jappans Silver ende realen 85 duijsent realen, de rest bestaet in zÿde, zÿde waren, eenige cleden, met een Schoone pertÿe campher. In Jappan staen de saecken Godt loff noch wel, dan vermits het nemen van de Chinese joncken veel ongunst veroorsaect en de selfs in eenige jaren geen goederen in Jappan gebracht hebben, wort er seer gevreesst voor d'ongunste van den Keÿser, want alle des Compagnies vijanden, Engelseen, Portugesen, Spangjaerden, Chinesen ende hare adherenten, gewellich doende zÿn om ons bÿ den Keÿser hatich te maecken. De voorneemste materie, die daertoe gebruycken, is dat wÿ geen rechte cooplieden, maer een deel rovers zÿn, goeds vriendt ende alle mans vÿandt, die alnemen wat becomen connen, Engelsen, Francen, Chinesen, Portugesen, Spanjaerden, Indianen ende wie hetoock is. Hierover versoect den coopman Specx seer instantelÿck, dat doch met eerste gelegentheÿt een goet cargasoen van alle coopmanschappen naer Jappan senden souden, eer by den Ceÿser in ongenade geraken. Dit jaerenz.

('s Rijks Archief, 's Gravenhage.)

XIV.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.
TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. Pp. 94, 102.

November 9. [1618]—Capt. Adams was sent for to Cort about our *goshon* of last yeare, to know what junk it went in to Cochinchina,

and, as it is thought, Andrea Dittis, the China Capt., hath deceived me, and delivered my *goshon* to Seme Dono at Firando and served his turne in his junk, which now is com out. These matters are com to light per meanes of seeking out the truth of sturrs which happened in Cochinchina with Japons against Chinas, whereof the King of Cochinchina advized themperour of their unrulynesse; soe that it is thought noe *goshons* will be geven out for that place this yeare.

* * * * *
* * * * *
* * * * *

December 11.—Capt. Adams arived at Osakay, but brought not the *goshon* with hym, but left his man to bring it after, non yet being geven out per meanes of the brute betwixt the Japons and Chinas at Cochinchina.

XV.

E. H. BLAIR AND J. A. ROBERTSON, THE PHILIPPINE
ISLANDS. 1493-1898. CLEVELANDS. VOLUME XVIII.RELATION OF THE EVENTS IN THE PHILIPPINAS
ISLANDS AND IN NEIGHBORING PROVINCES
AND REALMS, FROM JULY, 1618, TO THE
PRESENT DATE IN 1619.

Pp. 213-214.

OF COCHINCHINA

[Extract]

The new mission of Cochinchina, near China, where they formerly endured great hardships, is now prosperous, and there are good prospects that a splendid Christian community will grow up in that realm. The people there, induced by their false priests, had rebelled against our fathers saying superstitiously that it had failed to rain because of the presence of preachers of the holy gospel. In this way they forced the King, against his will, to order the fathers out of the country for a time. But the fathers, in obedience to an

To Jno. Osterwick the lyke.

To Mr. Wickhams woman a silke gerdell, a perfumed fan, a pere *morofak tabis* and stringes; with the lyke to Mr. Eatons and Mr. Sayers women; and allso to Mr. Nealsons and Mr. Osterwicks women.

And to Jno. Portus, Robert Hawley, and Jno. Cooke, eache of them a peare of lether buskins; and to each of their women a peare *tabis* and stringes, with a silverd fanne.

And to Matinga 2 ruch *kerremons*, with 2 gerdelles to them, a womans box, a box to put gerdelles in, a peare *tabis morofak* with 2 peare stringes, and 2 peare small *beaubes*.

And to Susanna a box with a gerdell, a peare of *tabis* and stringes.

And to Otto, Matingas mad, a gerdell, *tabis* and stringes.

And to Gynne, littell Otto, and Besse, each one a pere *tabis* and stringes.

And to littell Wm. Eaton a gerdell, *tabis*, stringes, and silverd fan.

And to my boy Larrance, to geve his mother, a gerdell.

Also Yoskes father sent me a pigg for a present.

XI.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 43.

June 20. [1618]— * * * * *
* * * * *

The China Capt. had letters this day per way of Xaxma out of a junk arived theare (which should have com for Langasaque, and forced per them of Xaxma to stay theare), that the letters I sent are receved by the noble men in China in good parte, and a mandarin, or *loytea*, apointed to com for Japon, to speake with the Chinas and me about the matter, and withall to goe to themperour of Japon about the receving the Hollanders into his domynions which robb the Chinas. Yt is above 4 months past that he was apointed, and now howrly expected.

June 21.— * * * * *
* * * * *

I am enformed that Chinas and Japons have byn at Miaco before Ingo Dono, Lord Cheefe Justice of Japon, to complaine of the theevery of the Hollanders; and he asked them whether the English did not the lyke, which they said no. "Well," said he, "the Emperour will take order for these matters shortly."

XII.

E. H. BLAIR AND J. A. ROBERTSON, THE PHILIPPINE ISLANDS. 1493-1898. CLEVELANDS. VOLUME XVIII.

RELATION OF THE EVENTS IN THE PHILIPPINAS ISLANDS AND IN NEIGHBORING PROVINCES AND REALMS, FROM JULY, 1618, TO THE PRESENT DATE IN 1619.

PP. 220.

OF JAPON

[Extract]

This year there went to Japon a patache which the Hollanders had captured in Maluco from the English, and on which there remained some English, badly wounded. They reported that the Hollanders had taken two ships from the English, and had cut off the noses and ears of all whom they had found alive. Upon hearing this, the English who were in Japon were exceedingly angry; and, as they were in good standing at the court, they went to complain to the emperor. The Japanese merchants also complained that because of the robberies which the Hollanders had committed during the last two years on the coast of Manila, they had lost the profit which they had usually drawn from the trade with Philipinas. They said that not only were the Hollanders of no advantage to Japon, but that rather they were very injurious, since they took from the kingdom large quantities of munitions and provisions for their fleets, and thus made everything dearer. It may be hoped that from these complaints will result the expulsion of the Hollanders from Japon, which will be very injurious to them, but very good for us.

pulled downe 4 yeares past, when all (or the most parte of) the fortresses in Japon were dismantled and utterly ruinated. The ruens of this are to be seene very large at my being heare.

We departed from Shemuttes, and arived at Bingana Tomo within night, having made 10 leagues.

Sent a bark to Miwarry to buy 30 *barsos morofack* to carry to Firando.

December 30.—I bought and paid for 6 peare *sheddas*, or womans shews, 2 *mas*.

December 31.—The wind being contrary, we could not departe; but received 14 barilles *morofack* from Miwarra, cost 16:5:2.

January 1, 1618^g.—We departed from Bingana Tomo, although the wind were contrary, and paid out for diet 5:4:0, for barkhier and a man to fetch wine from Miwarra 1:4:0, to servantes 1:0:0.

And we gave to our hostis of Bingana Tomo for a present one salmon and 2 codd fysh, and to her doughter a piktur of Christ and two musk codd.

Soe we made this day and night following 20 leagues.

January 2.—Raine and heale per night, a very storme or tuffon. So we went but 3 leagues this day, and anchored under an iland or rock.

January 3.—We wayed ancor, and with much adoe gott to an other iland to a roade, the village called Sua, having made this day 5 leagues, but, wind serving after, we gott to Camyna Seak by break of day, having made per night 12 leagues.

January 4.—We gott this day and night following from Camina Seake to Chimina Seake by break of day, having mad 37 leagues. But som 8 or 10 leagues short of Shimina Seak our boate ran against a rock in the water, that it was a woonder she was not split in peeces, but being a strong new boate shee had noe hurt. God be praised for it.

January 5.—Our host at Chimina Seak came aboard of us, and brought me a *barsoe* of wine and a bundell of drid cuttell fish for a present, but, the wind being good, we did not stay, but put to sea.

The wind being contrary, we were forced to put back 3 leagues which we had gotten, and to enter into a port in Faccata called Ashia (or Asha), where we staid all night, and went ashore; and paid to howse 1:2:2, and to servantes 0:2:2, and for fresh fish bought to carry aboard. And so we made this day 10 leagues.

January 6.—We departed this mornyng at sunne rising from Ayshia, and the morow morning, at lyke hower, arived at Langway in Crates, having made per day and night 33 leagues.* * *

* * * * *

January 7.—We departed from Languay at sunne rising, and about 1 a clock were forced by a tempest (or tuffon) of wynd and rayne to put into a harbor of Firando, called Awoe, 7 leagues short of Firando, the sea being so overgrowne that we could not keepe it out to gett to Firando. Soe we made 6 leagues this day.

January 8.—We arived at Firando this day about nowne, having made 7 leagues this day.

The *tono* and all the caveleros sent messengers to bid me wellcom home, and all the neighbours and other frendes came in person to doe the lyke. And at our passing by the English shipp which the Hollanders had taken, they shott affe 3 peeces of ordinance to wellcom me, which I tooke rather in scorne then otherwaies.

January 9.—I sent presentes as followeth, viz. :—

To Tonomon Samma 2 *barsos morofack* and 2 salmons.

To Bongo Sama 1 *barso morofack* and 1 salmon.

To Taccamon Dono the lyke.

To Oyen Dono the lyke.

To Andrea Dittis, China Capt., 2 *barsos morofack*, and 2 salmons, with one silk *kerremon* geven me per Emperour; and an other silk *keremon* same to his sonne Augustine; and a silke gerdell, a pere *morofak tabis* and string, with a perfumed fan to Capt. Chinas wife; and a box or littell trunk *maky* ware, and a silverd fanne to his eldest doughter, with a pere *tabis* and stringes; with an other silverd fan to his yongest doughter.

To Ed. Sayer a silk *kerremon* geven me per Emperour.

* * * * *
* * * * *

December 19.—I rec. a *cubo* (or womans box) from Maky Dono, cost 15 *mas*, which I sent hym by his man; and wrott hym a letter to make me 10 chirurgions boxes and 10 salvatoris to them, *maky* ware.

December 20.—Yecheere Dono, *alius* Cynemon Dono, brought me a present of 2 barrilles of wyne. And I bought for Woman Dono:—

1 <i>kerremon</i> , cost...	5	0	0
More, for silk watto to put into it	0	8	0
More, 1 <i>gerdell</i> , cost...	0	7	0
More, 2 peare <i>tabis</i> , cost...	0	3	7
More, 2 peare stringes for them, cost ..	0	1	3
And geven her in money to buy oyle 1 bar plate	2	5	0
	9	5	0

Susannas uncle sent me a letter from Sakay with 2 pewter bottelles for a present.

December 21.—This day at nowne we sett forwardes towardes Firando, and gave out presentes to Cuemon Dono, host at Osakay, to his wife, Luisa Dono, and to their sonne. And for our diet in plate bars 65:0:0. And 1 bar plate to Gifio Dono of Sakay for riding up and downe about busynes.

And there was 2 *ta.* 4 *ma.* paid per Mr. Nealson for a barke to carry us aboard.

And our hostes sonne and other frendes, with Capt. Adams, accompanid us to Dembo, 2 leagues from Osakay, where we road at an ancor all night, the wind being contrary.

December 22.—Cuemon Dono, *alius* Grubstreet, our host, came aboard our bark within night with a banket. And I wrot a letter to Capt. Adams of our stay this day per meanes of contrary wynd and tide. Unto which he returned answer, and sent me 50 *muchos* (or loves of bread).

December 23.—We set forward from Dembo, or rather Incobe, at Osakay this mornyng, passing the bar of Osakay, and arived at

Fiungo at nowne. The wind being contrary, we staid at an ancor all night, having mad 10 leagues this day. * * * * *

* * * * *
* * * * *

December 24.—We tarryed all day and night at Fiungo.

December 25.—We gave rice and fish to all our barkmen to dyner this day, with a *barso* of wine, in respect of Christmas Day.

And meeting with a man of Yecheero Donos, I wrot a letter to Capt. Adames of our puting into this place per meanes of contrary wind, and that yf he understood Tozsayemon Dono were arived at Sackay, to send me a letter expres per a *tento*, to thend that yf the wind remeaned contrary, I might put back to Sackay, or else send Mr. Nealson, to look out for the 1000 *taies*.

December 27.—We departed from Fiungo, and paid to the host 4:0:0, and to his littell sonne 0:3:1, and to servantes 7:1:0.

Soe we made 40 leagues this day and night, and came to an ancor at Shemuts, 10 leages short of Bingana Tomo.

December 28.—The wind being contrary, we staid here all day and night following; and, the wether being cold, we had a fyre made with a few charcoll in my chamber, in a place of purpose for such occation, dawbed about with clea. But it seemeth it was decayed, for, after I was in bedd, it took fyre beloe (not being seene before). And had not som of our servantes byn up late, I had byn burned in my chamber, in such a place that I could not have gotten out. For the fyre began within 2 foote of the place I did lie in upon the mattes; and, when they came in and fownd it, yt flamed up brest hie, but, God be thanked, was sowne quenched without hurt.

December 29.—The *tono* or king of this place is a yong man called Mats Dayre Cunay Dono, of som 24 years ould; the cuntrey called Bigen Sshmutsa, his revenews esteemed at (as our host his vassall tould me), [] *mangocos* per anno. He is now at Edo per themperours comandment; and som 20 yeares past his father builded a greate castell or fortresse in this place, which was

And we bought 10 bundelles writing paper, cost 8 *tais*.

December 5.—We were envited to dyner to Mackey Dono and had kynd entertaynment. And he gave me a pike for a present.

And there were presentes geven to Shebe Dono, Grubstreetes sonne; and to Magamon Donos kinsman at Otes.

And I paid our hostis for embradoring and making Matingas *keremon* a bar Coban, 6:4:2.

December 6.—Our host of Miacos brother in law envited us to dyner to a place of pleasure without the cittie, where the dansing beares were, with a greate feste. And there came an antick dance of saters or wild men of other Japons, unto whome I gave 1000 *gins*, and a bar of plate to goodman of howse, containing 4:3:0. Soe the dansing beares were sent home after us.

December 7.— * * * * *

Our hostis sent me a present, viz. 1 *keremon* for a woman, 2 peare *segdas* or womans shews, 7 codd fish called in Japon *tarra*. And she sent Mr. Nealson the lyke, with 5 codd fish.

And the host of the howse where we hadd the banket brought me a present of eating stuff in 3 boxes. And Cude Dono of Firando brought me a *barso* of wine and a banket, *nifon catange*.

I sould Skengero Dono rest of my corall, containing 5 *ta*. 4 *mas*, for 20 *taies*.

December 8.—We went this night to supper to Fushamy, and gave presentes to Magamon Dono, our host of Miaco; to Skengero Dono, his son; and to our hostis. And I gave her littell doughter an *ichebo* of gold.

And there was paid out for diett 40 *tais*, and to the servantes in howse 3000 *gins*.

December 9.—We went from Fushamy to Osakay this morning, and gave presentes: to our host 2 *tatta* black bayes; and to his wife one peece ordenary taffety; to his doughter a gerdell, cost 7 *mas*; to Ric. Cocks, his sonne, a coate, a gerdell, and shews, cost 2:3:0; to Wickham, his sonne, a gerdell and shews, cost 0:5:0.

And to servantes in howse 1000 *gins*, and for dyett 10 *tais*.

And I gave a bar plate to Maky Donos sonne, containing 4 *tais*, he bringing hym to me to geve hym the name of Richard Cocks.

I gave also 1 *tay* to Mr. Nealsons boyes syster; and 2 *ichebos* to 2 dansing beares which followd us to Fraccata.

December 14.—Tome Dono the *jurebasso* returnd to Miaco with his kinsman, and had geven them for horshier 4 *tais* plate bars.

December 15.— * * * * *

Mr. Eatons littell doughter Helena came from Sackay to vizet me, and brought me a banket for a present, Japon fation, brought per her nurce, the mother being sick. And I sent her mother, by her, a bar plate, and gave the nurce 4 *mas* small plate.

And Cuemon Dono, Grubstreet, our host, gave me a present: 1 sleeping silk *kerremon*, 5 codfishes, 5 bundells sea weed drid, 2 *barsos* of wyne, 1 *barso* of vinegar; and to Mr. Nealson 1 silk *catabra*.

December 16.—This day we went to Sakay to dyner, to meet Tozayemon Dono, our host, whoe I am enformed is newly arived from Firando, and I would cleare acco. with hym.

And being at Sackay, I bought for Helena, Mr. Eatons child, these thinges following, viz. :—

2 silk <i>kerremons</i> , at 2 <i>tais</i> peece is	4	0	0
2 peare <i>tabis</i> , at 9 <i>condrins</i> peece... ..	0	1	8
2 gerdelles in 1 peece, cost... ..	0	3	5
2 pere shew stringes, cost	0	1	0
	4	6	3

December 17.—I bought this day

2 <i>keremons</i> , outside silk and inside lynen, cost	2	5	0
1 <i>kerymon</i> , all silk, cost... ..	2	0	0

for my boy Larrance.

2 black <i>kerremons</i> for women, of silk	5	2	0
--	---	---	---

Also I paid for a scritorio with brass garneture 1:4:0.

December 18.—We returned to Osakay; and paid for our diet and other bankettes 15:0:0, and to servantes 2:1:0.

And went to supper to Meetsque, and paid for night and mornyng diet 2 *ichebos* and 500 *gins*, and to servantes 300 *gins*.

November 24.—We went to dyner this day Famma Mattes, where, Mr. Nealson being sick, we staid the rest of the day, and paid for dyner, breckfast, and supper 4 *ichebos* 200 *gins*; and for passage at a river 600 *gins*; and to *rockshakes* to cary Mr. Nealson 300 *gins*.

November 25.—We dyned at Arra, and paid 1 *ichebo* and 1 [hundred?] *gins*; and for passage at a river 500 *gins*; and to *rockshakes* to cary Mr. Nealson 1000 *gins* or *ichebo*.

And so we went to supper to Ushinda, and paid evenyng and mornyng 2 *ichebos*; and to servantes 300 *cash* or *gins*; and 1 *ichebo* for 5 cutt *tattams* spoiled per our people.

The 5 *tattams* afforsaid were cut by Co John and 2 other knaves, as we went up, unknowne to me till Capt. Adames had received a letter therof.

November 26.—We dyned this day at Acca Sackey; and paid 1 *ichebo*, with 100 *gins* to the servantes.

And went to supper to Occa Sackey; and paid 2 *ichebos* and 500 *gins*, and to servantes 300 *gins*. * * * * *

November 27.—We went to dyner to Mia, and paid 1 *ichebo* and 400 *gins* to howse and servantes; and passed from Mia to Quano per water; paid barkhier 1 *ichebo* 920 *gins*.

And paid for diet at Quano, night and morning, 2 *ichebos* 400 *gins* to howse and servants.

And to our ould host for his pains 1 *ichebo*, and to an other man which brought a present 6 *mas* 8 *condrin*; they taking paynes to goe to the King of Quanno, to whome I ment to have given a present for his kyndnes as we passed towardes Edo, but he was not within; so his secretary exskewed the receving thereof, with many kynd wordes that he would mak it known to his master. But there was 5 musk cods given the Admerall, borrowed of Richard King.

And in the mornyng, as we were going out of the towne, the street being full of hackneymen and horses, they would not make me way to passe, but fell a quareling with my *neremoners*, and offred

me greate abuse, som of the townsmen taking their partes. But, when they saw me about to goe to the *tono* to complaine, they made frendes to speak unto me, and asked me forgivnes on their knees: they being in danger of lyfe, yf I complained.

November 28.—We dyned at Ishaquese, and paid 1 *ichebo* 200 *gins*; and went to supper to Sheque, and spent night and morning diet 2 *ichebos* and 500 *gins*, and to servantes 300 *gins*.

November 29.—We went to dyner to Chuchamy, and paid 1 *ichebo* and 400 *gins* for diet and servantes. And to supper to Ishebe; and paid for dyet 2 *ichebos* and 200 *gins*, and to servantes 300 *gins*.

November 30.—In passing by Cousattes, our host sent his sonne to desyre us to enter into his howse, and made us a banket. Soe I gave hym an *ichebo*, and 100 *gins* to servants. And at Setto, 2 leagues short of Oates, our host Magamon Dono had provided a banket for us. And so we dyned at Oates, and paid 1 *ichebo* and 200 *gins* to the howse, and 300 *gins* to the servantes; and betwixt Oattes and Miaco Skengoro Dono and Makey Dono mett us in 2 severall places with bankettes.

Soe this night we arived at Miaco, haveing made 10 leagues this day.

December 2.—We were envited to Cuemon Donos sonne to dyner, where we had very niggardly fare for our selves and worse for our servantes. This fello is Grubstretes sonne, and worse then the father, and that needes not.

December 3.—Our hosts kinsman, dwelling at Oates, brought me 5 salted cod fish and Mr. Nealson 3 for a present. He mett us at a towne beyond Oates, 2 leagues, with a banket at our retorne from Edo, and with an other as we went.

December 4.—I bought and paid for my selfe, viz. :—

3 duple womens gerdelles, cost...	03	1	0
3 duple wo. gerdelles, cost...	04	2	0
1 duple gerdell ditto, cost...	02	4	0
Watty of silke for a <i>keremon</i> ...	00	8	0
1 halfe peece ben silk to lyne a <i>keremon</i> ...	04	1	0
	14	6	0

November 10.— * * * * *
* * * * *

Towards night Torazemon Dono and an other gentellman came to vizet me from King of Firando, unto whome I made knowne how Semy Dono had used me about my *goshon*, which was thoccation I was staid heare soe long tyme without my dispatch from themperour.

November 11.—I went and tooke leave of King of Firando, I being ready to retorne to morrow for Miaco, and fownd him very weake and sick; yet he gave me very kind entertaynment, and wrott letters (as he tould me) to his brother and Semy Dono, to pay me the rest of money he oweth to the Company and to doe me justice against Gorezano and all others.

And before night Torazemon Dono and [] wrot me a joynt letter to deliver them my *goshon* for use of Semi Dono; which I denyed, and wrot them answer therof.

November 15.—There was presentes geven to Andrea and Maddalyna, his wife, Mrs. Adams sister, in respect they had sent us presentes of 2 *barsos* wyne, frute, and a fresh salmon, and came from Oregaua, 2 daies journey, to vizet us, viz. 1 peece velvett, 1 peece damask, and 5 *mas* wight corall.

Mr. Neelson fell sick on a sudden of a fever with a bloody flux, in greate extremety; so we sent for one of kinges chirurgions, to take his councill, Mr. Neelson being very earnest to be lett blood; but he councelled the contrary, saying it was nothing but an extreme cold he had taken which drove hym into this excesse of fever, which, out of dowbt, was his syting in his shert and a gowne 2 or 3 howrs together on the topp of the howse, to look at the fyre when the pagods were burned 2 nightes past.

November 17.— * * * * *
* * * * *

Capt. Adames went to Court againe to get our dispatch, but did nothing. Soe he talked with Chawno Shogero Dono about my departure from hence to morrow, I having busynes at Miaco and

else where and that Capt. Adames, havynge busynes to stay heare 4 or 5 daies after me, might bring it with hym.

November 18.—We departed from Edo this day, after nowne, and gave presentes as followeth:—To Capt. Adames 2 *tatta* black cloth, and one peece damask; and to Mrs. Adames 1 peece cushen velvett, 1 peece damaske, and 5 *mas* wight corall; and to Mrs. Adames sonne. Joseph 1 pec. velvet; and to his doughter Susanna 1 pec. damask; and to his wives mother 1 pec. damask; and to Tome Dono, *jurebasso*, 1 pec. taffety; and to Jacobe Dono, his clark, 1 pec. taffety. And geven to servantes in house 2800 *gins*; and paid for our diet 160 *tais*.

And so we went to bed to Sheningaua, 2 leagues from Edo; and paid charges, supper and breckfast, 4:1:6, and to servantes 400 *gins*.

November 19.— * * * * *
* * * * *

And paid for a colation at Caningaua 400 *gins*.

And for dyner at Todska 1000 *gins*.

And for ferrying over water 300 *gins*.

And so we went to bed to Oyse; and paid for supper and breakfast 2 *ichebos*, and to servantes 300 *gins*.

November 20.—We broke fast at Wodowra, and paid 1000 *gins*. And dyned at Facony, and paid 1000 *gins*. And la all night at Mishma; and paid for supper and breakfast 3:8:0, and to servantes 400 *gins*.

November 21.—We went to dyner to Yoishwarra, 1000 *gins*; and to supper to Yegery, and paid 3:0:7, and to servantes 200 *gins*. And paid at passag at Fagicaw 300 *gins*. * * * *

November 22.—We dyned at Shrongo; and paid 2:6:0, and to the servantes 200 *cash*.

And soe we went to supper to Fugida; and paid to the howse night and morning 3:2:5, being in 2 *ichebos*, and to servants 300 *gins*.

November 23.—We dyned at Nisakay; and paid 1 *ichebo*, and to servantes 200 *gins*.

he saw Jno. Yoosen stand in a corner with his present, and asked what he was; and, being knowne, he went away asking whether he were a Hollander, and yt was answered hym yea. "Whie" said he, "it is reported this fellow is much indebted and will not pay his creditors." Unto which a frend of his answered, it was to the Hollanders, his cuntremen, and to noe others; wherin his frend lied, for he oweth to divers others. Yet upon this report his present was received.

October 31.—I went and vizeted Chawno Shrogero Dono, and desird hym to be a meanes to get our dispach; and he tould me he would, and for our going to Langasaque with our shiping, we might doe it yf we would, as well as to Firando, for that it was all one to this Emperour, soe we might doe it.

Capt. Adames went to Cort, as the Councell did bid hym, but attended most parte of the day, and then returned without geting out our dispache.

November 1.—This day we reconed with Yadeo Dono, partner with Neamon Dono; but much trowble we had with hym, for he would have put lodghier, incomiendo, and servantes wages to acco. for goodes sould, and yet have kept all the profit to them selves, over and above the bare prise left with them, they having, upon my knowledg, sould it for much more. Also he would have put som thinges sould at a lower price then it was left at, with other unreasonable matters. Soe I referd all to Capt. Adames to make an end of it, without going to law, where I am ashewered we should have fownd small right, as I have known per experience.

November 2.—Jno. Yoosen came to vizet me, and brought me a present of sweet meates, enviting me hom to his howse, etc. Yt seemed by his speeches he was not well pleased with the Hollanders liberallety towards hym, considering the paynes he had taken for them, for which he hath the ill will of the Tono of Firando and divers others.

* * * * *
* * * * *

November 3.— * * * * *

Capt. Adames went to Cort to get our dispach, but returned without doing anything. Only Oyen Dono asked hym whether I were gon or no. Unto whome he answerd, how I could goe without lycence of themperour. So he tould hym I did well, and that we should forthwith be dispatched.

* * * * *

November 4.—I went to Oyen Dono, accompanid with Capt. Adams and Mr. Nealson, and by good fortune met hym in the street at his owne dore, desyring his Lordshipp to get us our dispach from themperour, which he promised to procure forthwith, being ashamed (as he said) we staid soe longe, and with all tellinge me he was beholden to me.

November 5.— * * * * *

Capt. Adames went to Cort to get our dispache, and was answerd we should be dispatched to morow. The Japons presentes, which came for *goshons*, were received.

November 6.—The Emperour sent me 20 silk *keremons* (or coates) for a present, wherof I gave 2 to Capt. Adames, 2 to Mr. Nealson, and 1 to our host of Miaco, Magazemon Dono.

November 7.— * * * * *

Also this day I went and took my leave of all the lordes of the Councell, but spoake with none but Oyen Dono.

* * * * *

November 8.—We dyned at King of Firandos brothers, where we were kindly entertayned, and I carid him a *barso* of wyne and a fresh salmon for a present.

* * * * *

have a coppie under his owne hand. So he went away, and said nothing to the contrary.

Matabio Oye Dono, our host of Oisa, sent me a letter with a present of 2 greate fyshes, to know whether I were in health or no, for that I was sick in his howse, and not heard any news whether I were recoverd or noe. He sent this man 16 leagues with this present only to see how I did. So I gave his man an *ichebo* of Gould to pay for his horshier and wrot a letter to his master.

We went this day to vizet a greate temple of Yemia Fachman, the god of war, with an other god, as they take it, joynd with hym, which every 18th day of eache moone the people goe on pilgrimage to offer to the shrines; and this was the 18th day, which made me the more willing to goe to see it being accomplished, with Capt. Adames, Mr. Neelson, and others. And I doe verely thinke there were above 100,000 people, men, women, and children, which went this day upon devotion to that place, and in many places in the way were comedies (or plaies) to be seene, and other showes; and before the temple the sorserars or witches stood dansing, with knottes or bunches of hawcks belles made fast to sticks, which they held in their hands, mumbling over sertayne prayers. But that which I tooke most note of was of the liberaletie and devotion of these heathen people, whoe thronged into the pagod in multitudes, one after an other, to cast money into a littell chapell before the idalles, most parte, or rather all which I could see, being *gins* or bras money, whereof 100 of them may vallie som 10 *d.* str., and are about the bignes of a 3 *d.* English money; which coyne (or brasse money) they cast in by handfulls, and then came out of the temple, delivered a writing to one that sat within the dore, who piled them one on the top of the other. And so the pilgrims turned on the left hand of the entry of the pagod, and in a gallery went 3 tymes about it, and soe departed away. There was many 100 of gentellmen which went on horsback to doe these devotions in the forme as afforsaid.

And soe, as we returned, we went into a *vento* or tavarne, where

we dyned of presentes and bankets which were brought us; and gave to the howse 500 *gins*, and the servantes 100 ditto.

Cacayemon Dono came to vizet me and tould me many matters, how his master and all the rest of the Councell were offended against the Hollanders, etc.

October 27.— * * * * *

Mr. Neelson envited Cacayemon Dono and Torazemon Dono to supper this night, and had the dansing beares. * * *

October 28.—Chauno Shrogero Dono, Emperoure factor, sent me a letter of his retorne to Edo; and I returned hym answer, desiring his frendship to procure us Emperours *goshon* to carry our shiping to Langasaque.

Capt. Adams went againe to Cort, to gett our dispach, but returned only with a nodd from the counsellors, with a smile. Also he understood that for 3 daies space Jno. Yoosens present is not yet deliverd, although he tendered it each day. And I had forgotten to note downe that Caquemon Dono, secretary of Oyen Dono, tould me that the said Yoosen brought a present to his master, which he asked hym whether it were stolne goodes or noe, for that, said he, the Hollanders are now well knowne to be comune theevs, etc.

Also, Capt. Adams being at Cort, Oyen Dono asked hym wherefore he came; whereunto he answered that he came for the dispach of the English Capt. "Whie," said he, "is he not gon? It is almost a month past since I thought he had byn gon." This he spoake in hearing of Jno. Yoosen, and soe went away laughing, for what event I know not, only Capt. Adames thought it was in mocking ye Hollanders.

October 29.— * * * * *

Capt. Adames went to Cort to get our dispache, and the Councell gave hym order to com to them to morow morning, for that they would talke with hym. * * *

* * * * *

October 20.—We went and vizeted Oyen Dono, the secretary, but had but one word with hym, he only biding us wellcom and so went to Cort. I thought to have delivered hym the writing I had made against the Hollanders; but he went away without it, although he saw me have it in my hand. So I gave it to his secretary, Cacakayemon Dono, whoe of hym self promised me to deliver it to hym at his retorne.

I also went and vizeted the King Firando, and carid hym 3 branches corall, containing 5 *mas*, and a bottell of strong water; and to his brother a branch of corall containing 2 *mas* 2 *condrin*. The king I fownd in company with certen caveleros whoe went lyk wais to vizet hym, he being very weake and full of the French disease, soe I think he will not live longe.

October 21.—I went and vizeted the Emperours merchant or factor, and carid hym a present of 2 branches corall, containing 5 *mas*, with a bottell hoot distild water.

I receved 18 *tais* for 18 *mas* wight corall of my owne, and 2 *tais* for a landshast of Companis, sould per Capt. Adams.

We were envited to dyner to Yada Dono, where we were kyndly entertayned.

October 22.—I sould 18 *mas* 1 *condrin* wight of corall at 10 per one silver, is 18 *tais* 1 *mas*, trusted. * * * *

* * * * *

October 23.—Capt. Adames was all day at Cort to get our dispach, but returned without doing of any thing.

October 24.— * * * * *

* * * * * we went and vizeted the pagod of Otongo, which these people hould to be the god of darknes (or hell), as the antientes called Pluto. It standes on the topp of a hill which overlooketh all Edo, and the idoll (or picture) of Otongo is made in forme lyke a devill, with a hooked nose and feete lyke a griffon, and riding upon a wild boare. He was painted after severall formes, but allwais monted upon a wild boare, which the people say was his blason or armes. And for that entent there

is a greate wild boare alive kept in a cage (or frank) at the foote of the hill, which I saw at my entrance. And there goeth an upright peare of [s]ton staie[r]s of 69 stepps, of a lardg breadth, leading directly up to the pagod; but an easier way is to goe compas about the hill. There was many people went to vizet that place, and their use is to goe 3 tymes rownd about the pagod mumbling out serten prayers. This I marked of dyvers.

From thence we went to an other pagod, where the eldest sonne of Ogosho Samma (a valient man) lyeth bured in a stately monument. This pagod is the seate of the greate or high bushopp of Japon, next after the *deyre*. His people used us very kyndly, and opened the dores of the monument, and let us enter in, and opened the secret place where the idoll of the dececed was placed, whereat all the Japons fell prostrate and adored it. And from thence they led us into the bushops chappell or oratory, all sett out with idolls and lamps, nether more nor lesse then in the papist churches, before which idolls the Japons did likewais fall downe and worship. This pagod (or monestery) was erected to the honor of Amida, a greate saint of China, equaled with Shacca. And I gave an *ichebo* to them which shewed us these matters, and so returned hom.

October 25.—Fongo Dono, the ould admerall, sent me a present of frute with a letter from his manor howse, 17 leagues hence.

Capt. Adames was all day at Cort to get our dispach; but had nothing from the Councell but a nod and smiling countenance.

October 26.—Mr. Nealson did but ask Capt. Adames for 10 shire maps without frames, which per his acco. he hath resting in his handes; but he fell into such a chafe about that matter, telling them which were about hym, in the Japon tong, that this was not the first tyme we had charged hym with falce accomptes and after reconynges. Truly I was ashamed to heare hym in such a humor; yet, after, yt seemed he recanted, for he came to me and asked me yf I know of any such matter. And I answerd hym, it apered by Mr. Eatons accompt that he had them, wherof I know yow (*sic*)

and soe for Languasakey with a *goshon* for Fingo Shiquan, per whome I sent the letters for Firando. And gave hym an *ichebo* to spend per way.

This day we went and delivered our present to themperour, viz. ;—

2 fowling peece.
1 de. cloth, black.
1 de. sadd blew.
10 peecees damask and satten.
104 *cattis* wax.
10 *cattis callamback*.
25 *cattis* silke.

October 10.—Capt. Adames went to Cort with our *jurebasso*, and it was ordayned to morow we should vizet the prince with a present, I meane themperours eldest sonne.

October 11.—We carid a present to the Prince Wacange Samme :—

1 fowling peece.
3 *tatta*. black clo.
3 *tatta*. primeroz.
5 peece damaskes or stufes.
1 cake wax.
1 peec. *calemback*.
4 bundelles silk.

We attended a greate while to have entrance to the prince after our present was carrid in, and in the end were put affe till to morrow, I doe think by instigation of som from the *Tono* of Firando, who enformed them we came to make processe against the Hollanders. Once we returned back, and left the present behind.

October 12.—This day we carid the present to the Prince Wacange Samme, or rather delivered it to hym, yt being well accepted of; and the Emperours factor went with us.

October 13.—We carid our presentes to Oyen Dono, and to his secretary; and to Codgskin Dono, and to his secretary.

More presentes geven to Emperours Councell, viz. to Oto Dono, Tushma Dono, Itame Genuske Dono, and their secretaries.

October 14.—We carid presentes to Chana Shogero Dono; to the two admeralles; and to sonne Fongo Samma.

The admerall sent a bark for us, to carry us to a howse of pleasure where he was, and entertayned us very kyndly. So at our retorne we gave an *ichebo* to the barkemen.

The singing man and Sugien Donos brother came to vizet me, and brought a barken [baken?] box of meate for a present.

October 15.— * * * * *
* * * * *

The King of Firando sent a man to me with a letter which he rec. from Oto Dono, advising hym of the present we gave hym, willing hym to geve us thankes for it. Also Gensero Samma, the kinges brother, sent to envite me to dynner 2 daies hence; but I returned answer that as yet we had not donne any thing for dispach of our busynes at Cort, but howrly attended the Councells answer; but, having ended, I would com and kisse his Lordshipps handes, etc.

October 18.— * * * * *
* * * * *

I sould this day 5 *tay* wight of corall for 43 *tais*.

October 19.—I forgot to set downe how Cakeyamon Dono came to vizet me, telling me he came new out of cuntrey from the funerall of Oyen Donos wife. He also advized me that I should not think ill of hym, yf he ware forward in wordes to speake in the Hollanders behalfe in presence of the King of Firandos people, for that he did it of purpose. This is a craftie fello. I sent hym a present this day, viz. 1 peece fugered satten, cost 8 *tais*; 1 branch corall, containing 2 *mas* 9 *condrins*.

The King of Firando sent one of his gentellmen to vizet me, with many complementall wordes and offers of greate frenshipp, and that he wanted not to labour to get our dispach. I returned his Highnes many thankes; but rather imagin he standeth in dowbt we goe about to get lycense to send our shipping to Langasaque, in respect we desire to be apart from the Hollanders, and in that he is not deceaved. But whether it will take effect or no, I know not, only the Emperours factor sent me word per Capt. Adames it would.

where I was taken on a sudden with such an extrem wind collick and stoping of my water that I verely thought I should have died. So I sent an other letter to Capt. Adames of my stay per meanes of sicknes. Our new host, seing me sick, would not let me stay in his howse; soe our ould sent for me, when the King of Figen was gon. We paid for our dyner an *ichebo*, is 1:6:4½, and to servantes 1 C. *cash*.

October 3.—We departed from Woiso and paid howse ij *ichebos*, 3:2:9, and to servantes 500 *gins*, is 0:8:2½; and I gave children, in silver, 0:8:5, and to a maid servant that attended me and warmed clothes all night 1 *ichebo*, and to goodwife of howse a pece rich taffety.

This day we met the Hollanders returned from Edo, 14 leagues short of Edo, 7 Hollanders besides Japon servantes. There was small greeting betwixt us; and so they passed.

We went to bed at a place called Todska.

October 4.—Betyme this mornyng, at break of day, we met Capt. Adams, whoe came to meete me 10 leagues from Edo. And sowne after we met 2 horses sent from King of Firando to meete me, attended on by 4 men.

And soe we went to dyner to a place called Caningawa; and paid 1 *ichebo* and 2 C. *gins* for howse, and to servantes 2 C. *gins*, and for charges kinges horses 438 *gins*, and for colation at Shiningawa 500 *gins*.

And sowne after we met on of the King of Firandos gentelmen sent to meete me, with pikes carid before hym, to accompany me into the towne; and sowne after Yada Dono and Capt. Adames his children with a banket, before our entrance into the cittie. Soe I gave the King of Firandos men which came with the horses 1000 *gins*, and sent them away. And sent Mr. Nealson with our *jurebasso* to King of Firando, to thank hym for the honor he had done me, and that I was so weary now after my sicknes I could not com my selfe, but ment to vizet hym to morrow.

October 5.—I went to vizet the King of Firando, and delivered hym the letters I brought from his brother, and carid hym a present,

viz. 2 *tatta*. of murrey cloth, 1 muskovie hide, 3 peeces damask; and to his brother 2 peeces of damask.

And I shewed the information to the *Tono* of Firando that I ment to put up to the Emperour against the Hollanders, which he read over with silence, and then called Torazemon Dono to see it; whoe having read it over, looked somthing sowerly on the matter, for he was allwais a great frend to Hollanders.

October 6.—Capt. Adames with Torazemon Dono and our *jurebasso* went to the Court to know when we might have audience of themperour and deliver our present, but they fownd so many noble men geving presentes to themperour, it being the 28th day of the moone (and a festivall day), that they could have noe answer, and soe were put affe till to morow.

The King of Firando sent me a present of a barill wine, and a table of cuttell fish drid.

October 7.—I wrot a letter to Firando to Ed. Sayer and Jno. Osterwick, with 2 others to China Capt. and Matinga. In that to China Capt. I wrot for my *goshon*. These letters sent per horsmen.

Codgskin Dono sent me a present of greate peares, of 2 spans about one peare.

Also I rec. a letter from Semi Dono, dated in Miaco, as he also wrot an other to Capt. Adames to same effect, to gett hym out a *goshon* for Cochinchina. Soe this night Torazemon Dono came and brought me the letter with the ould *goshon*, and Caqemon Dono came in company with hym and an other gentellman of King of Firando. They used many speches to perswade me from putting up this writing which I have made against the Hollanders, which I esteme is Torazemon Donos doing, for that he hath allwais byn a frend to Hollanders.

October 8.—Capt. Adames was sent for to the Court, soe that I thought we should have delivered our present to themperour this day. But he remayned there from nowne till night, and had not one word spoaken to hym.

October 9 (*Conguach* 1th).—Capt. Adames sent his man to Firando

September 24.—We dyned at Acca Sackey and paid diet 1:3:0, and to servantes j C. *gins*.

We mett this day in the way Soyemon Dono and Semi Dono, of Firando, going downe from Edo to Firando, but about what busynes I could not learne. Soyemon Dono tould me that themperour knew of the Hollanders theft and that I was coming up to the Cort. And after, when I mett Semi Dono, he wonderd at the matter, and said nether themperour nor King of Firando knew nothing thereof; but I think he dealeth dubly, etc.

We went this night to bed to Yoshenda, having made this day but 7 leagues; and paid for diet night and morning 2:6:0, and to servantes 2 C. *cash*, and to his sonne for a barill wyne 5 C. *cash*.

September 25.—We went to dyner to Famma Mattes; paid diet i *icheboes*, and to servantes 2 C. *cash* or *gins*. And soe we went to Mitsque to supper, having made this day 12 leagues; and gave for diet night and morning 2:6:0, and to servantes 2 C. *gins*.

I forgot to note downe that, passing a river, the boatmen misused our servantes and would not let our horses passe, but gave them blowes. Soe I showed them a passport or comand from the great justis of Japon, Inga Dono, wherin he comanded them to geve us free passag without molestation; which seeing they cried pecavie and followed after me 2 leagues to aske pardon, many other neighbours accompanying them to speak in their behalfe, for they knew full well, yf I had made complaint, it had cost them their lives.

September 26.—We went to dyner to Cagingaua, a towne wherin themperours unckle dwelleth; and paid diet 1:4:0, and to servantes 2 C. *cash*.

And met a servant of Semi Donos by the way, lame, unto whome, he asking for God sake, we gave 300 *gins*, etc. Also I met Gonrok Dono, the *bungew* of Langasaque, going downe from Edo, whoe took knowledg of me before I knew hym, and offerd me much kyndnes in wordes, etc.

Soe we went to bed to Cainagh, having made this day 8 leagues. At this place I met a China coming from Edo, per whome I

wrot to Andrea Dittis, China Capt., and to Ed. Sayer and Jno. Osterwick, of my arivall in this place.

We paid for diet here 3:2:9, and to servantes 3 C. *gins*.

September 27.—Raynie wether; per night a very storme or tuffon.

We passed the great river and went to dyner to a towne called Fugieda; and paid diet 1:3:0, and to servantes 2 C. *gins*. And paid 40 men, to helpe us over the deepe river without bridg, 1000 *gins*. And went to bed at Shrongo, having made this day 8 leagues, to get over the rivers before they did rize per meanes of this rayne.

September 28.—We staid all this day at Shrongo by meanes of the raynie wether, and departed from thence the morowe mornynge; and paid for diet all the tyme 4 *ichebos*, is 6:5:8, and to servantes 3 C. *gins*. And I gave our hostis a picture and a musk codd.

September 29.—We made this day 7 leagues, going to bed at a place called Cambara, and could goe no farther, the way being fowle and no place of lodging neare. And paid for 3 meales 3:9:0, and to servantes 2 C. *gins*.

September 30.—We went to dyner to Yoishwarra. Paid to the howse for diet and to servantes 1000 *gins*, is 1:6:5. And went to supper to Mishma, at foot of the great mountayne, * * *

* * * * *

October 1.—We went to dyner to a place called Facony, on the top of the mountayne with the greate lake, and paid diet and howse 9 C. *cash*. And we went to bed to Wodowrey, at the other foote of the mountayne; a greate towne all burned the last yeare but one howse. Soe we made this day 8 leagues. The towne standes by the sea side called Wodowra; from whence I wrot Capt. Adames an other letter per expres that to morrow I ment (God permitting) to be at Edo. And I wrot 2 letters to King Firando and Torazemon Dono to same effect. And we paid for diet at Wodowra 2 *ichebos*, is 3:2:9, and to servantes 3 C. *cash*, and to a screvener to writ letters 3 C. *cash*.

October 2.—We went to dyner to Woiso, * * * *

* * * * *

September 18.—I gave our hostis at Miaco 2 pictures and 2 musk cods; and sent 3 musk coddess to Inga Samas secretary; and gave our hostis little doughter 1 musk cod. And I cut a peece white satten lyn to make Mattinga a *keremon*, and gave the rest to our hostis littell doughter, and left the *keremon* with our hostis to be wrought with silk and gould.

Cuemon Dono envited us to supper, where we had kynd enter-taynment with dansing beares, to whom I gave a bar plate.

September 19.—This mornynge lowring, calme, droping wether, but, after littell, wind northerly. Raynie wether all day, but much more by night, with an earthquake, etc.

We set forward from Miaco towards Edo, and dynd at Fushamy, whither divers frendes accompanid us with dansing beares (or *caboques*). So we paid out 2 *ichebos* of 1 *ta.* 6 *m.* $4\frac{1}{2}$ *co.* peec. for dyner; 2 *ichebos* to *caboques*; 1 *ichebo* to other women; 200 *gins* to servantes in howse; 500 *gins* geven in a howse per way, where our host of Miaco provided a banket.

Nota, that our *rockshackes*, 6 of them to carry me to Edo and back againe, were agreed withall for 4 *tais* 3 *mas* per peece, we to fynd them victuelles. And horses to cary our provition and pres-entes, at 5 *tais* 7 *mas* per horse; and 7 *tais* for a horse for Mr. Nealson, to cary things to Edo and then to be free, and pay their owne and horse charges themselves. Also Mr. Nealson paid the horsemasters 50 *tais* on acco., and 25 *tais* to the *rockshackes*.

* * * * *
* * * * *

Soe betyme in the mornynge we departed from Cusattes; and paid out to the howse, for expenses, 4 *ta.*, and to the servantes 400 *cash*.

September 20.—A kinsman of our host at Miaco mett us in the way with a banket, having com xx milles; unto whome was geven an *ichebo*.

We went to dyner to a towne called Ishebe, where we were constraed to stay all night because the waters were up, that we could not passe by reason of much rayne which happened. We

paid for our diet at Ishebe 3 *ta.*, and to the servantes 200 *cash*.

September 21.—We dynd this day at a towne called Suchiama, and paid for our diet 1:6:4 $\frac{1}{2}$, and to the servantes 300 *cashe*. And went to supper to a towne called Sheque no Jeso; and paid for our diet with brekfast 2:6:0, and to the servantes 300 *cash*.

September 22.—We went to dyner to a towne called Ishaquish; and paid for our diet 1:3:0, and to servantes 100 *cash*.

And we went to supper to Quanno, where we were at our arivall (servantes and all) envited to supper by the governor or *tono*, where I have not had better enter-taynment since I came into Japon. I had laid out a present of a peece damask, a bottell Spanish wyne, and an other of annis water, to have geven hym, with 3 musk coddess; but he refuced it, saying he would not take any thing till I returned from themperour, his master, offering me barkes for nothing to carry me and all the rest over the water to Mia, 7 leagues; which I thanked hym for, having hired others before. And soe per night we departed from Quano per water; and gave our host, for use of his howse and *rackshackes* diet, 1 *ichebo*.

September 23.—Som 2 howers before day we arived at Mia, at Fox my hosts, where we brok fast and laded our horses, being 14. And paid for our diet and travell 1:6:4 $\frac{1}{2}$, and gave the servantes 1 C. of *cash* or *gins*.

And we went to dyner to Cheru; and paid diet 1:3:0, and to servantes 1 C. *gins*.

Here we met themperours eldest sister with a greate trayne after her.

And sowne after we met the Portingalls returned from the Court at Edo, it being 8 daies past since they departed from thence. They say the Hollanders delivered their present and had audience the same day.

Soe we went to Occa Sackey to bed, having made this day but 7 leagues; and paid for diet night and mornynge 2 *ichebos*, 3:2:9, and to servantes ij C. *gins*.

This towne Ogosho Sama was borne in.

ij peces damask, at 6 *tais* peece.

And j pec. rich taffety, as good as the rest.

But going to the castell to deliver it, we had answer that the governor slept and the secretary was biden out to a banket. So we returned without doing anything.

I am of opinion our host Grabstreet doth play the gemeny, and per instigation of Capt. Adames, both taking the Hollanders partes for lucar. Yf it be proved soe, God reward them according to their deservinges, and God deliver us from frendly secret fowes.

September 14.—We set forwardes towardes Miaco this morning.

I gave our hostis ij pickturs and ij musk coddess; and to Woman Dono 1 pickture, 1 musk cod; to the nurce 1 musk cod; to the Anymall 2 musk cods; and to them in plate bars $9\frac{1}{2}$ *tais*, 2 of which was to the humerus of Mr. Neelson; 1 *tay* to their *casero*; 1 *tay* to Shisque Dono, and 1 musk cod; 5 *mas* to their maid; 5 *mas* for sowing my bedd.

So this night we arived at Fushamy at supper tyme; but our hostes sonne of Miaco met me per the way with a banket.

September 15.—We departed this mornyng towardes Miaco.

September 16.—We set Mr. Jehan the scribe awork to write out an information against the Hollanders, to deliver up to the Emperour, the coppie whereof I have both in English and Japons.

We went to vizet the antient monumentes of Japon, and amongst the rest the pagod, or monument, erected in remembrance of Ogocho Samma, the last Emperour, which, in my opinion, is the most magnificent peece of work which I have seene in Japon, both for the greatnesse and workmanship. And their is 300 *boze* (or pagon pristes) have allowance and mentaynance for eaver to pray for his sole, in the same sort as munkes and fryres use to doe amongst the Roman papistes, and have their lodginges and buildinges about it in most sumtuouse sort, with a 4 square cloister and other *futtakies* (or chappels) within the said compas. All which is seated on the side of a mountayne among a greate wood of pine trees, most pleasant to behould.

The great *dibattes*, or pagod, standeth in length due north and south, with 100 pillars on a rowe in length and 6 in breadth, the greate idoll or imag standing in the midst of the pagod, looking with his face W.ward. There is 15 pillars in a rank on eache side with lantarns in them go downe to the gate howse W.ward, with on pillar or grete lantarne before the pagod dore. And the other pagod with the 3333 images standeth due S.ward from the said pagod.

Our hostes sonne accompanid us and provided bankettes for us in 2 or 3 places in the way.

September 17.—We went and vizeted Inga Dono, the Lord Cheefe Justis of Japon, and carid him a present, viz. :—

- 1 fowling peece.
- 2 *tattamis* black cloth.
- 1 Russia hide.
- 2 cakes wax.
- 3 peeces damaske, cost 6 *tais* peece.
- 10 peare specktales.

And to his secretary :—

- 2 peeces damask, cost 6 *tas* peece.
- 1 peece ruch taffety.

And withall I shewed hym the coppie of the information I ment to put up against the Hollanders, wherat he marveled. I said they were theeves, for that allwais till now the Hollanders reported our nation to be the comune theevs of all the world. "But," said he, "yow doe well to make the truth knowne, and your writing is well framed. Soe yow need not dowbt but themperours councell will geve eare unto yow."

He gave me a writing to all place where I came, to lett me have horses at ordenary rate, and to all hostes to use me and the rest in my company respectively.

The *mackey* man envited us to supper, where we were well entertayned with dansing beares, and I gave them a bar plate, ill bestowed.

September 3.—We departed from Shimina Seak this day in the mornyng, and paid out to our host, viz. :—

For chary of diet, our selves and servantes	07	2	0
For wyne for bark... ..	01	0	0
For rice for bark, our provition... ..	01	0	0
For herbes and onyons and redesh	00	2	0
Geven the servantes	00	5	0

More, I gave to our hostis 2 musk cods, and to her daughter 1 musk cod, and to 3 *caboques* 3 musk cods.

And at son rising in the mornyng we arived at a place called Yew, under a hill, without howses, having made this day and night past 45 leagues.

September 4.—We made this day, till night we came to an ancor neare Miwarry, 25 leagues, being 7 leagues short of Bingana Tomo.

September 5.—With much adoe we got this day to Bingana Tomo, having made 7 leagues, rowing in raynie wether against the wind.

Certen Chinas came to vizet me heare and sent letters by me for Edo, telling me that now they knew well Hollanders theevs and Englishmen trew men and ther frendes.

September 7.—The wind being contrary, I sent away an expres, Leon, with letters to Capt. Adames, as Mr. Nealson did the lyke, to perswade hym from the accompanying the Hollanders, yf it be possible. I also sent other 2 letters in Japons to the King of Firando and Cacayemon Dono, secretary to Oyen Samma.

We departed from Bingana Tomo against the wind, and rowed it up to an iland 3 leagues offe, where we came to an ancor, the wind encreasing. Iland called Sherais.

We paid at Bingana Tomo, viz. :—

To the howse for charges	06	5	0
To the servantes	00	5	0
For wyne	03	2	0
For wyne for Leon... ..	00	1	5
And I gave Ochora	00	3	0

Our hostis a picture and 2 musk coddess; her daughter in law a pictur and 1 musk cod; her daughter a musk codd; to her daughter

in laws father a picktur and ij musk coddess. And I paid 2 *tais* 4 *mas* to *caboques*.

September 8.—We departed from Sheraish and made this day till son rising next day 15 leagues.

September 9.—We came to an ancor towards night at a towne called Moro, 30 leagues short of Miaco, and stayed the tide; and soe put to sea againe and made 22 leagues till mornyng at son rising. There was 500 barks at Moro alltogether put to sea towards Miaco, som of them having staid there 20 daies for a wynd.

September 10.—We arived at Osakay late at night, having made this day 20 leagues.

At my coming to this place I fownd Leon, the expres I sent from Bingana Tomo, not yet departed, nether had Grubstreet our host sent away my other letter which came from Firando per conveyance of our hostis at Bingana Tomo; which gave me small content. Yet in the end I perceived per Grubstreet that Capt. Adames had tould hym I had no reason to complaine against the Hollanders as I did, which was the occasion he sent not that letter after hym. Soe here I wrot an other letter to Capt. Adames, and sent both it and the rest per post after Capt. Adames.

September 11.—Tozoyemon Donos wife of Sakay sent me a *sesto* (or basket) of Japon figges and peares, and an other *sesto* of lyke to Mr. Nealson.

September 12.—I forgot to note downe that yisterday Mr. Nelson went to Croby Dono, Capt. Adames host, and took a note of all the goodes Capt. Adams wife or Neamon Dono had sent from Edo, to thentent we might better recon with them at our coming to Edo.

September 13.—We went to the governor of Osakay, Shemash Dono, with a present, as also with another to his secretary, viz. :—

- 1 fowling peece, damasked.
- 2 *tatta*. strawculler brodeloth.
- 3 peeces silk damask, at 6 *tais* peece.
- 1 Muskovie hide.

And to the secretery :—

August 22.—Tonomon Samma, the kinges brother, sent me his letter for the king his brother. And divers others came to vize me and wish me a good voyage.

August 23.—We set forward on our voyag towards Edo this mornynge about 6 a clock in the mornynge, and at night came to an anker at Languay, the farther towne, 13 leagues from Firando.

August 24.—We departed from Languay about midnight, and at nowne this day came to an ancor at the iland of Anushma in Faccatay, and there remayned all the rest of day and night following, wind being a stiff gale at N. E., the sea going hie. We la on shore all night, and gave to the howse xij *mas*, having made hitherto 22 leagues.

August 25.—We departed in the mornynge from Anushma to a port on the maine of Faccata, called Chuiasaquy, 3 leagues from Anushma, and 19 to short of Shimnaseaque. Here we understood of a small China junk which was entred into a port of Faccatay, 4 leagues hence, called Ginushma, being driven thither per contrary windes, but bound for Firando, laden with suger, purselon, and other matters. But the *Tono* of Faccata will not let her goe for Firando, but discharg and sell her goodes there.

August 27.—I was enformed this day that the China junk which was at Ginushma, 3 leagues hence, was one of the 3 which the Hollanders took and put their men into. These Chinas, having lost the sight of the Holland shippe, made the 7 Hollanders drunk that were put into the junk, and then cut their throtes; but, the wind being contrary, they could not retorne for China, but passed by Firando and soe put into Faccatay, where they staid not longe but put to sea againe, thinking them selves to neare Firando, where the Hollanders are; and are gone, as the report is, to a harbor on the north part of Japan, called Quitamare. Some are of opinion that the junk which put into the back side of Xaxma or Bongo, whome went to Miaco to sell their silke, was lykwais one of them, although it were geven out they were theeves and had stolne that silk and goodes from their owne cuntremen.

August 28.—This day being a festivall day, our host of Wattary (we lying ashore) envited us to dynner at his owne charge.

August 29.—The *bongew* of Faccata envited us to dyner, and sent me word he was sorry he was out of the place when we arived, otherwais that we should have lodged in his howse. Soe with thadviz of Mr. Nelson we sent hym a present of a peece of damask and a bottell of annise water.

And within night, the wind coming sotherly, we waid ancor and put to sea from Watary, and paid out in howse where we la these 5 dais, viz. :—

1 bar plate to good man howse	2	3	0
And 1 peece green taffety			
And to his wife, in small plate	0	3	0
And to his littell child	0	1	0
And to his servantes	0	2	0

August 30.—We arived at Shimenasek this day, about 3 a clock in thafter nowne, having made 20 leagues. Here our host tould me that Leon overtook Capt. Adames before he arived at Osakay, and that the bark Leon went in returned back per this place 5 daies past, and is gon for Firando, and that the marrenars tould hym Capt. Adames ment to stay for me at Miaco, which God grant.

Our host tould me that, before the Hollanders went from this place, there were Japons which brought hym newes how the Hollanders had taken 5 English shipps, 1 of which they had brought into Firando without any Englishmen in her, unto which Capt. Adames said littell, nether tould the Hollanders what the others said unto hym; but that was all one, for one of the Hollanders spoke the Japon tonge.

September 1.—I received a letter from Capt. Adames, in answer of myne sent hym per Leon thexpres, whome he returned back unto me with such an unsezonable and unresonable letter as I littell suspected he would have done, saying he was non of the Companies servant, and is, as it seemeth, altogether Holandized, perswading me not to goe up about this matter.

August 17.—I wrott ij letters, i to Bantam, directed to Capt. Balle, and thother to Camboja, directed to Mr. Georg Savidg, with the former in it rec. back from Nicholas Marin. And these letters I deliverd to Andrea Dittis, who gave conveyance to them per way of China.

Capt. Speck sent for Mr. Osterwick to com and speake with hym, of which he tould me, and I had hym goe and knowe what was the matter. Soe at his retorne he said the cheefe occation was for that I spoke ill of their comandars or generalls of the Indies, wishing me to refrayne my tong, or else to take heed of my selfe. Also he said he sat still in his howse and said nothing tuching thenglish, as also that there could nothing be done in thenglish howse but that he knew it within xxiiij howers after; and that he held me for a furious and hastie man which misused all thenglishmen in the howse, and did all thinges on my owne head and spleene without taking councell. The first point of these speeches Jno. Osterwick made knowne unto me, and the rest tould unto other Englishmen which gave me to understand thereof. I dowbt this Jno. Osterwick, because his father was a Duchman, and it may be he dealeth dubly.

Soe, being tuched soe neare by this prating Duchman, I took occation to write hym a letter in Spanish, the coppie wherof I have extant, in which I advized that I marveld much he medled in my howsehold affares, braging that nothing could be donne but he knew it within xxiiij howrs after, esteeming me a hasty, furious, and he might as well have said, a madd man, doing all thinges on spleene without councell. Unto which I answerd that I desyred to know my accusers, which yf he did not manifest, and that yf any man went upon spleene or ill will to geve out or speake such ill and falce reportes of me, that he or they lied in their throtes. And whereas he said he sat still in his howse and said nothing tuching thenglish nation, my answer was, they hadd not geven hym nor them any occation hitherto, nether in taking of shipping, killing of men, and robing them of their goodes. And, yf I spoke ill of their

generall, I did it upon a good grownd, holding hym as an enemy to my soverigne lord the Kinges Matie. of England and his estate in taking of shiping, killing his Matis. subjectes, and bereving them of their goodes. And as tuching his thretnyng speeches, I did not well understand his meanyng, but gave hym to understand I did nether feare his wordes nor weapons.

He also sent me word that I might make what hast I would to themperour to make complaint, and that he would follow after at his leasure, and that I could doe nothing till he came. Unto which I answerd in my letter that I went not up to themperour to demand restetution of shipp nor goodes, for I was assured to have satisfaction in England, and therefore he was deceived in that matter, and might ether goe up or tarry at home yf he list.

August 19.—I receved a letter from Capt. Adams dated the 13th present, at a place 10 leagues beyond Camyna Seke, wherin he writes me of the wrack of many barkes, and that the governors bark of provition is all cast over bord but one peece of ordinance.

* * * * *
* * * * *

Also that a China bark or junk arived in Xaxma with much silk, which he had taken from other Chinas and sould it at Miaco for 220 *tais* the *pico*; but themperour, coming to know they are theeves, hath geven them into the handes of other Chinas, to have the goods returned to whome they belong, and execution to be donne upon the offenders.

And this day news is com from Capt. Whow that it is not Niquans junk which is cast away, but an other, smaller, of not halfe themportance, but belonging to same owners.

Alexander, a Scotsman in the Duch shippes, gave me 6 China picturs of saynts and our Lady, paynted upon bras leaves.

August 21.—Icana Came came to vizet me and take leave as he said, I being ready to goe up, and wished me to take good councell in my proceadinges against the Hollanders, and that he knew the King of Firando would assist me therin in all he could.

lead, and other munition, and sould it to their enemies. "Why," said the other, "are the Englishmen your vasselles that they are bound to observe what yow would have them, and may not they doe as they please with that which is their owne to any one they esteem their frendes? As," said he, "they bring lead and such other matters as themperour hath need of yearly, which now it seemeth yow have taken, that non is lyke to com this yeare. Soe that," said he, "this will make much against yow." Whereunto Capt. Speck has littell to replie.

I gave Matinga a silke *keremon*, a *catabra* of same, and an upper garment of fine white casho.

August 13.—I wort a letter to Capt. Adames to same effect as the former, and sent it per our hostice of Bingana Tomo to send it from thence expres.

August 14.—Tonomon Samma, the kinges brother, sent for me to come and speake with hym; which I did, and fownd that the Portingalles had againe made complaint against Harnando Ximines and Jno. Portus, saying they were murtherers of their capt., with many other falce reportes of them, desyring to have them deliverd into their handes. Unto which I answerd, that, yf the Portingales had anything to doe with them, they should goe before themperour, wheare I would answer for them, and to their shame prove their reportes falce.

August 15.—I put into one chist to carry up, viz. :—

- 1 pece yello shag.
- 1 peec. ruch wrought velvett.
- 1 pott musk, containing 37 coddess.
- 1 box curral.
- 2 peec. red cherenis.
- 1 peec. black and green grogran.
- 1 pec. red damask.
- 1 pec. ruch figerd satten.
- 2 peec. corse damask.
- 2 pec. black ruch taffety.
- 1 pec. fyne white China taffety.
- 1 peec. Japon taffetie.

- 1 pec. yello satten.
- 1 peec. ordinary taffeties.
- 3 pec. white satten Lymis.
- 3 peeces damask.
- 5 peec. satten, Capt. China.
- 1 peec. orreng culler shagg.
- 1 pec. oreng culler velvett.
- 4 pec. ordinary taffeties.
- 6 pec. ruch taffeties.
- 15 pictures.
- 1 pec. ordinary taffety.

Also Capt. Whow sent me a letter with many frendly speeches, that he and what he had was at service of me and thenGLISH nation during life for that, till now, they stood dowbtfull that thenGLISH and the Hollanders were all one, but now were fully resolved to the contrary; and that in all hast they would send word to China of what was past, to the entent to put them out of dowbt.

Gonosko Dono, an ould gentelman, our frend, dyed this evenyng. He was father in law to Ushanusque Dono, our *bongew*, and the only souldier esteemed of by Foyne Samme, thould king.

August 16.—We went to Tonomon Samme, the kinges brother and carid hym a present, I being reddy to goe to themperour, viz. :—

- 1½ *tattamy* straw culler cloth.
- 2 *tatta*. straw culler bayes.
- 1 Russia hide.
- 3 *cattis ginco* that came from Cochinchina.
- ij greate gallipottes.
- ij small gally pottes.
- ij Duch jugges.
- ij green tuns.

And I desird his letter of faver to the king, his brother.

Also Taccamon Dono, cheefe justis, sent me a *baroso* of wyne and a drid salmon. And sowne after I sent Mr. Neelson and our *jurebasso* with a present of j peece of damask and ij *cattis ginco*, which he took in good part, and offerd us all frenship he could doe our nation.

* * * * *

thought good. Unto which I answered they might showe themselves frendes to thenglish, yf they pleased, ether now or hereafter, but for my parte I did not care a halfe peny whether they did or noe. And soe they departed.

August 10.—We had a councell this day, wherat assisted me Ed. Sayer, Wm. Neelson, and Jno. Osterwick, where it was debated whether it were fiting to send up to themperour, to complaine against the insolentie of the Hollanders in presuming not only to take our shippes, but openly to bring them in to our disgrace. Wherupon it was concluded that I my selfe should take that long and troublesom voyag in hand, and that Mr. Wm. Neelson should accompany me, as well to look out and cleare debtes above, and bring reste downe, as also to carry up with us such matters as the factory afforded, and to buy stufes to geve presentes to themperour and his nobles (at least, yf they would take them), or els to make sals therof, yf they were refused. Also it was ordayned to send away a post, both by water and land, after Capt. Adams, to enforme hym of the thevery of the Hollanders, to the entent he should retyre hym selfe from them and stay my coming, and not goe with them before the Emperour.

Soe we dispatched a swift bark of 5 ores away, not dowbting but they will sowne overtake them, for that our host Tozayemon Dono of Sackay arived heare this day, and left hym at Shimonaseak two daies past, and I make acco. our bark will be at Shiminaseak.

Oyen Dono came to vizet me in the name of Tonomon Samma, offering me all assistance against the Hollanders, and wishing me to make hast, not dowbting but the Hollanders would be driven out of Japon, yf I made my complaint in due forme against them.

Also yt is tould me how the Hollanders have made a greate *pancado*, or sale of silk to divers Japons, and the silk waid out and sealed up, but coming to payment there is 10 *taies* in a *pico* difference in the price, which amounteth to above 4000 *taies*. So that much adow is lyke to be about it.

Oyen Dono being gon, Sugian Dono of Umbra came unto me (as from Tonomon Samma) and wished me to make good enforma-

tions against the Hollanders, wherin he would assist me, and made no dowbt but they would be banishid out of the cuntrey. I desired hym that he would assist me in the matter, and that I might be quickly dispatched, to goe up to the Emperour. Soe he went from me to the *tono*, telling me he would use such dilligence I should be dispatched to morrow.

August 11.—I went to Tonomon Samma, or rather he sent for me, to know whether I ment to goe to themperour or no, to complaine against the Hollanders. And I answerd hym, yea. "But," said he, "do yow pretend to comence any processe against them?" To which I answered, noe, for that I would seek justice against them in England; only my pretence was to geve themperor to understand they were comune theeves and sea rovers and took all men they met withall, without exception, were they frendes or foes; and that his Matie. might doe well to embarg their shippes and goodes till he better understood the truth thereof, and not suffer them to carry out victuelles and munition and money as they did, and to keepe two or 3 shipp to goe a roveing as they did this last yeare, to take Chinas and all others they mett withall under culler of them; which they could not doe, had they not this receptacle. Yt seemed he lyked my answer well, and wished me to proceed therin formally, and that he for his parte would [geve] assistance in what he could, and write to the king his brother at large thereof, whome he knew would take my parte against them; as not haveing yet forgotten the complaint they made against hym to themperour the last yeare; and that I needed not to carry any *bongew* up with me, in respect the kynge hym selfe was theare, whoe he knew would assist me in person to goe to themperour and his councell.

We agreed with a bark this day to cary us to Osakay for 1x *taies* plate bars.

There was som which came and tould me this day that Tonomon Samma, the kinges brother, and others asked the Hollanders wherefore they tooke Englishmen and their shipping in this sort; unto which Capt. Speck answered, it was because we brought shott, powder,

August 8.—About midnight I had news brought me that the ship without is a Hollander, and com from Molucos, and that her mast is cut over board, and the ship much broaken. So I sent Ed. Sayer in the morning to the Duch howse to know the certen news, and sent out our *foy fone* to helpe to toe her in, shee being but a littell distance without and the wether calme. And presently after a French man, chirurgion of the *Son*, came to me in secret, and tould me that this shipp without was an English shipp, and one of iij which the Hollanders have lately taken at Molucos, not without slaughter of many men, and the rest taken prisoners, and sent this small shipp to bring news hither of it, I think of spite to scorne thenglish nation. And, as they say, an other great Holland shipp, called the *Black Lyon*, is without, and com from Bantam. Yt is to be esteemed they have taken our shipp which should come from Bantam, and dowbtfull they did the like the last yeare by the *Adviz* which Mr. Wickham went in.

After nowne our *foy fone* returned from the Dutch Capt. Speck, telling our *jurebasso* Co Jno. that yt was an English shipp they had taken by order of war, and therefore had noe need of our helpe to bring her in. And this tyme Co Jno. tould me that out of dowbt it was the ship *Adviz* that Mr. Wickham went from hence in the last yeare, and that he saw som negros in her which were heare the last yeare. Soe herupon I went to Oyen Dono, the kinges governor, and tould hym what past, desiring hym to speake to Tonomon Samma, the kinges brother, to let me have a *bongew* to goe aboard this shipp betyme to morrow, to take notis what she is, and whether the Hollanders take them selves enemies of thenglish or no, and, in what manner they have taken this shipp, to thentent I might goe to themperour to have justice.

August 9.—I sent an expresse to Langasaque with letters to Andrea Dittis and Jor. Durons, that I am to goe to Edo to aske justice aganst the Hollanders, and that yf the Chinas will goe up about that matter I will assist them in all I may.

The Hollanders brought in our shipp in a bravado, and shot

offe many guns out of her, and out of their other two. But I had forgotten to note downe how I went to Tonomon Samma, the kinges brother, to desyre hym to let me have a *bongew* to goe aboard thenglish shipp which the Hollanders had taken, to be a witness before themperour what answer they made. But he would let me have no man, saying as yet no shipp was com in, nether had he heard any thing of the matter till now. Soe I returned and sent out Mr. Osterwick, with Mr. Neelson and others, to look upon her, to see yf they could know her or no. But they mett her coming into the roade, and soe returned; only they spoake unto them and bad them welcom, and much good might shee doe them.

But sowne after (two severall tymes) Capt. Speck sent his *jurebasso* unto me to certefie me he was sorry for what had happened, and that the shipp and goodes were at my devotion. I both tymes returned hym thanks: they had pcession, and therefore might make their benefite. Soe in the end he came to thenglish howse, accompanied with Capt. Barkhout and Sr. Albartus, using many complementall wordes, offering the shipp and what was in her at my comand. But you must understand they had well emptied her befor, having byn ij nightes and a day aboard of her before. I made them answer, I was sory for that which was happened, and wished it had not byn soe, and that yt had byn enoffe for them to have taken our shipp and goodes without bringing in of the shippes in such a scornfull sort. He made me answer, they were not in the falt, but them which sent the shipp, nether they in falte, for that they did nothing but what their masters comanded them. "Why then," said I, "yt seemes your mastars comand yow to be comune theevs, to robbe English, Spanish, Portingalles, Chinas, Javas, and all others whatsoever, without respect, and to synk a French shipp going thorow the straites of Sondag, becauce they should not carry news into France of the abuce yow had offered them." These speeche did something move them; soe they answered me that hitherto they had held frendshipp with us, and still would do, till their comanders gave them order to the contrary, and then they would doe as they

in memory of hym as a *came*, or saint, or rather more then a saint, for the *camis* are helde in greate esteeme.

October 2.—We went to dyner to Woiso, where our hostes howse was taken up per the King of Figen. So we dyned at an other place, * * * * *
* * * * * soe our ould sent for me, when the King of Figen was gon. * * * *

V.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.
TOKYO. MDCCCXCIX.
VOL. II. PP. 98.

November 26. [1618]— * * * * *
* * * * *

This day we mett the *Dyres* women going towardes Edo to fetch one of themperours doughters to be married to the *Daire*.

VI.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.
TOKYO. MDCCCXCIX.
VOL. II. PP. 85.

October 17. [1618]—This day was the great feast of Shecco, all the Japon kinges (or *tonos*) viseting themperour with presentes. Soe we could doe nothing at Cort.

VII.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.
TOKYO. MDCCCXCIX.
VOL. II. PP. 87.

October 22. [1618]— * * * * *
* * * * *

Capt. Adames was all day at Cort, expecting answer for our dispach, but did nothing, most of the Councell being gon to honer a pagod where Ogocho Samas was bured, 3 daies journey hence, the

seremony being to be observed the 17th day of this moone after Japon stile, which was the day of this buriall.

October 24.—Not having busynes to doe by meanes the Councell were abcent about seremones of the ould Emperours mortuary, we went and vizeted the pagod of Otongo, * * * * *
* * * * *

VIII.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.
TOKYO. MDCCCXCIX.
VOL. II. PP. 90-91.

October 27. [1618]—Capt. Adams went to Cort about our busynes, and there saw Jno. Yoosen, the Hollander, delivering up a present to themperour and getting out a *goshon*. * * * * *
* * * * *

October 29.— * * * * *
Also he saw Jno. Yoosen, the Hollander, still with his present unreceived, attending their pleasures. * * * * *

IX.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.
TOKYO. MDCCCXCIX.
VOL. II. PP. 91.

October 29. [1618]—Capt. Adames went to castell to have gotten our dispach, but returned without doing any thing, the Emperour being gon to looke on them which shott at blank with hand guns or kalivers. * * * * *

X.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.
TOKYO. MDCCCXCIX.
VOL. II. PP. 60-111.

August 7. [1618]—There came news that a shipp is without, yf not ij, but what they are is not knowne.

he is shortly to goe to the Emperours cort with the *tono* (or king) of Firando his master, whoe (as he sayeth) is to marry themperours kynswoman; but my answer was, I had noe money. * * *

* * * * *
Marche 29.— * * * * *
 * * * * *

And in respect the king is going up to Edo, yt was agreed to geve hym a present of 5 peeces of stufte, viz. damask, velvet, and grogren, severall cullers, bought of China Capt. at 5 *tais* per peece.

Aprill 6.— * * * * *
 * * * * *

Sangero Samma sent to borrow our *foufone* to accompany the kyng on the way, whoe is thought will departe towards Edo to morrow. So I lent yt hym with 15 ores.

News came to towne that the King of Umbras brother is dead (whoe is uncle to King of Firando). So it is thought it will stay his voyag som dayes. * * * * *

* * * * *
Aprill 26.— * * * * *
 * * * * *

Yt is now repoted that the *Tono* (or Kinge) of Firando will not goe to Edo this yeare. Soe he hath geven leave to his hostes son of Osakay to goe his way, whoe a long tyme hath staid to goe along with hym.

May 4.—A brute was geven out the *Tono* (or King) of this place Firando would set forward towards themperours court, and all the boates ready to accompany hym. But it proved but a falce allarom, as divers other tymes hath byn the lyke; only tomake a shew he is a going, for out of dowbt themperour is not without spies in this and all other places.

May 5.— * * * * *

Before nowne the King of Firando went out on his voyage towards Miaco, or to themperours Court. The Hollanders shot affe 5 peeces ordinance at their howse, as the boates passed by; but one

recoyled and strouck up earth and stoanes, and hurt a Hollander very sore which gave fire. There were many barkes went out to accompany hym out of the harbor, and amongst the rest both us and the Hollanders. I carid hym 2 pottell glasse bottles of very good strong annis water, stilled by my selfe heare, and the Hollanders carid a stick or peece of *ginco callamback* (or lignum allois) which I think could not be a *li*. He seemed to be merry, and drunk to us both, with many others.

III.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 85.

October 16. [1618]—We went to see the sepulcre of Ogocho Samma, now new made. A wonderfull peece of work it is, and farr before that of Ticus Samma at Miaco; and neare unto it is an other monument of Sada Dono, father to Codgskin Dono, and a pogo[d] of heathen pristes, with a monument of 2 noble men which kild them selves to accompany Ogocho Samma in an other world, as they think. A servant of Oyen Dono, who kept the monument, made us a colation, and showed us all the singularreties of the place; unto whome we gave an *ichebo*.

IV.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. PP. 58, 81.

July 27. [1618]—Sugean Dono of Umbra sent me a present of millions, and came hym selfe to vize me, using many complementall wordes, and tould me the King of Figen was dead, and he ordayned to goe to his funerall in place of the king of this place, as sent from hym. He saith he was a pagon, and that it is ordayned a new grove shall be erected where his body is to be burned, and a pagod built in it, where devine servis or worship must be donne

DAI NIPPON SHIRYO

(Japanese Historical Materials)

PART XII. VOLUME XXIX.

European Materials

I.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. Pp. 96.

November 17. [1618]—We went to see the Emperours eldest brothers howse, called Shrongo Samma, being envited to doe it per the ould Emperours cook, who sent me a present at Shrongo and came hither and vized me 2 or 3 tymes since with presentes, besides this frenship. So I sent hym a peece of damask for a present.

This howse we saw cost the workmanshipp, besides the tymber and all other stufte, 34000 bars of Oban Gould at 13*l.* 10*s.* str. per bar. And his 2 yonger brothers have made 2 other howses adjoynying unto yt, not much inferior to the others. And it is to be considered that all these buildinges are of tymber, covering and all, but soe gilded over with Gould, both within and without, that it sheweth most gloriouse to the eye, but endureth but 20 or 30 yeares, and then build an other new; which they accompt a greate glory and take it a base thing to dwell in howse builded by his predecessors.

* * * * *

II.

DIARY OF RICHARD COCKS. 1615-1622.

TOKYO. MDCCCXCIX.

VOL. II. Pp. 13, 27, 29, 33, 35-36.

February 9. [1618]—Frost and snow.

Soyemon Dono sent to borow money of me, for that, as he sayeth,

CONTENTS.

	PAGE
I. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	1
II. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	1
III. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	3
IV. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	3
V. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	4
VI. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	4
VII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	4
VIII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	5
IX. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	5
X. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	5
XI. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	44
XII. E. H. Blair and J. A. Robertson, The Philippine Islands. Volume XVIII.	45
XIII. Letter from the Governor-General of the Dutch East Indies to the Directors of the United East India Company. Japara. January 14, 1619.	46
XIV. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	46
XV. E. H. Blair and J. A. Robertson, The Philippine Islands. Volume XVIII.	47
XVI. Letter from J. P. Coen to the Directors of the United East India Company. Bantam. December 18, 1617.	48
XVII. Lettere Annve del Giapone, China, Goa, et Ethiopia degli anni 1615, 1616, 1617, 1618, 1619. Letter from Father Francesco Eugenio to Mutio Vitelleschi, the Father General of the Company of Jesus. Macao. January 21, 1619.	49
XVIII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	53
XIX. Lettere Annve del Giapone, China, Goa, et Ethiopia degli anni 1615, 1616, 1617, 1618, 1619. Relatione d'alcune altre cose notabili occorse nel Giapone.....	54
XX. E. H. Blair and J. A. Robertson, The Philippine Islands. Volume XVIII.	56
XXI. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	58
XXII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	58
XXIII. Diary of Richard Cocks. Volume II.....	59



